



山ざくら

第20号

平成元年5月

関東氷上郷友会



渡辺紙工業株式会社

取締役社長 岡崎昌三

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店工場	東京都足立区中央本町 5 丁目 22 番 12 号 Tel 849—6611(代)
〃 関宿工場	千葉県東葛飾郡関宿町大字台町 2192 番 Tel 0471—96—1721(代)
東京支店営業所	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 8 F> Tel 861—2331(代)
名古屋支店工場	名古屋市西区又穂町 3 丁目 13 番地 Tel 521—8111(代)
大阪支店 工場	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
九州支店 工場	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳 884 番 1 号 Tel 09297—6—2211(代)



渡辺製袋株式会社

代表取締役 前田次郎

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 11 F> Tel 5687—6481(代)
大阪支店	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
藤岡工場	栃木県下都賀郡藤岡町藤岡 4938 番地 Tel 0282—62—3321(代)
兵庫工場	兵庫県加古郡稲美町蛸草 1438—1 番地 Tel 0794—95—0257(代)

山
ざ
ら

第
20
号



山さる 第20号 目次

表紙絵……………常岡幹彦画『おぼろ』……………昭和62年作	
短歌・ふるさとにて……………音無多美子……………4	
心の故郷をなくする日本人……………村上末吉……………5	
昭和六十三年度総会・祝寿会・懇親会……………7	
歌人・上田三四二さん死去……………10	
上田三四二君をしのぶ……………中井良平……………10	
上田三四二君を悼む……………藤田正雄……………12	
丹波の現況と展望・ホロンピアから森づくりへ……………日原 昶……………13	
春日局とわが故郷……………村上久夫……………20	
方言一言……………足立源治……………23	
△特集▽ わが青春のふるさと	
たんたんと生きる人生八合目……………足立 治……………26	
昭和 あのことろ……………生田清弘……………27	
柏原中学の思い出……………中井良平……………30	
私の昭和史……………若森敏郎……………31	
私の青春と母校……………高田美佐子……………33	

青春虚実・流れ去った日々……………	田中篤郎……………	35
帰ろうかな懐しの山川へ……………	田中憲雄……………	39
ふるさとに寄せて……………	上野重喜……………	41
ふるさとで歌う喜び……………	足立さつき……………	43
台北故宮博物院を見学して……………	藤田正雄……………	44
健康歳時記……………	坂本重雄……………	47
仁王さんから学ぶ……………	堀井隆川……………	49
△出版△	松山確郎著『私の中学校・高等学校』……………	53
△寄付者芳名録△……………		54
△氷上ゴルフ同好会報告△……………		55
△氷上囲碁会報告△……………		56
△揭示板△……………		56
△訃報△……………		58
△会計報告△……………		59
'88丹波の動き……………		60
△お便り・短信△……………		70
△消息△……………		78
△協賛広告△……………		83
△編集後記△……………		100

ふるさと

音無多美子

看病にしばらく居ればふるさとは あたたかかりき去り難かりき

ふるさとの歳末売出し日出かければ 甘酒サービスに足の止まり

(黒井の誓文私)

ふるさとの産土神に初詣で 申しわけなし五十年ぶり

乙女の頃を思ひ出でつつふるさとの 堤の桜見て歩きけり (新川の桜)

五月雨に花つぎつぎと咲き出でて 先に住みいし人のしのばる

農家より新じゃが玉ねぎたまわりしを 天ぷらにすれば小気味よくはね

五十年ぶり母校ある柏原に降り立てば さま変りしいて興奮さめし

グランドの真中を懸命に毛虫這う 遠き道のり行き先は知らず

心の故郷をなくする日本人

関東氷上郷友会

会長 村上末吉



会員の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。関東氷上郷友会はここに「山ざる」第二十号を発行して、全会員のお手もとへお届けする次第です。この「山ざる」を編集し、発送してくださった担当の方々に感謝すると共に、手を携えて喜びの声をかけたいと思います。

「心の故郷をなくする日本人」という私たちに痛いことをいうのは、コロンビア大学名誉教授のサイデンステッカーさんです。小林秀雄さんが「故郷を失った文学」というエッセイを書いたのは、すでに昭和の初年です。文学に限らず、日本人の心から故郷がなくなりつつあることは否定できません。故郷は単なる情緒の場所ではなくて、本来は文化生産の拠点です。故郷のない人間が、国際的にも通用するでしょうか。

……サイデンステッカーさんは毎日新聞紙上で自分の考えをこう述べています。

春日町の黒井では、NHKのドラマ春日局が放送される機会に（この原稿は一月二十日ごろ書いたもの）大勢の団体が押し寄せて、保月城跡や興禅寺に人気集中だそうです。そのこと事態うれしいことです。しかし半年たち、一年も過ぎるとまた元の静けさに返ることでしょう。それはNHKのドラマという他力によってスポットライトを当てられてクロージアアップしたものです。長い歴史、伝統の重さによって地域文化的に湧出したものではないと思うからです。郷土のものが誇りと自信をもっていれば、急激には有名にならなくても、一過性の流行で終ることはないと思うのは私一人ではないでしょう。

春日局が産声を上げた所は、四力所あるそうです。それは、岐阜県揖斐川町の白檜城。亀岡市の亀山城。大津市の坂本城。そして春日町黒井の保月城下興禅寺で、誰も特定はできないようです。ただ、興禅寺には「お福産湯の井戸」や「お福腰掛石」等があって、一番史実が整っているようなので、原作者橋田寿賀子氏は黒井を最も有力な場所としており、他を否定はしていないようです。

丹波にはこの他に数多くの歴史的史実が存在しており、地域文化を形成してきた古跡や風土が満ち溢れているといえるでしょう。そしてもっと氷上の人々をはぐくんできた身近かな自然は、それらの文化の所産だといえます。故郷の土、水、

空、山そして空気。雑草、樹々、小魚、螢、鳥……。学校、神社、寺、墓……。家、親兄弟、言葉、着物、畳、建具、カマド、流し、井戸、土間……。兄弟げんか、通学、集会、行事、祭り、盆、正月……。等々人間として生まれ故郷で育てられ、故郷の長い歴史の空気を吸ってきました。その体の中の血には古い故郷の霊が宿されており、その文化は一朝にして成り立ったものでないことは言うまでもありません。この事實は誰も否定できないと思います。

氷上郷友会の方々が忙しい東京にいて、同郷なるが故に懐しく、生れた場所が同じだから意義があるのではなくて、歴史と伝統を持った丹波の地に育ち、知らず知らずの間に同じ文化、同じ風土を身につけている者同志だということに新しい価値を見いだすからだと思います。

ふるさととは懐しいものとか、故郷は遠きにありて思うもの等という言葉がありますが、故郷を懐しく思うのは情緒ではなく、我が身の血のできた所だし、魂を育ててくれた文化生産の地だからと思っています。

最近故郷へ帰ってみると、アスファルト道路が発達し、家は建て替えられ、昔の風景は一変しています。しかし、川が流れを変えたわけではないし、山の形が変わったわけでもありません。昔の雑草は何の変化もないかのように昔のままであります。墓参りをしていると思うのは、墓は少しも変わらないアとい

うことです。たしかに老人は亡くなられ、世代は替りますが、墓は昔と少しも変わっていません。

故郷にあるすべてのものは、語る言葉にも風俗、習慣等に至るまで、何百年、何千年を経過して引継がれた伝統があり、文化の源泉だと言わざるを得ません。従って故郷をもう一度見直して、故郷の文化生産地に自信をよみがえらせ、誇りを持つようにしたいものだと思います。

「温故知新」という温故は古いことをよく研究するという意味よりも、故郷の良さを心に受けとめて、母の温みのような潤いをその中に感じて、新しい知識を得るように努めることだと解釈します。私たちは故郷を大切にこれを次の世代に引き継ぐ必要があります。そのために私たち自身が故郷をこよなく愛し、理解しなければなりません。

関東氷上郷友会はこれから七、八年後に創立一〇〇周年を迎えることになります。当会の在り方や位置づけを考えると共に、郷友会として何が出来、どんな価値を見いだせるかじっくり練るとともに、故郷とのつながりを密にして、会員諸兄の人生に少しでもプラスになれば幸甚の至ります。



昭和六十三年年度総会・祝寿会・懇親会

昭和六十三年年度総会、祝寿会及び懇親会は十一月五日(土)、九段会館に於いて開催された。参加者は来賓を含めて八十名、まずまずのにぎわいであった。

総会は坂上理事の司会で進められた。当年度は会運営上きわだった問題もなく、また参加者からの緊急動議もなかった。案件審議は省略され、足立和巳会計理事からの会計報告、吉住重造監事の会計監査報告、坂上理事からの会務報告がそれぞれ行われて、滞りなく閉会した。

○

続いて、長寿会員を祝う祝寿会に移った。本年祝寿を申し上げたのは、明治四十一年生れの方々で、上田正巳殿(柏原町)、佐々木盛雄殿(春日町)、関正治殿(山南町)、林谷集殿(氷上町)、横山幸三殿(青垣町)の五名であった。

出席は佐々木盛雄殿のみ

村上会長から祝詞とともに記念品が贈られたが、謝辞に立たれた佐々木盛雄氏はなお意気軒昂で「今日の祝寿をひとつのはげみとして、さらにライフ・ワーク完遂への意欲を燃や

したい」と力強くあいさつ。会場から温かい称賛の拍手を浴びた。

○

懇親会は村上会長あいさつのあと、来賓代表の小森建吉水上町長より郷里の近況報告をかねた祝詞をいただいた。続いて、村上久夫氏から昭和六十四年度のNHK大河ドラマの題材に採りあげられた「春日局」にまつわる春日町関係者の苦労話の披露があり、町おこしのために常日ごろ腐心されている郷里の人達の真剣な姿が、ユーモラスな語り口の中にも感じられ、ふるさとへのいとしみの思いもひとしおであった。

また幕を閉じたばかりのホロニアについても、こもごも語られるなど、いつになく郷里の話題の豊富な懇親会であった。

そのうえ、岡田一男氏(春日町・大和実業社長)の肝いりで、数年ぶりにミュージックサルーン「ザ・トップクラブ」のお嬢さん達のナツ・メロ・コーラスが演じられ会はいよいよにぎやかに盛りあがっていった。

飲むほどに食うほどにとびかう丹波弁は熱を運び、いっきよに何十年のタイム・トンネルをくぐり抜けて、土のにおいのなつかしい校庭や、森の香りのただよう峠の道がそこに現われる。しばし九段会館は不老長寿の桃源郷と化すのである。いつ果てるともしれないおしゃべりの輪にさらに楽しいユ



祝寿を受けた佐々木盛雄氏（向って右）と梶原清氏

メを投げ込むのが、恒例の「お楽しみプレゼント抽選会」である。こゝ数年、すっかりおなじみになって「これを楽しみに」会へ出席しているというひともあるほど。飲み食いとはともかく、この景品だけでも会に出た甲斐があることうけあいである。平成元年の総会にも、挙って参会されんことを期待する。

今回の景品と寄贈者はつぎの通り。

△山ざる賞▽

一等△山の芋二Kg

二等△黒大豆の丹波煮びん詰

参加賞△黒大豆布袋入五〇〇g

△会員賞▽△順不同

明日香園賞△池畑豪士郎氏 お茶

ホンゴ出版賞△池田忍氏 自分史ノート

ノーブルスター賞△吉住重造氏 長袖ポロシャツ

宮野賞△宮野近氏 七宝焼ネックレス

二玄社賞△渡辺隆男氏 名画複製

伴仲賞△伴仲和子氏 甲州ぶどう

可部賞△可部美智子氏 陶彫人形

つるや賞△足立三治氏 洋服生地一着分

春日賞△春日町 大納言小豆箱入

鶴田賞△鶴田宏・ゆき子氏 明治ミルクチョコレート

十本
十本
全員

五本
五本
十本
五本
五本
五本
五本
三本
二本
十本
百枚

なお、ご来賓の方々及び岡田一男氏（当日欠席）からは懇親会へのご祝儀として金一封を頂戴した。深く感謝申し上げます。次第である。

午後四時、司会者の音頭でお手を拝借三本締め。一同思ひ出を刻んだ会場をあとにした。

昭和六十三年度関東氷上郷友会出席者（町別、敬称略、順不同）

△来賓

参議院議員梶原清 氷上町長小森建吉 同議会議長山口茂
氷上高校長柳田昌三 柏陵同窓会長吉見文憲 兵庫県事務
所長北村信二郎

△祝寿

佐々木盛雄

△一般会員

◎青垣町（九名）

足立和巳 足立三治 足立多鶴子 足立源治 大竹博美

小寺堯代子 安原三智子

◎市島町（十一名）

大槻作治郎 大野茂 荻野一雄 木村つた江 近藤勇 須

原清 田中篤郎 鶴田ゆき子 能勢孝一 能勢恵美子 余
田士郎

◎柏原町（十五名）

井上悦子 上山顯 小田富士夫 加賀山次郎 小谷正雄
志村勝郎 菅野きぬゑ 谷達雄 谷垣正雄 常岡幹彦 出
町京子 宮野近 山田淑子 可部美智子 沢田みさを

◎春日町（十四名）

足立石蔵 足立さつき 足立昌彦 木呂子恵美子 近藤勇
夫 中西育代 波多洋三 畑秀夫 船越祥郎 水船隆昌
（ほか一名） 村上久夫 村上末吉 吉住重造

◎山南町（八名）

池田忍 梶原やす子 後藤美紀子 清水正男 田中寛 東
田実 深田浩嗣 渡辺貴美子

◎氷上町（十三名）

足立順治 足立稔 秋元多美子 葦田有功 安達健一郎
安達陽一 安達博子 上野重喜 門尾賢一 坂上勝朗 新
田浩迪 渡辺隆男 谷垣宏造

◎黒田庄町

笹倉郁子 藤田正雄

◎東京

伴仲和子

歌人・上田三四二さん死去



ガンを病みながら、思索に富んだ創作活動が続けていた歌人で文芸評論家の上田三四二さん（うえだ・みよじ）が、八日午後七時三十分、大腸ガンのため、東京都東村山市の結核予防会保生園病院で死去した。六十五歳。

故人の遺志により、葬儀、告別式は行わない。自宅は清瀬市梅園二のの一。喪主は長男、仁（まさし）氏。

兵庫県小野市出身。京大医学部卒。結核医として療養所などに勤める傍ら、作歌や評論を続け、昭和三十六年、「斎藤茂吉論」で群像新人賞を受賞。以後、歌集「湧井」「遊行」で超空賞、日本歌人クラブ賞、短編小説集「惜身命」で芸術選奨文部大臣賞、評論集「この世この生」で読売文学賞を受け、六十二年まで数年間、歌会始の選者も務めた。

同四十一年に結腸ガンの手術、五十九年にはボウコウガンで生死の境をさまよった。昨年四月に川端康成文学賞を受け

た「祝婚」では、残された生を肯定し、静かに受け止めようとする心境を淡々とつづっていた。（平成元年一月九日読売新聞夕刊より）

上田三四二君をしのぶ

中 井 良 平（柏原町）

上田三四二君は柏原中学以来の親友である。筆を執ってみると、彼との接触は極めて少い。それにもかかわらず「親友だ」と思わせる不思議な魅力を彼は持っていた。

昭和天皇の崩御の習日、彼の死亡記事が新聞各紙に出た。遂にこの日が来たか。わたくしの第一感はそのようであった。友の長命を祈る一方で彼の長い闘病生活を知っているわたしとしては覚悟していたことである。それにしても、長年歌会始の選者を奉仕していた彼が陛下の崩御を待って辞世したことは偶然ではないような気がする。

新聞は彼の歌人としての、思想家としての、医師としての功績を讃えているが（彼の歌集や著書に対して芸術院賞、野間文学賞等あまたの賞が贈られている）、その方面について門外漢であるわたしは言及できないのが残念である。新聞で

は故人の遺志により葬儀は行わない由とあったが、親友に最後の別れを告げるべく社内会議と出張の合間を縫って清瀬の国立病院近くの御宅を訪問した。予定が変って葬儀の準備がしてあったが、式の開始前の忙しい時に霊前に拝礼することを許して貰った。歌人らしいぼさぼさ頭の彼の写真に別れを告げた後、未亡人と二人の子息と瞬時の会談をした。わたしは驚いた。三人は最愛の夫・父をなくした悲哀や長期の看病による疲労が見えない穏やかな顔なのである。内心それがあつたはずなのにそれが表に出ていないのである。わたしはそこに彼の心、彼の感化を見た。

それは昭和六十年一月十八日の会であつた（これが彼と会つた最後であつた）。昭和十八年前後に旧制第三高等学校を卒業した連中が毎月十八日に日本橋で昼食を共にし卓話を聞く例になっていて、この日彼が「私の死生観」というのをつかえがちに話したのである。それは歌人として、兼好や西行や良寛を追跡した上に、彼が医師として、患者の、特に自身自身二度にわたる瀕死の病床に在って死を直視した立場から到達した心境を話したものであつた。死と正面から対決して得た透徹した死生観であつた。安逸をむさばる一般人が、死を考えることから逃避した、ケセラセラではなかつた。また、老人じみた諦観でもない。

わたしにも死を考えなければならぬ場合があつた。戦時

中わたしは特攻兵器の特殊潜航艇を志願した。また、潜航訓練中に数時間も海中に沈没したまま浮上に苦闘した体験もある。その時わたしは血気にはやつた訳でもないし死の恐怖感におののいていたのでもなかつた。ただ自然にそういうなりゆきになつたのである。死というものに冷徹に思いが至らなかつた。だからこの日の彼の死生観に深い感銘を受け、遠く及ばない境地を感じたのであつた。その彼の透徹した思いが妻子に通じてあの穏やかな顔となつたのであろう。

話はさかのぼる。彼とわたしは柏原中学の三年から五年まで同級であつた。父君が新井小学校の校長の時期で、伊丹中学から転校してきた。勉強は常に首席を争う一人であつたし、学科はまんべんなくよく出来たが、わたしは何故か彼は国語が好きらしいと感じていた。田舎中学生らしい粗野さは無く、端正で、教練のサーベル姿がよく似合っていた。

中学を卒業した年の四月、彼とわたしは三高の校庭で出くわした。「おまえも入つたのか」二人は互にそう言い合つた。あの当時、上級進学希望者は少なく、わたしも家業を継ぐことになつていたので、お互いに志望校を確かめ合うことなどはしなかつたからである。彼は理科、わたしは文科。教室は違ふし、彼は間もなく病気で休学してしまつた。正に遊学で京都の四季を満喫したわたしと違って、彼は如何にも三高生らしく深い思索に明け暮れた結果であつた。（しかしこれは

後年彼が歌人として大成する基となったと思う。一字一語を吟味する和歌には彼のこのような深い追求態度は有用である。加えて大東亜戦争によって文科のわたしは戦争に狩り出された。終戦後も勉学地は彼は京都、わたしは東京。選んだ職業も彼は医師、わたしは銀行員で転勤が多く、二人の交際は途絶え、かろうじて会報で消息を知るのみであった。

その後、ちょうど十年前、彼が新聞のコラムにわたしのことを書いたことから往来が始まった。といっても彼は病身で自重していたから、わたしが彼を訪問したのが二度、後は簡単な電話だけであった。それでいて親友という感じを受けるのは、彼が誠実な人柄であり、穏和で心に暖いものがあつたからである。歌壇や画壇等では派閥が多いのであるが、ほとんど独立独歩でやって来た彼が多く、支持者を得て、歌会始の選者になったのがそれを物語っている。惜しい人物をなくしたが、彼としては納得のいった生涯であつたと思う。

上田三四二君を悼む

藤田 正雄（黒田庄町）

上田三四二君が柏原中学四年に転入学したのは、昭和十四年四月であつた。伊丹中学では首席で通した秀才という評判

で、優等生の間では大いに話題になったようである。元来勉強が嫌いで、好き勝手なことに熱中していた体育優等生の私には、興味もなければ関心もなかった。教室の中での彼は多分物静かで、少年らしいけん騒の外にいたのではなからうか、穏やかで真面目そうな少年という印象しかない。彼が教室のどの辺りにいたのか、それも定かではない。近くの席でなかつたことは確かである。

五年に進級してクラスは別れたが、うわさにたがわず、彼は級長を勤めていた。在学中、私は言葉を交わすことはあつても、親しく話したという記憶はない。話らしい話しをしたのは、受験に失敗して予備校に入るため上京する夜汽車の中であつた。彼は三高の学科試験に合格し、面接と身体検査の結果を待つ間に、滑り止めに医科大学を受験するため、上京するところであつた。

三等車の堅い座席で眠れぬままに、長い道中を語り明かした。率直で暖かな心遣いに、いい男だなあと感謝の心を抱いたことを覚えていいる。受験勉強について、これから本格的に取り組もうとする私には大変参考になることが多かった。この一年間、万年床にして疲れればそのまま横になり、寝衣を着て眠つたことはない、などとたんたんとした口調で話してくれた。それから二十数年が過ぎた。戦後、私が進学した大学の医学部に、彼も在学していたことを後になって知つたが、

会うことはなかった。

四十年代に入り、戦後の混乱もようやく治まり、それまでほとんど交渉のなかった在京のクラスメートとも時々会合するようになった。上田君が顔を見せたのはそんな時であった。群像新人賞をとり、文学的才能の花を咲かせ始めていた。しかし、肉体的には腸がんにおかされ、手術後の回復期とはいえ、いつ再発するか分からぬ大変な時期であった。昔と変わらぬ静かで穏やかな風ぼうと態度、暗さも焦りも気負いもなく一日一日を一生懸命に生きたいという言葉、いかにも上田君らしかった。命をみつめ、死と対決したこの二十年間、魂の結晶とも言うべき数々の作品を残して彼は今、昭和の終えんと共に六十五年の生を終えた。

友というにはあまりにも淡い交わりであった。五十九年の二度目の大手術の後には外出もままならぬ状態になっていた。仕事の邪魔にならぬかと気遣いながら二、三度「優游居」を訪ねた。変わらぬ物腰と、病人とは思えぬ和やかでゆったりした優游の笑顔で歓迎してくれた。落差の激しい狂瀾の昭和を、時代の波にはんろうされることなく、冷静に着実に一筋の道を歩み続けた孤高の人生に感動する一人として、心からの哀悼をささげる。

丹波の現況と展望

ホロンピアから森づくりへ

日 原

昶 (丹波新聞社)

今、丹波では「森づくり」——21世紀に向けての新しい地域づくりへの取り組みが始まっている。「丹波の森構想」は、ひょうご88北摂・丹波の祭典(ホロンピア'88)後、いわゆるポスト祭典のプロジェクトとして浮上してきた。

「森づくり」の引き金となった祭典は氷上郡(六町)と多紀郡(四町)それに三田市と美嚢郡吉川町を加えた舞鶴自動車道沿線、北摂・丹波地域の一市十一町を舞台に、昨年四月から十一月まで開かれた。二百四日間にわたる超ロングランだった。舞鶴自動車道の県内完成、JR福知山線の複線電化で、阪神大都市圏と一気に結びついた丹波地域。都市と農村のあり方を、もういちど問い直し、新しい田園文化都市を探っていくというもので、一カ所集中型でない、広域的な生活圏づくりへのスタートの意味を込めて開催された。

丹波は、阪神大都市圏からわずか五十〜七十キロという近距離にありながら、経済、文化、生活の面において都市との大きなギャップがある。昔は京の都から遠く離れた山奥にあ

る丹波、今でも丹波は山奥の代名詞のようにいわれるが、交通網、とりわけ道路整備の遅れが都市との格差を広げる要因となっていた。「よき道ゆけばよき里あり」「道は文化のパロメーター」といわれる。舞鶴自動車道は着工以来七年の歳月をかけて昨年三月、県内全線が開通した。中国自動車道と連結する吉川町を起点にし、三田市、多紀郡丹南町、西紀町、水上郡春日町、市島町を経て、京都府福知山市を結ぶ延長五十三・五キロの高速自動車道。丹波から阪神都心部へ約一時間で行けることになり、丹波も高速道時代に入った。

舞鶴自動車道の建設と並行して進められたJR福知山線宝塚―福知山―山陰本線城崎間の電化はひと足先に完成しており、昭和六十一年十一月一日から供用された。電化開業によって、丹波から都心部までの所要時間はこれまでより短縮。柏原―大阪間で普通の場合、約二十五分短縮し、およそ二時間に。従来の急行に変わって増発された特急は、それまでの急行とくらべ同区間で約二十三分短縮し、一時間二十二分になった。時間短縮をもたらした電化開業ではあったが、丹波では篠山口まで、さらに福知山までの複線電化を念願としてきただけに、今ひとつ反応が鈍いのが実情である。

しかし丹波は福知山線の電化、舞鶴自動車道の開通という二大プロジェクトの完成によって大きな飛躍のときを迎えた。その出発点を祝って開かれたのが「ひょうご88北摂・丹波の

祭典」(ホロンピア⁸⁸)。二つの幹線交通網の整備を契機に、豊かな自然と田園と、優れた都市機能が調和した「新しい田園文化都市」の創造を目指す第一歩の試みであった。

祭典は、四月十七日から十一月六日まで、延べ二百四日間、一市十一町の祭典会場で、合計百四十三のイベントが展開された。「21世紀・公園都市博覧会」「ひょうご88食と緑の博覧会」と二つのビッグな博覧会をはじめ、「21世紀をになう青少年祭」「都市アメニティひょうご国際会議」「大丹波焼展と現代に生きる六古窯展」「田園交響芸術祭」「兵庫県芸能文化祭」「新しい健康福祉づくり展」「ひょうご健康福祉祭」といった大会やシンポジウムなど、健康、福祉、芸術、文化のイベント、それに各町で開催のふるさとイベントを加え、春から夏へ、そして秋にかけて開催時期をリレーし、イベントのテーマにそって開催市町を替えて実施された。国際色豊かなイベントから、全国レベルの博覧会、ローカルの色濃いものまで、教育、文化、産業、福祉、あるいは公園、都市をテーマにビッグに、ユニークに、またカラフルに繰り広げられた。総来場者は二百四十七万人を超え、目標としてきた百七十万人を大きく上回った。また、スポーツ、観光、レクリエーションで北摂・丹波を訪ねた人々は、平年より二割近くも多く、祭典参加者と合わせると、来場者総計は五百三十万人に達した。その五〇・五%が丹波地域で、祭典は大成のうちに



全国レベルに成長した兵庫県青垣もみじの里健康マラソン大会

幕を閉じた。

丹波にとって今回の祭典は先例を見ない大きなイベントであった。貝原俊民兵庫県知事は「新しい時代に向かって、地域づくりに取り組む住民全体の意識づくり、あすの丹波への方向づけをするのに「まつり」は有効である」と。

祭典期間中、氷上郡の各町では数々のイベントが展開された。柏原町では「県立丹波年輪の里・クラフト創造遊苑」が完成したのに続いて、クラフト創造のつどい（彫刻展）や21世紀をになうチビッ子祭り、囲碁かいばら大会、ホロンピアゲートボール大会、巨木を語ろう全国フォーラム、全国ウッドクラフト公募展、ひょうご演劇街道、全国健康福祉祭ベタUNK大会など十四の町イベントを実施、氷上町は「水分れ（みわかれ）公園」の開園式でスタート、川と野と文化を考えるシンポジウム「水分れのまちサミット」や水分れのまち物産展、氷の川いかだ下りなど七つのホロンピアイベントと十五の関連イベントを展開。青垣町は町の特色を生かした森林浴場「青垣の杜（もり）」を整備するとともに、岩屋山頂まで六キロの登山道をカラー舗装し、全国レベルでのハングライダー大会や青垣二〇〇一年日本画展、青垣ふれ愛ウォークラリー、子午線ヤングフェスティバル、兵庫青垣もみじの里健康マラソン大会などを繰り広げた。

春日町は新装なった町文化ホールを核にして「ふるさと丹

波〃絵画展や深尾須磨子生誕百年祭、黒井城と出城まつり、春日局（かすがのつぼね）生誕地祭の開催、遊農園かすが開園式、春日戦国太鼓の創設などを実施。山南町は古くからの薬草生産団地を背景に漢方の里づくりを推進。その拠点施設として薬草薬樹公園を設置、不老長寿をめざす漢方の祭典を開催し、日中漢方国際交流を進めたほか、町民健康まつり、県民ふれあいまつりなどを開催。市島町は十年がかりで整備した白鳳時代の史跡・三ッ塚史跡公園と、完成したばかりのふれあいセンター愛育館を主会場に、ボランティアアフエスタ、ひょうご保育フェスティバルなど六つの健康福祉祭のイベントをはじめ、三ッ塚マラソン大会、三ッ塚花しょうぶまつりなどを展開した。

これらのイベントを通じて、柏原町は伝統と歴史を誇る織田藩の城下町、水上町は日本一低い中央分水界をもつ水分けのまち、青垣町は文化とスポーツで町おこし、春日町は春日局生誕の地、山南町は不老長寿を願う漢方の里、市島町は新しい健康福祉システムに力を注ぐ愛育の町、といったように各町のイメージがはっきりとしてきた。春日町のテンペ（大豆発酵食品）や山南町の漢方薬製品のようにいろいろな特産物を産み出した。また、市島町で実施した外国人留学生をホームステイさせる「あぜ道交流」事業や、丹波とウイーン市との間でもちあがった姉妹都市提携の話、山南町の日中漢方

国際交流事業など、丹波を舞台にした国際交流が広がった。多くの人が全国からはもとより、外国からも丹波の地を訪れ、丹波のイメージアップに大きなメリットがあった。イベントについての考え方にしても「単なるまつりイベントでなく活性化するもの」と認識が変わってきたし、イベントに参加することによって、やればできるという自信と連帯感が深まった。なにより丹波の人たちが心を寄せ合い、地域づくり、活性化に取り組む気運が高まったことは見逃せない。

丹波が活性化するための課題の一つに高齢化対策がある。わが国の人口の高齢化の推移をみると、大正九年（昭和三十年）の老年人口比率（六十五歳以上の人口割）は五割内外だったが、昭和四十五年に七・一％、六十年に一〇・三％、六十二年には一一・二％と急上昇、今後さらに上昇し平成二十三年には二三・六％に達する。この人口高齢化の要因は出生率と死亡率の低下によるもの。大正九年の人口千人に対する普通出生率は三六・二％、これが昭和十五年に二九・四％、同六十二年には一一・一％に低下。普通死亡率（人口千対）は大正九年に二五・四％だったのが昭和二十二年に一四・六％、六十一年には六・二％に低下。死亡率の低下に伴い平均寿命が伸び、昭和十年の平均寿命、男子四十六・九二歳、女子四十九・六三歳が六十二年には男子七十五・六一歳、女子八十一・三九歳と世界最高水準に。まさしく人生五十年時代から

人生八十年の長寿社会へと突入している。

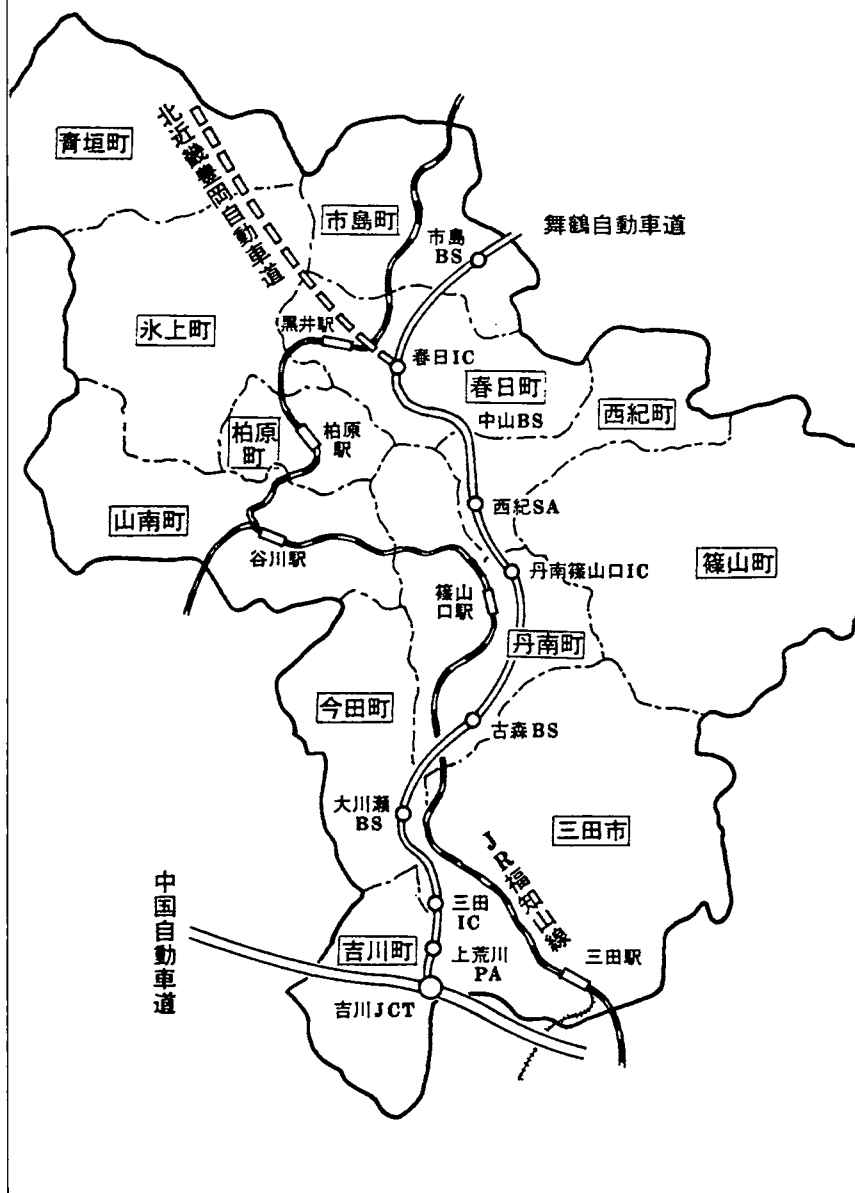
氷上郡の老年人口比率は昨年一月末現在で一七・五％、これが六年後には二〇％を超えることになり、全国の二十年後を先取りした形で急速に高齢化が進む。若者のふるさと離れが高齢化に拍車をかける格好になっている。若い人がいない丹波は活力を失う。活性化と定住社会の構築は丹波がかかえる最大の課題といえる。

ハイウェイ・舞鶴自動車道は開通したが、単なる「丹波通過道」になってはならないし、祭典は成功裡に終わったが、「一過性」のものであってはならない。祭典で結集したエネルギーを、あすの地域づくりに、ふるさと丹波の活性化にどのように生かしていくのか。ポスト祭典のプロジェクトとして浮上したのが「丹波の森構想」である。丹波の全面積の七五％近くを山林で占めている。阪神大都市の近距離にありながら、これほど自然が残存するところは珍しい。緑豊かな山と田園が広がる美しい自然を背景に、すばらしい伝統文化を育んできた。丹波全域を「丹波の森」と位置づけ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを進めていこうというのが「丹波の森構想」である。昨年十一月には住民組織の丹波の森協会が設立され、各町の行政と連動し個性的で魅力的なふるさとづくりを進めていこうと意欲を燃やしている。

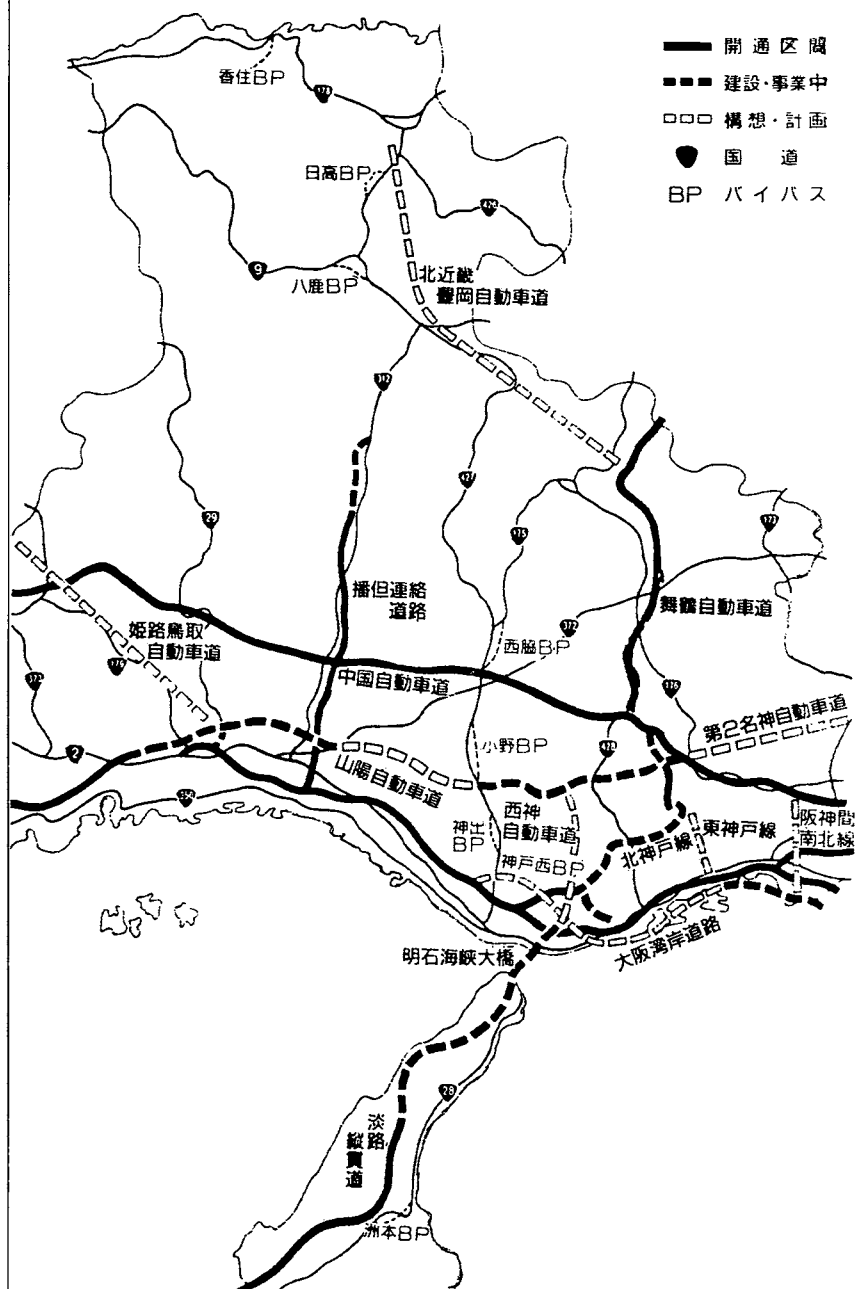


舞鶴自動車道 春日町多利・日が奥トンネル附近

北摂・丹波地域略図



県内道路整備計画の概要図



春日局とわが故郷

村 上 久 夫（春日町）

朝廷につくす さむらいと

おみな春日の まごころは

これぞ 祖先の心意気

堅忍持久は われらが想い

いざや ゆかん 心は強し

これは旧黒井尋常高等小学校校歌の第二節である。昭和の初めごろより歌われたものであり、私も故郷を思うとき、保月城趾の城山の姿を思い浮べこの校歌を口ずさみ、幼時を懐かしむことがある。「朝廷につくす武士」とは勤皇の志士片山九一郎のことであり、「おみな春日」とはいま話題の女性「春日局」のことで、郷土の偉人として歌い込まれたものである。私は幼いころ、興禅寺がだんなであつたせいか、祖父母から春日局という偉い女の人が黒井の興禅寺で生まれたということをたびたび教えられ、またこの校歌をうたうことで子供心に一種の誇りのようなものを感じていた記憶がある。もちろん、当時は彼女がいかなる女性であつたか深く知

る由もなかった。

春日局は幼名をお福といい、明智光秀の重臣斎藤藏之助利三を父とし、美濃三人衆の一人であつた稲葉一徹の娘おあん——一徹の姪ともいわれる——を母として、天正七年（一五七九）に現在の春日町黒井の曹洞宗大梅山興禅寺で生まれたと伝えられている。

天文二十三年（一五五四）赤井悪右衛門直正が黒井城主となり、建武二年（一三三五）赤松貞範（則村の二男）が築いた簡素な小城を大改築して本格的な山城とし、二十万石相当の勢力を有して中国の毛利氏と盟を結んで織田信長に対抗していた。天正三年（一五七五）天下布武を進めていた信長は明智光秀に丹波攻略を命じた。しかし丹波の国人衆の抵抗は激しく、なかでも八上城（多紀郡）の波多野秀治と黒井城の赤井直正の備えは堅く「赤井の呼び込み戦法」によって苦戦を強いられ、天正七年（一五七九）三度目の総攻撃でようやく黒井城は落城した。その戦後処理のため、明智光秀から二万石を与えられた斎藤利三が黒井城代となり西丹波の経営に当つた。現在の市島町の白毫寺に、利三が天正八年七月門前地下中にあてた「軍役用捨」の下知状が残っている。

利三は、城下の下やかた（現在の興禅寺境内）に近江の坂本城下に居た妻子を呼び寄せ、ここを陣屋として民政の安定・向上に努め、善政をしいたので戦火を避けて他の地に移つ

ていた領民達もぞくぞくと帰って来て、黒井の城下にもようやく平和がよみがえり、再び活気を取り戻した。保月城を背に満々と水をたたえた七間堀、高石垣と白い練り堀に囲まれたすばらしい環境のこの下やかたで、天正七年にお福は生まれた。お福は両親の深い愛情を受け、やかたの広い庭や城下の野山を格好の遊び場として成長し、「斎藤屋敷のお福様」と呼ばれて領民たちからかわいがられたという。今も興禅寺の境内にはよちよち歩きのお福が腰かけたという「お福石」が残っており「お福産湯の井戸」といわれる井戸もある。天正十年、四歳の春、お福は父の亀山城移封によって黒井を去り、やがて亀山城で運命の日を迎える。

春日局（お福）の出生については、その没年——寛永二十年（一六四三）——と年齢（六十五歳）より逆算して天正七年に生まれたとされているが、資料が乏しく確定することが難しいのが事実である。昨年、NHKが大河ドラマ「春日局」の制作を発表するや、出生地としてまず春日町が名のりをあげ、次いで大垣市、揖斐川町がわが町こそと少ない資料を根拠に相次いで登場して来た。春日町については前述のとおりであるが、大垣市には、利三が明智光秀の前に家老として仕えた稲葉一徹の居城曾根城の跡があり、そのそばに利三の屋敷跡が残っていることを根拠にしている。揖斐川町では斎藤氏の居城白樫城跡があり「局田」の地名を伝える所があ

ることなどをあげている。このほかに大津の坂本城で生まれたという説もある。

昨年来出版界でも春日局をテーマにした小説、解説書、雑誌等がブームに乗り遅れじと次々に出版され、その数も三十種におよび、書店には春日局コーナーが設けられているほどである。それらを見ると、史実に乏しくなぞの部分が多い四歳までについて全くふれていないものもあるが、出生地を春日町黒井説を取るものが最も多いのは大いに意を強くするものである。

特に春日局出生について書かれた唯一の資料といわれる「臼杵市立図書館所蔵の臼杵稲葉家の御家系典」には丹波氷川郡春日井庄を生誕地として明記してあると「考証春日局」の著者高橋富雄、林美一の両氏は指摘している。また、大日本女性人名辞書、コンサイス地名辞典、兵庫県郷土読本（昭和初期の小学校歴史副読本）、興禅寺文書等にも出生地として春日町が明記されている。

大河ドラマ「春日局」の脚本を担当する作家の橋田壽賀子さんも、昨年三月に現地取材のため春日町を訪れたとき、興禅寺の庭に立って「春日局の生涯で一番穏やかな時代、唯一の平和な時代はこの春日の郷の下やかた時代ではなかったか」と話している。

歴史学者の樋口清之博士はその著書の中で「歴史は客観的

事実以上に事実を超越した主観的事実によって創りあげられるものであり、その意味で伝説伝承さらに神話の持つ意味は貴重かつ重大である」と述べられているが、春日町に我々の祖先より代々受け継がれてきた「春日局出生の伝承」は郷土史のページとして重視されるべきであり、いつまでも継承されるべきものと思う。

天正十年（一五八二）六月、本能寺の変で織田信長を討った明智光秀は、この変事を知って急ぎよ毛利氏と講和を結んだ豊臣秀吉の「中国大返し」と呼ばれる猛スピードの帰還作戦により山崎の合戦に敗れ、いわゆる「三日天下」に終わった。斎藤利三も捕えられて光秀と共に粟田口で処刑された。母、おあんに連れられて亀山城を落ちのびたお福は、追っ手をしてのぶ逃亡者として苦難の旅路が始まったのである。やがて秀吉の下に天下が統一され、世の中も落ち着き、お福も美濃の祖父稲葉一徹に引き取られて成人し、小早川秀秋の家老稲葉正成に嫁する。慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の合戦を経て世は徳川家康の時代となり、お福も五万石の家老の妻としてしばらくは平穏な日々であった。しかし、慶長七年夫正成は主君秀秋との間がままならず小早川家を飛び出し浪人の身となつて美濃に退くこととなる。慶長九年、故あってお福は正成と離婚し、その後、將軍家に徳川秀忠の二男竹千代（家光）の乳母として勤めることとなる。

家光の乳母となったお福は家康、秀忠に格別の信頼を受け、単に乳を与えるばかりでなく、父母の愛が薄かった家光に母親に代って、平和を愛する人間として教育に心血を注いだのである。家光には帝王学を教え、彼をとりまく幼い小姓たちには将来幕閣の重臣として、將軍を補佐するに足る素養と、献身の思想を教育したのである。家光が三代將軍となるや大奥取締り、將軍相談役として政治の場でも大きな影響力を持ち、強固な政治体制を作り、朝廷との関係修復にも大いに政治的手腕を発揮して徳川幕府体制の基礎を固めた。現代ではイギリスのサッチャー首相、フィリピンのアキノ大統領など、政治のひのき舞台で男性以上の活躍をしている女性がいるが、江戸時代の日本にも表面にこそ出ていないが彼女らに勝るとも劣らぬスーパーレディがいたのである。

戦時中の一時期、春日局については朝廷をないがしろにした権力志向のいやな烈女、悪女のイメージを植えつけられたが、幼いころに戦争の悲惨さを知り尽くした彼女の生涯は愛と献身に貫かれ、ひたすら平和を愛した誠実な女性であった。お福は寛永六年（一六二九）後水尾天皇より従三位に叙され「春日局」の称号を賜り、寛永十三年には従二位に昇叙されている。

以上春日局の出生を主として、この度NHKと春日町との橋渡し役を果たすについて学び、教えられたことの概略を拙

筆を顧みず書きつづてきたが、私にとって郷土史研究の面白さ、楽しさを知ったことは何よりの収穫であり、喜びであった。

昨年三月NHKドラマ班の「春日局」制作スタッフが作家の橋田壽賀子さんと共に現地取材に春日町を訪れたのを機に、我が故郷春日町は「春日局生誕の地」として真っ先に名をのりあげ、'88ホロンピアのメインイベントとして十月末には「春日局生誕地祭」を盛大に催したのである。

十月二十三日から十一月五日まで、オープンしたばかりの町立文化ホールで、東京・京都の麟祥院より借りた春日局愛用の手鏡、硯箱などの遺品や斉藤利三にかかわる古文書、NHKのドラマ撮影中のスナップ写真などを展示した「春日局展」を開催した。十一月二十七、八日はNHKのカメラマン一行が来町し、保月城趾、興禅寺、黒井駅はじめ商店街、町並み等を撮影した。この時の一部は第二回（一月十五日）に放映された。二十九日には大河ドラマ「春日局」のチーフプロデューサー渋谷康生氏、原作者で脚本を書いた作家の橋田壽賀子さん、ドラマで家康の側室お勝の方として出演する女優の東てる美さん、制作デスクの江端二郎氏の四氏の豪華顔合わせによる対談「春日局を語る」会を、更に三十日には興禅寺において「春日局をしのぶ茶会」を東てる美さんのサイン会と併せ催した。この一連の催しはいずれも大成功に終わ

り、町の活性化運動の一つとして好調な滑り出しとなった。

これらの催しは新聞、テレビで大きく報道され、以来、興禅寺へは各地より多くの人々が訪れており、今年になってドラマの放映が始まるやますます増加し、休日には大型観光バスが十台余も来る日があるとのことである。これが一時的なもので終わることなく、多くの貴重な文化財を有する氷上郡内の社寺を包含した新しい史跡巡りの観光コースが確定され、これによって、大いに郷土が振興することを期待している。また、この春日局ブームを一つの契機として郷土の人々も、他郷に在る者も改めて郷土の歴史に目を向け、ふるさとの再発見をされることを願ってやまない。

方言一言

足立源治（青垣町）

年をとっていちばんつらいことは、「孤独感」や「疎外感」に悩まされることやそうです。だあれしも話し相手のおらんところで、ひとりでじいっと、刻々迫って来るXデイにおびえながらただなんこのうこまで来た道を振り返る毎日、こんな日の繰り返しは考えるだけでもゾツとします。こんな例は一メートルを隔てるだけの隣家とさえ往来のない都会砂漠の

中には珍しくないそうです。これがまんだ、生まれ育った故郷やったら、たった一人でも、山にも川にも語りかける喜びもあんのになあと思います。

こういう人にだれか故郷なまりの方言の話し相手が現れたら、いっぺんに今までの孤独感なんか吹っ飛ばやるな、とも思います。

氷上の人たちは、「ナシタ どくしよな話や、とつてもないこっちゃナア」とあきれまっしゃろ。

ここ2・3号にわたって、氷上の方言の実用編を自分なりに思い出し、あるいは記録をみたりして書きました。「もう分った、ひっこめ」ゆわれんさきにこの辺でおいとましますけど、ほんまに、氷上の言葉を思うことは、氷上を思うこと、子供のころを思うこととおんなじことなんです。

「あいつは、ほんまにしようないやっちゃ、ほろくに仕事もさらさんで、毎日毎日、やつすばかり、そこらじゅうホラ、ホラ、ウロウロしくさって、なんしてけつかんのかナア、おとつあんのむかわりも済まんちゅうのにナア、だれどおに頼んで、しょうね入れかえてもらわんとあかんで、ホンマニ、わしらあ、みとるだけで、てんころでドたまのひとつもどついたらかおもうで、もちもおろしもならんゆうたらあいつのこっちゃ」

「そんなにホタエたらあかん、風邪ひいとるちゅうのに。先生がじっとねとらんと肺炎になって死んでしまうゆうとってたで。」

「そんでももう熱さがったもん、もうなあってもた。」

「ドレドレ、まんださがとおへん、さがとるどこやあらへんで、デボチンがあつういわ、赤い顔しとってやないか、サアふとんかぶってじっとおしてねとれ。」

「うち、熱下がっとなると思うけど、ホンナラ計ってみよか、もし下がったたらなにくれてん。」

「げんこつ、ひとつ、あげるわあ」

「ホナ やめとこ。あほらしい。」

「マア、いまこっちへ帰っとなああんノ、ひいさん顔みいしまへんだけど息災にしとんなあたけ。あんた どだい やせとんなあるナア どこぞぐあいかわるまんのか。」

「ヘエ きょうねん ひどうわずらいましてナア シジツしたりしたもんやさかい 十二キロもやせましたんや、骨と皮だあな」

「まあ ちゃっとも知らなんだ、どこ シリツしなはったん、もうどうもごだへんけ あんばよう なんなはあったけ」

「かんぞう切ったり、胆のう取ったり、サツパリ わやだア、とうとう胆のうのない男になってしもて」

「なしたことだっしやいな、エライ災難だしたなあ あん
たは昔からよう飲みよんなあったさかい ちつとは その方
もてつとりまっしやる。」

「そうだとす 飲み過ぎだすわあ もうええかげんにせえよ、
ゆうて肝臓が怒りよりましてナア 正月あけごろからだした
なア、胃の辺りにさし込んできよりましてなア、ソラ 痛い
の痛うないのチュウたつてどだいお話になりまへんわア、そ
れこサ、疊をササラにするいいまっしやる、ちょうど あ
れだんなア、それから 大水が引くように痛みがのうなると、
なんちゅうらくなんやる、おもたりしてネ ちいとまらくや
なあおもとると、またじきに痛うなつてきよるんです。もう
心の中で、助けてくれエ、もう、二度とやぶやたけのこゆわ
しまへんさかい、これなおしてくれたら 不公平税制どこか、
医者から税金とらんようにしたるさかい、ナンチュウことを
叫んどったんですわあ。」

「そうだったか、なした気の毒な、それでもそんだけ丈夫そ
うになつとんなはるさかい もう安心でわナア、ほんでも、
もうあんまり飲みなはんナヨ」

△私のメモ帳より▽

。ばいだす 。だんない 。かまへん 。かいさま 。メン
メ 。よさり 。ばんげ 。もういのか 。まんだいなへん
。もつとおつてか 。きづつない 。ぐつわるい 。いっち

。げん。げんのものや、げんくそわるい 。ちんこい 。ちんまい
。さらす 。してこます 。そうだつせ 。そうだつか
。けつわる 。けつふく 。オナメ・コットイ 。コートな
(地味な) 。ひぼ 。しゆむ 。さばえる 。じょうさん
。じょうし 。あいさに 。けしずみ 。けつすみ 。ひけ
しつぽ 。からけし 。はしり 。ながたん 。ちよびつと
。ちよろこい 。ちよろまかす 。ちよろくさい 。ほかす
。のどく 。のぞ 。ねらむ 。かざかいどる 。ええかざ
しとる 。せいてせかん 。はしかい 。まるこい 。ひや
こい 。しがむ 。しがんだれ 。ちようずつかう 。こう
つと 。ホケかける 。ホケかます 。ごきんとうな 。い
のかす 。いかき 。いどこ 。きびしよ 。ふっきん
。あさい(味) 。いかめい 。おとがい 。ごんべ 。ご
んたれ 。さんこ 。げすいた 。かいどり 。おもて
。おえ 。ぐろた 。こうざいな 。しやつちもない・らつ
しもない・さつちもない 。しっぽり(遅くまで) 。めぐ
(こわす) 。やつと・ようけ 。ゆきひら 。ほげたたたく
。みそたれ(みぞれ) 。じゆるい 。じるい 。泣きべす
。くずや 。ぬりや 。下駄のはま 。ふなめ(桑の実)
。ふけ(深場) 。ばんこ 。めいた 。もむない 。もみ
ない 。いもら 。ばばしち 。ぎんた

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

汀女

特集 わが青春のふるさと

たんたんとききる人生八合目

足立 治（青垣町）



私が東京の船会社に就職したのは昭和八年の夏二十一歳の時でした。やがて起きた日中戦争、続く太平洋戦争中は陸軍輸送船で活躍、幾度となく死線を乗り越え九死に一生を得て函館で終戦を迎えました。ここでソ連よ

りの引き揚げ業務を仰せ付けられ東京に戻ったのは二十四年、三十七歳の時です。

当時は海運再建の仕事で手一杯、また若いせいもあって正直なところ「ふるさと」のことまで考える余裕はありませんでした。

ところが二十八年一月、京橋の片倉に勤めていた足立禎次君から氷上郷友会のことを聞き、連れられて行ったのが新橋駅二階の日本食堂でした。ここで丹波直送の「ボタンなべ」をつづいたのが入会のきっかけです。

足立三治先輩に初めてお会いしたのもこの時で、感激はひとしおでした。

さて四十歳も半ばを過ぎると時々「ふるさと」のクラスメートを懐しく思い出すようになり一度会いたくて三十五年正月、山垣報恩寺の堀住職に連絡したところ早速OKをもらい、在郷の七人と三十四年振りにお寺で再会、わんぱく時代の思い出話に一夜を過ごしました。禎次君はその後山垣に帰郷され、私も停年を機に相模原に移りましたが文通だけは続けておりましたところ、五十三年七月和田山の観光パレスで第一回のクラス会を開くとの連絡を受けました。しかしこの時は残念ながら行けず、電話出席ということで皆さんと親しく話をしました。

第二回目は翌年六月、市原の「あまごの家」で開かれ、こ

の時初めて出席しました。中には小卒以来五十四年振りで会う顔もありましたが、さすが年は隠せても幼いころの面影を消すことは出来ず、一目見た瞬間誰だか分かりました。

その後暫くとぎれていましたが、五十七年一月佐治建設会館で古希の祝いのクラス会があり、久し振りで出席しましたが、大分人数の減りが目立ちました。年ごとに懐かしい顔が消えて行くことは大変さみしい思いですが、人生にはリミットの あることを忘れず、余白のある限り頑張りたいと願っております。

さて今年は喜の字の祝いクラス会があることと思います。果して何人が顔を見せてくれるか心待ちにしています。

郷友会にもここ数年失礼しておりますが、そのうちお伺いしたいと存じております。

末筆ながら郷友会のご発展と会員の皆様のご健康を心からお祈り申し上げます。

振り向けば遠く来たりし冬木立

(七十七歳)



昭和 あのことろ

生 田 清 弘 (柏原町)



関西を離れて東京に住むようになってから今年で三十五年になるが、東京の生活の方が長くなった。

また、社会人となってからは、戦中、戦後にかけて昭和の激動期を歩んで来たが、その昭和も

今年の初めに終り、平成元年を迎えて新しい歴史が始まった。私どもの年代にとっては戦中はもちろんのこと、戦後は復興、再建のために夢中になって働き、あまり他を顧みる余裕はなかった。それが今こうして昭和を静かに振り返り、また、幼少のころはぐくんでくれた故郷のたたずまいなどを思い出しているのも一時代が終ったという感慨であろうか、また六十五歳を迎える歳の故であろうか。

私は柏原町の出身で崇広小学校、旧制柏原中学に学んだが、最近帰省するたびに感じることは自然の様子は昔と変わらないにしても、学校をはじめ、道路や町並みは随分変わったと思う。

また、立派な各種の施設も出来、郷土が発展している様子がうかがわれて、大いに意を強くしている次第である。

福知山までの高速道路の開通で、東京から郷里まで高速ドライブを楽しみながら帰れるようになったし、福知山線も電化され、特急の増発などで阪神地方との往復も便利になったことはご同慶の至りである。

私は下小倉から毎日歩いて通学したが、その道路も今は立派になり、車の往来も激しくなった。中学のころはカーキ色の制服に肩からかばんを掛け、足にはゲートルを巻いて走って通ったものだ。運動のためといえば格好よく聞かえるが、毎日遅刻しそうになって止むを得ず走ったのが真相だ。

しかし、この駆け足には余禄があった。毎日毎日繰り返し運動はそれなりに心身を鍛えていくものだと思う。というのも私はこのころマラソンが得意になり、年に一、二度全校マラソンが行われていたが、大抵五位以内で走破し、時には優勝も経験した。おかげで機械体操などは下手であったが、体操の評価はいつも「甲」をもらっていた。またこの体験が後の軍隊生活でも役立った。

身体を鍛えたといえばマラソンばかりでなくテニスも役立っている。テニスは見ているとあまり感じないが、かなりハードなスポーツで球を追い走り回る間に鍛えられていく。海軍予備学生時代には罰をくらってよく飛行場を何周か走らさ

れたが、一向苦痛を覚えたことはなかった。

中学では団対抗の運動会のことを思い出す。中央団、校南団、校西団、校北団といい、四つのグループに分かれて技を競ったものだが、競技そのものの盛り上がりもさることながら各応援団の気合いの入れようが大変で、運動会が近づくと毎日応援歌の練習で上級生にしごかれたものだ。こんな思い出が街を歩いているとよみがえってきた。

私どもの学生時代は世相を反映して工科を志す者が多かったが、在学中は勤労動員あり、教練ありで慌ただしい日を送ったが、それでも良く勉強したといえるだろう。数十年前ぶりに母校（京都工繊大）を訪れてみた。昔は松ヶ崎は工芸分野のみであったが、今では繊維学部もいっしょになり、わずかに旧本館が昔の面影をとどめるほかはすっかり近代的なキャンパスに変貌していた。

卒業と同時に川西航空機（現新明和工業）に入社した。本社は鳴尾製作所とともに兵庫県鳴尾村にあったが、当時の鳴尾はいちめんいちご畑であり、畑の中に工場や社員寮などが散在していた。そのころ、会社では二式飛行艇や紫電改を生産していて、私は紫電改の強度試験係に配属されて毎日が緊張の連続であった。従業員、徴用工、女子挺身隊など数万人に及ぶ人々が昼夜を分かたず働いていた姿が浮んでくる。戦後は近くに行くことはあってもとの工場跡に行く機会がなく、

噂でいろいろ聞いていただけであった。昨年、娘たちが武庫川団地に住むようになったのを機に行ってみたが、昔の形跡は全く無く、高層住宅や工業団地や港などこれまたすっかり様変わりしており、わずかに当時をしのぶすがとしては昔懐かしい武庫川線の「すぎき」という名前くらいであった。長い年月を経ており、戦後の目覚ましい発展を思えば当然すぎる風景かも知れない。

入社間もなく飛行機整備第十期海軍予備学生として厚木にあった第二相模野海軍航空隊に入隊し、短期の集中訓練を受けたが、厚木では地中に壕を掘りその中で寝る毎日であった。その後、愛知県の碧南にあった東海海軍航空隊明治基地で終戦を迎えた。終戦の日は奇しくも私は当直将校であり、隊員と共に玉音放送を聞いたことが印象に残っている。昨年、機会があつて旧基地を訪ねたが、若い世代の人々に問いかけても基地を知る人はなく、ちょうど居合わせたお年寄りに尋ねて、やっとこの辺りが基地であつたこと、滑走路は今では田畑になっていることなどを知ると共に、掩体壕えんたいごうの一部と見られる盛り土が、説明を聞いてそれと気付いたことであつた。何十年もたつて訪れるとしばらく住んでいたところも驚くことばかりである。それだけ世の中がスピードを増して変化しているあかしでもあらう。人生の後半を送っている東京はその中にいてさえ「ずいぶん変わったなあ」と思うことがしば

しばである。外から離れて見れば一層の変りように戸惑いを感ずるのは当然であらう。

最近の動きは一層めまぐるしい。それは目に映る光景ばかりでなく技術の著しい進歩と共に、より高度な、より快適な環境の実現をもたらし、私どもの住む地域社会もますます大きな変化を遂げていくことであらう。

半ば回想録のようになってしまったが、思いつくままに筆を運んだ。

私には柏原に老母がいるが、いつも郷里の皆様には大変お世話になっており、紙上をお借りして厚く御礼申し上げます。昨年はその母と孫たちといっしょに丹波年輪の里を訪ね、工作教室で楽しい一時を過ごした。今年は春日局で丹波も人気になることであらう。

○

○

○

柏原中学の思い出 (昭和十一年～十六年)

中井良平 (柏原町)



ちょうどいい、この五月に講談社から出版される予定の単行本小説「友達が大切」(仮題)の第一章バーのシーンで書いたのを借用しよう。

「ねえ、都会の中学から山奥の中学に転校したときは驚いたでしょう。まわりが山猿ばかりで？」

彼女は、その中学の同窓会雑誌の名前が「山ざる」というのを知っていて、巧みに話題にしているのである。

「そうだよ、園芸の授業に炭焼きがあるし、体育の時間にうさぎ狩りがあったよ、驚いたなあ！」

「ほんと？ねえ、うさぎ狩りってどうするの？教えて」
都会の現代人である彼女には、童話の世界である。

「全校でやるんだよ。一年生から三年生までが勢子で五年生がそのリーダー。一斉に大声を挙げて棒切れで草むらをとたきながら山の上から下に追い立てる。慌てて逃げ出してく

るうさぎを、下で四年生が網を張って待ち受けているんだ」と、彼は山の上下を手で示しながら説明する。

柏原中学の思い出はこういうのが多い。

当時、受験雑誌に「考え方」というのがあって、クラスのだれかがその雑誌の好成績者欄に掲載され学校別にも集計される。どうした拍子か上位校に入り、皆が面白半分に頑張ったので全国第二位になり、大層な賞品がわれわれが卒業した後送られてきたそうだ。グライダーだったとか後輩がいていたが、全く記憶にはない。勉強の方の思い出は、これくらいしかない。

生徒の校外自治活動のために分団が組織されていて、校南、校西、校北、それに地元の柏原の中央の四団があり、秋の全校運動会は分団対抗になっていた。それぞれの応援歌は六太学等の替え歌だったが、中央団の予備の応援歌は「校〇の馬鹿野郎、柳の毛虫、焼いて粉にして尻で飛ばせ、チャカホイ」という、いささか下品なものだった。

年に二回、一、二年生は八千メートル、三年生以上は一万五千メートルの長距離走があり、クラス対抗で総員の走破タイムを集計して順位を決めた。欠場者はペナルティのタイムが加算された。当時、運動で県下に柏原中学の名前が知られていたのは長距離走だけだった。

長距離走は校西団の中に強い者が多かった。中央団は徒歩、

校南、校北団は汽車通学、校西団は自転車通学だった。校西団で上位を目指す連中は、通学の往復にいいトレーニング方法をやっていた。同じように自転車通学する女学生（当時は男子の中学校と一丁程離れた所に女学校があった）の自転車の荷物台に自分の通学かばんを投げて載せ、女学生の逃げる後を追った。女学生も、男のかばんを投げ棄てればいいのだが、怖さと面白さと半分半分で男生徒の前をペタルを踏んでいた。

上級生下級生の区別は厳しく、中央団では早朝訓練と称して上級生が召集し、神社の清掃や応援歌の練習をした。一方で上級生はポケットマネーを出し合って、町の知り合いの店からパンやアイスキャンデーを格安で買い、下級生に配った。最上級生になったとき、町長に町有林の下草刈り奉仕を申し出て、下級生を督励して見事に仕上げた。町長は感激して相應の志をくれた。われわれは刈り取った柴を束にして家の前に置き一束何銭かで町の人に売った金と、その町長の志を、乏しいポケットマネーの不足に充てる作戦であったのである。ときどき、有名な先輩が姿を見せ、講演会があった。三回生の芦田均氏（後の総理大臣）や九回生の大西滝治郎氏（後の海軍特攻隊の産みの親）の記憶がある。県下でも誇るべき中学だと、印象づけられた。学校を卒業して実業界に入っても、先輩に有名人が意外に多いのに驚いている。

私の昭和史

若 森 敏 郎（山南町北太田）

昭和天皇が崩御遊ばされた昭和六十四年一月七日と平成元年一月八日の両日、世界の報道は一斉に昭和時代を回顧し、テレビでも各界の方々の「私の昭和史」が放映された。私にとっても、この二日間は「私の昭和史」を回顧するのに意義深い二日間であった。

昭和時代の幕が開く約三ヶ月前に誕生した私が、物心ついた時には、日本は既に戦争中にあつた。

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃のニュース映画を見たり、開戦の詔勅を奉読して、中学三年生の私は、忠君愛国に自分を駆り立てた。

戦局の劣勢は嚴重な報道管制のもとで知る由もない。ただ敗戦の日まで天皇陛下の赤子^{せきし}としての教育と訓練を受けてきた。もう半年も戦争が長引いておれば、私は漁船を徴用した海防艦に乗組んで日本の沿岸警備に当たり、確実に米国潜水艦のえじきになっていたに相違ない。

陛下の玉音放送は雑音でよく聴き取れなかったが、これだ明日から訓練が無くなるな、と思ったのが実感であった。

敗戦後約半年は故郷に引きこもっていたが、青春の血をしずめる術もなく、再び上京することとした。配給の煙草はすべて食糧に変わった。また、アルバイトに神田の露天で部品を集めてラヂオを組立てた。

経済の復興は電源の拡充にありとの政策から、電源開発促進法が制定され、国策会社である電源開発株式会社が設立されたのは昭和二十七年九月であった。

私は学業を終えると、何のためらいもなく、電力技術者への道を選択した。以来今日まで電力開発と共に歩んできた。

初めの十年間は水力発電所の建設時代であった。豪雪の新潟県中魚沼郡入広瀬村の黒又川建設所が、私に与えられた最初の建設現場であった。引き続いて奥只見、大鳥と現場は変っても、相変らずの豪雪地帯であった。

今でこそ、奥只見は春山スキーマッカとなり、開発が進んでいるが、当時は木造の仮合宿で、丈余の雪に埋まり、昼間も電灯を必要とする氷室の中の生活であった。

しかし、厳冬の苦労は早春のブナの芽吹きのスッキリさに償われて、建設スケジュールは着々と進んだ。建設が完了し、通水により轟音とともに水力発電が開始され、電力が需要地に送り出される感激は、体験して初めて味わえる歓喜であった。

昭和三十九年末に、雪の新潟を離れて、平家の落人伝説と

魚梁瀬杉で名高い高知県の奈半利川建設所に転勤、豪雪の代りに台風の襲来との闘いが始まった。

発電所完成と共に、奈半利川水系の三発電所の保守を担当することになり、台風時のダム放流が地方の施設に被害を与えないように、また、水路トンネル掘削のズリが流出して、農地に被害を与えないようにと願う日々が続いた。不幸にして、この心配は昭和四十六年の集中豪雨で現実のものとなった。人畜に被害はなかったが、ユズ畑と農地に被害が発生した。素人ながらも、責任者として補償交渉の矢面に立った。また、ダムに乗用車ごと転落したドライバーの遺体引き揚げのために、ダムの水を抜け、抜かぬ、で村当局と苦しい交渉をしたこともあった。ダムの水を抜けば、長期にわたってヘドロが流出し、奈半利川の環境が破壊され深刻な公害問題を引き起したに相違ない。幸い遺体は収容できて、交渉は終了した。

建設の華やかさに比べると、保守の仕事は地味ではあるが、腰を落着けて現地の人とつきあうことにより、人情の機微に触れ、人生修業で得難い体験が得られるものである。

昭和四十七年からは一転して、京浜地区の産業の大動脈である送電線と変電所の保守業務を担当することになった。

当時、日本は高度成長期で、停電は許されず、事故の防止に苦勞した。また、送電鉄塔の近傍の土砂が大きく採取され、

鉄塔倒壊を招く危険があり、緊急に鉄塔の移設工事を実施したこともしばしばであった。

電力需要の急速な増大に対処して、設備の増設・改良工事が必要となり、多忙を極め、かつ、責任の重い職場であった。

ようやく国内の大規模水力開発が一段落した昭和四十八年ごろからは、海外に対する技術協力の仕事为国策として推進されるようになった。私も政府から専門家として、ラオス、フィリピン、ベネズエラなどに派遣された。また、民間コンサルタントとして、トルコ共和国の水力開発に関係し、三年四ヶ月間、トルコの首都アンカラに駐在した。以来、現在まで電力開発のコンサルタントの仕事が続けている。

産業基盤を確立するためには、その国の電力供給を安定させることは、最重要項目の一つである。従って、電力開発コンサルタントとしての私の仕事も今後ますます重要になってくる。また、開発途上国に日本の援助で建設された発電設備も、そろそろ改修の時期にきているので、リハビリテーションの計画も推進する必要がある。プロジェクトによっては、完成後日が浅くても、手を加える必要のある虚弱体質のものもあり、この改善計画も重要である。

このように、私の昭和史は電力技術者としての活動に終始した。あと暫くは今の仕事を継続して、開発途上国のために尽したいと考えている。

私の青春と母校

高田 美佐子（柏原町）



“わが青春のふるさと”というテーマに、ハタと困った。私の青春といっても四十余年も前のことだ。たしかに、青春時代に得たものや受けたものが、その後の私の人生や人間形成に大きく、深くかわった事は事実

である。では、何がどんな形で——と自問してみるが、しかとはつかめない。ぐっと絞って先生方や、仲よしグループ、時代から受けた影響は大きい。先生から教室を離れて個々に受けたものの考え方や感性的なものには、楽しく貴重なものが多かった。今でもその当時の先生方の顔が浮かんでくる。その最たる人・谷垣俊雄先生から今年も年賀状を頂いた。仲よしグループのことに触れれば、キリがない程多彩を極める。でも今回は心象的なことでなく現象的なことだけにする。それでなければ何枚あっても足りないし、私にそれだけの筆力もない。

四十数年というところ、その歳月は長い。どう長いかというと、大概の事を忘れてしまっているということだ。前後の脈絡がなく部分的に鮮明に覚えていることもあるが、大方はうすぎぬのペールを透したようにおぼろげで影絵のようである。ちょっと手をかけて調べたり、確かめれば明確になるのに、それもやらない。そんなことをしていれば、だんだん書くのが嫌になってくるから。私を子宮的だといった人がいた。

私たちの世代はみな同じような苦しい体験をした。女学校三年生の時、敗戦になった。混乱と飢餓の中にあった。しかしまだ子どもだったからか、そんなに悲壮感が残っていない。その分、父母が苦勞してくれていたのだ。

直撃を受けたのは、学制改革によってである。六・三・三制ができ、新制中学、新制高校となり、帝大が廃止され、新制大学が乱立した。そのうえ、男女共学というそれまでは考えられなかった異変も生じた。PTAだ、生徒会だ、と付録もついた。大きな渦がぐるぐると回っていた。

私たち、兵庫県立柏原高等女学校も新制高校へ移行のため、柏原中学に同居することになった。それは大変なことであった。一つの校舎が両校の生徒で膨れあがったこと、男女共学という戸惑い。両方の先生がいっしょになったが、私たちに中学の先生は名前も顔も知らないし、なじめない。女学校で卒業してしまう人、高校三年生に編入される人。PTAが

できるという。意味は分っても内容は分らない……。

集会（討論会）もあった。騒然としていた。私たち三年生は、女学校と中学の両方でクラスが一つずつしかなかったから男女別にクラスをもった。過渡期でもあり、一年間だけの共学であった。しかし、ヒゲの生えなかったオッサンみたいな男の子には気味悪い思いもあった。二年生以下は男女いっしょのクラスが幾つかできた。

そういうなかで、どんな経過があったのか、生徒会の自治憲章の草案を作るグループができた。男子生徒には森本さん、小田富士夫さん、畑郁夫さん、女子では上田加世子さん、牧吉子さん、そして私。一年生は覚えていない。

放課後、暮れなずむ教室で、時には夕方、灯のつくころまで毎日議論し、考え方を整理し、一言一句吟味しあい、分担しあって総則から各章まで作りあげていった。あの時の純粹に、ひたむきに、情熱を打ち込んだ姿は、今思っても尊い。ただひたすら真剣に取り組んだことが青春そのものだった、と思う。

そのころ、よく全校生徒が集っているところで、壇上に立って何かを訴えたことがある。中身は覚えていない。ただ、私は進駐軍払い下げのズボンをコゲ茶色に染め直して、本庄てる子さんと数人のグループで同じものをはいて得意がっていた。それをはいて壇上に上っていたことだけは覚えて

いる。モンペ姿から脱皮して、いかにもカッコいいモダンな気がしていた。

それから何年たったころだろうか。偶然、東京に帰る汽車の中でいっしょになった青年がいた。その青年は、話しているうちに、私のはるか下の卒業生であることが分った。彼から、あの生徒会憲章に触れられ、「あれは大変よくできたものでした。あの後もほとんど修正されず、そのまま生きています」と聞いた時、起草グループの一人としてたいへん嬉しく、誇らしく思った。果して今はどうなっているだろうか。

世の中は変った。風俗、習慣、生活文化、価値観すべてひっくり返るほど変った。私自身も変った。でも、人間の本质まで変っただろうか。丹波の里で培われ養われた情緒や価値観まで変っただろうか。私は変っていないと思う。いつまでもヘソの緒のようにくっついて生き続けていると思う。

青春虚実——流れ去った日々——

田 中 篤 郎（市島町）

九州一周の調査の旅は月ごとに報告書を出すことが決っていたから、月末には京都に帰り、報告を済ませて、また翌月の初めに旅に出るという繰り返しだった。そうした旅も回を重ねて、もう五回目に入っていた。そして、いつしか季節は晩秋にかかっていた。

回を重ねていくうちに、旅慣れて、次第に飽きがき、うつろなものが心の中に生じ、そこに旅の浮き寝のわびしさと疲れがしのび込み、何かしらいらだってくる。それを紛らせるかのように道草がだんだんはげしくなっていた。

その日も、かつて旧海軍の艦隊碇泊地だったS市に心ひかれ、つわものどもが夢の跡を見て回ったが、涙するほどの感慨はなかった。が、何がしかの愁いみたいなものが心によどみ、思いの晴れぬまま、疲れきって、日暮れ時、M市の町はずれのO旅館に入った。この町にきて以来、ここを定宿にして泊っていた。

書類の整理を済ませて、帳場に酒を頼んだ。間もなくCちゃんというこの宿のお手伝いさんが酒を持って上って来た。

Cちゃんは、年のころは三十にもなろうか、美人とはいえないが、明るく素直な娘で、顔なじみではあったが、あまり言葉を交わしたこともないままに、いつしか親しみを感じるようになってはいた。

Cちゃんと、ふた言み言、世間話をしている間も、どうぞといいながら酌をしてくれていたが、そのうち席を立つていった。

秋寒むの夜更けの独り酒は、酒が体にしみるにつれて、仕事と道草との疲れの得るせいもあるうか、悲しみを帯びたわびしさが心に広がる。秋という季節がそうさせるのか、裸電球の貧しい光に染められた部屋に沈んでいると果てしない郷愁の波が心を揺さぶる。

早く世を去った母が秋のくるたびに、「秋は葉が落ちて寂しくなるから、いやじゃ、花の咲く春がよい、春が待ち遠しいことじゃ」とよく言っていた言葉が遠い記憶の底からよみがえってくる。そう言っていた母は秋に逝った。

秋寒むのそぞろ寂しい他郷の宿の貧しい灯の下で、その言葉を思い出しているおのが身がただだかなしかった。

あれや、これや、と突き上げてくる胸のつかえを酒で流しこんでいるとき、物干場の方から何かうた声が聞えてきた。

耳をすますと、歌声の主はCちゃんのようなうただった。

歌詞はよく分らなかったが、町外れの宿の、貧しい灯の下

で、酒を飲みながら聞いていると、いいような寂しさが心にしみてくる。声を抑えて、細く低く、とつとつとうたい、最後は長く尾を引き、うたい上げて終った。なんとも切ない調べだった。秋も深まった夜更けに聞くには、あまりにもわびしいうたであったが、何故かこのうたには何度でも聞きたいような思いにさせるものがあつた。

干し物が終つたのか、降りてくる気配がしたので部屋から顔を出して、酒の追加を頼み、ついでに今し方うたっていたうたは？と聞くと、いまのうたは「刈干切唄」という民謡だよ、と言った。手が空いていたなら、「もっと聞かせてよ」と頼むと、Cちゃんは「いいですよ」と気軽に引き受けて降りていった。

改めて酒を飲み直しながらCちゃんのうたに聞き入った。目を閉じて聞いていると哀調を帯びた「刈干切唄」の向うに、風にそよいでいるいちめん枯れ薄に覆われた原野の姿が浮んでくる。

へもはや日暮れじや 迫々きこさてかげるよー

駒よいぬるぞ 馬草負えよー

酔の深まりと「刈干切唄」の悲しい調べとが結びついて、いまの自分が、風にふるえながらゆれている一本の枯れ薄の

ように思えてきて、たとえようもない寂しさに包まれる。

うたの合い間に、何処のうたかと問うと、Cちゃんの生れ在所からずっと奥に入った土地のうただ、と言った。

Cちゃんが生れた土地はM市から西北にバスで三時間以上もかかる高千穂地方の中心地K市の外れの集落で、このうたの本場はそこから更に奥に入った土地でうたわれている民謡だとのことであった。今は誰れでも知っているほど有名になっているが、その当時は、その道の人のほかにはほとんど知られていなかったように思う。

明るい太陽の下で穏やかな日々の暮しが流れているように見える南九州市のM市で、こんな悲しいうたに出会うとは夢にも思わなかった。二度三度と繰り返される名調子に聞き入りながら、ふと、その山里まではともかくとして、K市まで行ってみよう、との思いが心中をよぎった。

うたをひとまずおさめて、Cちゃんの生れ育った土地のことや、K市の様子を聞きながら徳利を差すと、Cちゃんはなかなかいける口で、すすめるといくらでも干した。酒が入ったせいか、口も滑らかになって、いろいろな話をしてくれた。Cちゃんの話によると「刈干切唄」は幼いときから耳に親しんで育ったから、誰れに教えてもらったということもなく、自然に覚えてうたえるようになったとか。しかし、人前できちんとうたえるようになったのは、この宿に来る前、K市の

小さな宿で働いていたときそのお婆さんがそれは上手なうたい手で、改めて教えてもらったからだと言った。

Cちゃんのもの悲しいうたい振りもよかったが、本場に近いうたで、Cちゃんの先生でもあるお婆さんのうたを聞けば、また違った味わいもあるかと思いつつ、「その宿は今もあるのか」、「お婆さんは今もお達者なのか」と尋ねると、

「元気で手伝っていますよ」と言った。宿や道順をていねいに聞き、また、何度も二人でうたを口ずさみながら、酒とうたと、初めて聞く話のうちに、秋の夜は更けていった。

昼過ぎにK市行きのバスに乗り込んだ。その日は朝から穏やかな秋晴れに恵まれて、K市に向う道筋から望む山々は澄みきった青空を背景に明るく連なっていた。バスが山ひだ深く進むにつれて、山の姿は秋の深まりを告げるかのように、次第に紅葉の色を濃くしていった。

K市についたのは午後四時ごろであつたらうか。空はあくまで青く、その空に向って紅葉し始めた高千穂の峰々は秋の日を受けて赤く燃え立つようにそびえていた。しかし、街道沿いの軒の低い家並みはもう暮れはじめているのか薄灰色の空気に包まれていた。盆地の町は里から暮れる。

教えてもらった宿は「お宿処……屋」と彫り込んだ看板がなかったら見過ごしてしまいそうな低い二階建ての商人宿風で、両隣の民家と変らなかつた。

「秋もすんだろ あの時^{とき}をヨー

あれも嫁じゃろー 火が五ツヨー

わずかばかりの酒と、炉の火にはてた顔を振りながら、ゆっくりと老婆はうたった。時折り、パチパチとはぜながら燃える炉の火を見つめながら聞き入っていると、バスの車窓から見た風景と・うた・とが交り合い、もの哀しい映像となって心の中を流れる。

長く尾を引いてうたい終ると、少し息切れたのか、老婆は肩で大きく息をした。胸のどうきが治まると、炉を仕切っている桜の厚板に置いていた酒の入った湯呑みを取り、黙って一口飲んだ。そしてひざの上で湯呑みを温めるかのように両手で持ったまま、五徳に乗っかっている鉄がまの下で、チロチロと青い炎を立てている炭火を見ていた。老婆はなにも話さないから、私も黙ったまま青い炎を見つめて、ただ湯呑みの酒を飲んでゐるよりはかはなかつた。鉄がまの湯のたぎる音と、時折り流しの方で食器を洗う音が聞えてくるばかりで、うたの終ったあとの晩秋の夜の静けさの底に、老婆と沈んでいた。

「こんなうたを聞くために、わざわざ遠いところから来られたんかいのオ、京都からじゃと」

ポツンと老婆は言って、ため息をついた。私は何を話して

いいのか、何と返事をしていいのか、言葉もないまま、黙って酒を飲んでいた。

「このうたはここからずうっと、ずうっと奥の山里のうたじゃ。そこは、ろくに米もとれん土地じゃが、その里の人たちが秋になるとかやを刈る。それはつらい仕事ぞ。そのとき口に出るうたじゃ」と言って言葉を切った。

やがて、食事の後片付けを終えたこの宿のおばさんも炉端に来て座り、酒の世話をしながら、私のために老婆といっしょになっておそくまで何度も何度もうたってくれた。私も二人のうたについて何度もうたった。

その夜は眠れなかつた。酔ったはずの脳裏が妙にさえ、耳もとを流れる悲しい調べの「刈干切唄」にさそわれるかのよう、胸のうづく映像が次から次へと浮び、去来してやまなかつた。

翌朝早く宿をたつてバスの停留所に向って歩いていった。昨日とはうって変って、今日は雲が低くたれこめて、昨日は美しく秋の日に輝いていた山々をおおいかくしていた。寒く冷たい朝だった。時折り吹きおろしてくる冷たい風の中を歩いていると、酒と寝不足でぼんやりした頭には、昨夜のことながら、昔の出来事のように思えてきて、何故か、なつかしさが炉の温みとともによみがえってくる。

恐らく、もう二度とくることはないだろうと思い、今来た

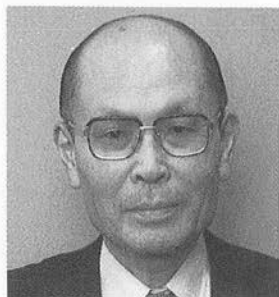
道を振り返って見たが、白らじらとした道がかなたに続いているだけで、人の動いている気配もなく、家並は薄暗い寒むざむとした空の下にうずくまっていた。

ひととき強く吹き下ろしてきた冷たい風は私の体と心をふるわせ、軒下の看板に悲鳴をあげさせて流れていった。

もう、それは冬の風だった。

帰ろかな 懐しの山川へ

田 中 憲 雄（柏原町）



かくいう私も丹波の「山ざる」を自負している一人でございます。戦中派である私は戦時中、そして戦後の復興時まで丹波に生まれ育った幸せな一匹の「山ざる」でございました。直接の戦禍にも会わずでしたが、食糧事情も田舎故にまだ恵まれていました。「兎追いし彼の山、子鮎釣りし彼の川」あるいは「目高の学校は」を地で

行くような環境であり、山川草木が目洗ってくれるような風景でありました。

さて以下年表風に世の移ろいと自分の丹波時代を重ねてみました。私は、昭和八年八月、柏原駅前石田で生まれました。その日は東海道線の丹那トンネルの開通の日であったそうです。大変な難工事であったと記録されています。同年、日本は国際連盟を脱退しております。昭和十四年に崇広幼稚園に入園、この年はノモンハン事件、第二次世界大戦勃発、国民徴用令公布、日米通商条約廃棄、昭和十五年崇広小学校入学、後に国民小学校と改称、やがて子供達は小国民とよばれました。小学校二年の昭和十六年に太平洋戦争が始まりました。翌十七年ミッドウェイ海戦。昭和十八年ガダルカナル撤退、中学生以上の学徒動員、十月には学生の徴兵猶予停止、昭和十九年東条内閣総辞職、米軍レイテ上陸、昭和二十年原爆投下、ポツダム宣言発表、昭和二十一年崇広小学校卒業、旧制柏原中学校に入学、その後の学制改革により旧制受験生の最後となったのであります。やがて柏原高等学校と合併、柏原高校併設中学校へと移行、男女共学が始まりました。その昭和二十一年は第一次吉田内閣成立、日本国憲法公布、経団連の発足、そして私の悲しい母の死去、昭和二十三年六月末のことでした。昭和二十四年ドッジライン実施、一ドル三六〇円実施の年に併設中学を卒業、新制柏原高校に入学致

しました。昭和二十五年朝鮮戦争勃発、翌二十六年電力再編成、昭和二十七年柏原高校卒業と同時に上京、大学に入学しました。大学入学当時は東京はまだ食糧豊富な時代ではなく外食券がないと食事、ソバ、うどん類、パン（当時コッペパン）も買えなかったことが記憶に強く残っております。



丹波柏原での生い立ちを思い、友人のことなどを思えば、本当になつかしさがこみ上げることばかりでございます。

自然に恵まれた田舎町のこと故、激しい時代の流れの中でも私ども子どもたちには山や川は全く良い遊び場でした。とりわけ思い出の深いのは柏原川での魚取りです。私は小学五、六年のころには内水域漁業組合の大人達ににらまれるような魚キチになっていました。当時銀行員であった父にも苦情めいた声が届いたようでしたが、たかが子どもの遊びと一笑に付したそうです。手網から始まり、手づかみ、ヤスによる突き漁、釣り等で相当量の川魚を毎日遊びながらとっていたものです。同時にシジミなども何処へ行けば取れるかを知っていましたので、戦時中、また戦後食糧難で魚介類の不足の時期に我が家や近所では大いに喜ばれた記憶がございます。魚種もフナ、ハヤ、モロコ、タナゴ、コイ、ナマズ、ウナギ、ドジョウなど豊富でした。当時、私より一年上のF氏なども川漁で遊んだ人でしたが、今は田舎で町会議員をしておられ

ます。また、現在神奈川の葉山に居住して日本エアシステム
の役員をしておられるB君は子どもころからテグス編みの
手網で伏せ網漁の技を競った友人でもありました。彼とはい
ちど柏原川下流の母坪の辺りまで遠征してたらいを一回りす
るような大ナマズを協力して手づかみして持ち帰ったことが
あります。

激しい変化の時代の中で幼少時代の私たちを健全に育てて
くれた丹波の山川に、人情の厚い土地柄に懐しさを感じ、感
謝をしております。



大学卒業と同時に証券業界に入り、三十三年の歳月が過ぎ
ようとしております。定年退職まであと四年となりました。
戦時中、疎開で大阪から柏原へ越して来て、知り合った家内
も丹波を懐しがっています。年に一、二度寺参りと生家の家
屋管理のため丹波へ帰省しています。時代の流れが郷里丹波
を大きく変化させました。山川草木も変りました。それが郷
里の歴史でもあるのでしょうか。大いなる田舎丹波の発展を祈
りたいものです。定年退職後は神奈川県藤沢の家を子どもに
明け渡し、懐しの丹波柏原で悠々自適を決めこむのもまたよ
いのではないかと思うきょうこのごろであります。

ふるさとに寄せて

上野 重 喜（氷上町）



NHKには、幾人かの郷友が活躍しておられます。大野善三さんは、「自然のアルバム」、「きょうの健康」など科学医学番組のエキスパートで、先ごろ定年退職されましたが、放送の仕事はなおご継続中です。

木内実喜夫さんは、教育番組センター長の要職にあらわれ、学校教育、生涯教育の番組の総元締めです。足立正美さんは、美術デザイナーとして、ドラマ、音楽番組まで、その芸術的センスを生かし、池尾優さんは、「地球大紀行」に続き「北極圏」の中核として世界に飛躍しています。私は、目下編成計画室に所属、衛星放送を含め各種広報番組を担当しています。

今年の一月七日、八日、つまり昭和の末日から平成の初日にかけて、私は放送送出の心臓部ともいえるコントロールルームで、年をいや「時代」を越しました。「映像でつづる昭

和史」などを視ながら、自らの昭和にも思いをはせました。

私が、ふるさと丹波をあとに大学進学のため上京したのは十八歳の昭和二十九年で、まだ東京には「戦後」が色濃く残っていました。旧制一高寮であった東大駒場寮に入り、寮生四百人余、一室六人、地方出身者ばかりでしたが、今のよう祝福されて入学した友は少く、多くは、それぞれの家庭の事情を乗り越え親を説得してやってきた連中でした。皆アルバイトで学資を稼ぎ、中には家へ仕送りをしている友さえありました。私も父を早くなくし、しかも長男だったので、受験二か月前の正月に突然、東京へ行きたいと言いつ出した時は親戚会議を開いたり、伯父から「父親もないもんが、東京の大学へ行くなどもつてのほか、おや（母）も子も世間の笑いもんじゃ」と叱られる始末でした。しかし跡継ぎの長男が家を離れることは、特に田舎では、ご近所や親類に迷惑をかけることになり、今もって引けめを感じています。

少年時代の思い出といえば、子どもながらにやはり終戦です。小学校（当時国民学校）四年の夏、思いもよらぬ「神国日本」の敗戦。やがて占領軍がきて皆殺しにされるかも知れないとの恐怖におののきましたが、幸いそんなこともなく、やがて田舎にも平和の解放感が広がってきました。

戦時中は芋畑であった校庭が運動場に復元されて草野球が大流行、ありあわせの布で作ったボールとグラブで毎日暗く

なるまで遊んだものです。足もととはわら草履か裸足、運動靴などは買おうにも手に入らない時代です。娯楽といえは、他に青年団の素人演芸会やのど自慢が盛んでよく見物に行ったものです。おかげで当時の流行歌をたくさん覚え、NHKに入った当初、のど自慢や歌謡番組を担当したときに大いに役立ちました。終戦の二、三年後、成松でステートフェアという祭がありました。その時、東海林太郎、日高澄子といったスターが来演、とにかく有名人を見るのは初めてで、胸を躍らせたものです。ノートにもらったお二人のサインを長く大切にしておりました。

当時学校では、ろくに教科書もなく、およそ勉強らしい勉強をした記憶は不思議なほどありません。しかし活字には飢えていました。たまたま家にあった分厚い講談全集をむさぼり読んだのを思い出します。塚原ト伝、宮本武蔵、岩見重太郎、荒木又右衛門……血湧き肉躍る物語、ほかに真田十勇士でおなじみの立川文庫。雑誌では、少年倶楽部、キング、家の光など、いずれも十年ほど前の古本をあちこち借りあさって読みまくりました。子どもが大人のしかも通俗本を読むのは良くないと母を本気で心配させました。しかし、当時の本には、漢字にふりがなが振ってあり、これですいぶん字を学んだものです。

私の二年上までは、中学へ進む人には入学試験がありました。

り狭い門でした。ところが私どもは中学は義務教育で無試験、新制高校も広い門で、試験らしい試験は、大学入試だけ、前の世代より、後の世代より幸せだったと思います。もっとも高校でも大学でも「新制は力が落ちる」とよく先生に嘆かれました。まだ当時大学の同級生には旧制高校や海兵出身者が幾人もいたものです。

戦後のどさくさの中、新教育の申し子ともいえる私たちの世代も五十歳を越しました。

昭和も次第に遠のいて、平成はどんな世になるのでしょうか。

丹波は私にとっていまだ過去ではありません。母を残し田畑山林も少々あり、現在の生活の一部でもあります。

ふるさと丹波は、こよなき安らぎの大地であると同時に、いつまでも自分を解き放してくれない重い鎖でもあるのです。

(NHK放送センター編成計画室)

ふるさとで歌う喜び

足立 さつき (春日町)



丹波。まさに私の青春のふるさとである。生まれてから高校を卒業するまでの十八年間、丹波の地を踏み、丹波の空気を吸い、丹波の山を見て育った。現在私は東京都練馬区に住んでいるが、年に三、四回は丹波に帰る。やっぱり田舎はいいな……としみじみ感じるのである。

幼いころから音楽に興味のあった私は、音楽大学への進学を志し、高校時代から本格的な勉強を始めた。最初は大阪か神戸の音大へと考えていたのだが、恩師の勧めで、東京の武蔵野音楽大学を受験した。だれひとり親類もなく、知り合いもない東京の生活は不安だったが、大学の仲間も増えて、無事卒業することができた。卒業したら故郷に帰って仕事をすると、母と約束していたのだが、たった四年間の勉強では物足りなく、私は大学院に進むと同時に、二期会オペラスタジオの研究生となってオペラの勉強を始めた。今考えれば、私

の人生の方向を決めた節目であった。このころから、私は年に一、二回、故郷丹波で自分の歌を披露する機会を持つようになった。自分が勉強してきた歌をふるさとの皆さんに聴いてもらえるという喜びは、本当に語り尽くせない。一昨年「椿姫」でオペラ・デビューを果たし、本格的にプロの演奏家として活動を始めてからは、ますます丹波の人たちの暖かい応援を肌を感じている。昨年九月、出身地の春日町に、文化ホールが完成した。その落成記念行事の一環として「深尾須磨子生誕百年記念音楽祭」が催された。私は春日町出身のオペラ歌手としてその音楽祭に参加し、素晴らしいステージの経験を持たせて頂いた。会場に来て下さっているのは、隣のおじさんおばさん、商店街の皆さん、高校時代の後輩等々……。本当に知った顔ばかりである。懐しいふるさとの人達を目の前にして、春日町文化ホールで歌うことができ、私はただ感無量であった。今年の三月には、その春日町文化ホールで、初めてのリサイタルを開く予定である。このリサイタルを丹波の人々に聴いてもらいたいと考え、今準備にとりかかっている。

私はまだオペラ界では若年で、これからもっともっと勉強を積み重ねてゆかねばならないが、今後も機会あるごとにくるさとで歌いたいと考えている。そして、十年、二十年後も歌い続けられるよう邁進するつもりである。(二期会会員)

台北故宮博物院を見学して

藤 田 正 雄（黒田庄町）

二玄社の渡辺さんのお世話で十一月十三日から十六日まで、三泊四日の台北故宮博物院見学の旅が行われた。同行十七人は関東水上郷友会の会員と関係者で、顔見知りが多く気ままな旅であった。帰国後の反省会の席で、編集部から故宮博物院見学記を書けとの要請があった。美術工芸について興味はあっても知識も造けいもない私には荷が重く、正直なところ気も重い。しかし何とか二日間の見学で感じたことをまとめてみたい。素人の独断と偏見の感想になるがその辺のところはお許し願いたい。

重々しい威圧感と量感、ものすごい強さを感じさせる絵がある。険しい岩山、山すそを洗う溪流、流れに落ち込む岩壁にしがみついて茂る大木、山あいには白く輝く一条の滝。溪流に沿った岩塊の起伏を縫う細い道と豆粒ほどの人馬、陰しく暗く重い山容は自然の厳しさを象徴しているのであらうか。小さく描かれた人馬は厳しさに耐える人間の営みを現しているのであらうか。峨々たる山容は皇帝の権威を暗示し、清々たる溪流は天子の徳を投影しているのであらうか。

目を閉じると人馬が大きく浮かんでくる。人の話し声、馬のいななき、足音が聞こえてくる。都を旅立ち、この峻険を越え、大黄河をさかのぼり、砂漠をよぎり、遠くシルクロードをローマまで踏破する大いなる行旅の一日であらうか。

茫寛の「谿山行路図」である。

雪解けの風は身にしみ、岩山の落葉樹は寒々と裸の姿をさらし、万物は冬の眠りの中にある。だが、陽光は既に春。地中の根は目覚め、水辺の猫柳は銀色に光るつばみを大きくふくらましているのであらうか。穏やかで明るい大気は平和と幸福の表現であらうか。

郭熙の「早春図」である。

展示されている美術品はすべて中国の各時代を代表する国宝、重要文化財クラスの名品ぞろいである。しかし、そのなかでも特に心ひかれたのはこの二点の山水画であった。

これまで、中国絵画にはほとんど興味をもつことはなかった。類型化した構図と古めかしさに、むしろ興をそがれたからである。その不満は幾多の名品に接し、堂々たる迫力に深く感銘しながらも、今なおぬぐい去ることができない。風景の中の一場面である山水のみを描くことは定形化せざるを得ないし、その中での様々な工夫も美の本質に迫るものではなく枝葉の技術に限られてしまうように思われる。後の時代の山水画あの二点に勝る感動を呼び起こすものはなかった。

何故に中国の絵画はこのように形式化したのであろうか。

中国は五千年以前に既に高度な文明社会を建設した国である。その文化と伝統は近代に至るまで中国の社会体制を継続させ、その枠組みの中で美意識も倫理も固定化したのではなからうか。遠い過去の時代に理想の社会を成立させ、中華思想を確立した中国は他国から学ぶものではなかったし革命は革新でなく常に復活であった。

人間が家族集団から村落集団を経て部族国家を形成し、さらに統一国家を建設するに至るまでには、長い時間とその基盤となる生産力の発展と生活条件の向上を必要とする。中国では紀元前三千年のころ、既に理想国家の建設に成功している。そして、それとともに自らの社会体制と生活様式と文化を美と感じる美意識とそれを守り発展させることを正義と信ずる倫理を作り上げた。

中国社会が古代において高度な文明を築き、民族の統合に成功した大きな理由は文字の発明にあった。意志の伝達機能としての言語の発達はいうまでもないが、それだけでは十分であった。文字―文章によってより正確なコミュニケーションが可能となった。また、言語と文章の発達は論理的思考を深め、具象的事物と関係の認識から抽象的な概念を導きだし、これらの概念を体系づける学問を成立させた。学問の発達は同じ美意識と倫理を持つこと、即ち価値観の共有と民族

のアイデンティティをより広くより強固なものとした。そして、体系化された概念は思想として価値観の普遍性を高め、部族や民族を越えた人類共通の原理となり、人間の行為の指針とも規範ともなった。

湯王が殷王朝を創設したのは紀元前千六百年ごろであるが、それ以前すでに高度な文明社会が成立していた。その後約千年を経て、孔子が現れ中国思想を集大成した。中国社会の思想的支柱となった儒教の精神はその普遍性の故に、中国のみならず周辺の国々に大きな影響を与えた。

このように具体的な生活のなかから生まれた美意識も倫理体系づけられて思想となるにおよんで、反対に生活そのものを規制する力となり、人間を束縛する。社会が変わろうとするとき、それを伝統的なものに引き戻そうとする力となる。社会が発展するとともに、新しい価値観が生まれて体制を変革させる原動力となるが、中国の古代文明があまりにも偉大で、その思想が確固不拔の力を持ち、価値観は固定化して、新しい価値観やこれに伴う社会の変革の動きはまだ芽のうちに摘み取られた。伝説上の皇帝堯が理想の天子であり、その時代が理想の国家である、と信じられていた。

中国と同じく古代に文化の花を咲かせたギリシャ、ローマ、エジプトおよびキリスト教文化のるつぽとなったヨーロッパは学術、芸術、社会体制すべてにわたって中国とは異なる歴

史を歩んだ。もろもろの体制と価値観のかつとうの中から新しい芽生えが生まれる。土地所有を基盤とした経済構造と生産関係は、科学技術の発達による都市の工業生産方式によって変わられた。新しい階級が台頭し、新しい価値観が生まれた。美の世界にも新しい流れが生じた。しかし、中国では多様な民族と文化と価値観がせめぎあったヨーロッパのような変化は生じなかった。高度な文明社会を古代に成立させ、その歴史と伝統を守り続けた中国社会的な思想的バックボーンとなった儒教の倫理と美意識が、社会と文化と歴史を支配した。千年前の宋王朝三百年の繁栄を頂点として経済、学術、芸術すべての面で衰退し、社会は停滞のふちに沈んで行った。誇れるものは古き良き時代の文化遺産のみとなり、国家としても東南アジア諸国と共に列強の帝国主義政策のえ食にされた。真理を追求する学術も、美を探究する芸術も、豊かさを求める経済も、公正を期する政治も美意識と倫理に支えられている。伝統に埋没するところに創造はない。中国絵画の類型化は伝統から抜け出せなかった中国社会的創造的活力の低下の現れであろう。

新しい価値観の胎動がなかった訳ではない。道教も生まれ、仏教の伝来もあった。また、どんな社会や時代でも、体制からのほみ出し者、異端者、落ちこぼれが現れる。これらの少数者が新しい価値を創造する先駆者となるが、中国社

会ではその芽は育つことなく伝統の重みのなかで圧殺された。風景の美が伝統的な山水だけでは、画家の内面を投影するには狭く限られたものとなる。画家の感性がとらえた風景の美しさも、山水でないと認められないから描かなかったのか、本当に山水以外に美を感じなかったのか、私は疑問に思う。しかしいずれにせよ、美の本質に迫ること、画家の美意識の発露により、世間の常識の枠内での技術の精ちさを競うしかなかった。花鳥画、人物画についても同じことがいえる。

絵画は色彩と形態で美を表現する芸術であるがそれだけではない。色と形を通して画家の内面を語りかける表意の芸術でもある。芸術家の繊細で鋭敏な感性がとらえた美しきものの、その表現が見る者の心に共感と呼び、意識を変え、芸術は意識を変え、倫理を変え、体制を揺るがす力を持つ。だからこそ、体制は自らの秩序を守るため、表現の自由を制約する。

本能、欲望、情熱、意志、理性、知性、品性は人間の行動を促し、方向を決める心の働きであるが、それ自体には善悪、正邪、美醜の別はない。情念の炎を清れつな魂と高貴な精神に昇華させる努力にも、激情のあらしに滅びの道を行く業の深さ悲しさにも、人の子の真実と美しさがある。

美は先験的に客観として在るのではない。感性が美しいと心に呼びかけるとき、美は生まれる。ロンドンの霧は暗くて

湿っぽく、うっとうしい不快な存在であった。しかし、印象派の画家に描かれることによって、それはロマンと憂愁に満ちた詩情あふれる風景となった。美しいと感ずる心が対象のなかに自我を解放し、個性を流露させ、美を生むのである。

青磁のわんがある。青く澄んだ透明感と端正な気品がある。実用器具の宿命である形と大きさの制約の中に、技術と技法の粋を極めた緊迫感がある。作者の名はない。ただ作品のみが語りかけてくる。

石器時代の洗練された美しさにも感動した。へき玉の水差し均整のとれた形と清しさは、太古の時代の作品とは思えない。古代人の稚拙で素朴な美しさからはほど遠い、現代的な理知のにおいが感じられた。この時代、既に高い精神文明の成立と、技術の確立があった証であろう。

象げ細工の巧みさもすばらしいものであった。透し彫りの置物の中に球を彫りこんだ作品などは、どうやって作ったのか不思議でさえある。

道具も設備も現代ほど整っていない時代に、これほど精巧で巧妙な作品を作り出す技術があったことはもとよりのことだが、長い年月をかけて完成させる根気と集中力には、ただただ驚嘆するばかりであった。器用さだけでは出来ることではない。

故宮博物院の陳列品のうち、幾つかの作品をとりあげてみ

たが、各時代の作品群のうち一番感心したのは宋時代の作品であった。

科学技術の発達によって高度の経済発展を遂げ、近隣諸国と文化と経済援助によって友好関係を保ち、三百年の平和と繁栄の時代を築き、学問・芸術の花を咲かせた宋はすごい国だと思った。

博物院を見学するには二日の日程はあまりにも短かった。まして私たちが見たものは収蔵品のごく一部に過ぎない。いつの日にかもっと余裕のある日程で訪れたいと思う。

健康歳時記

坂 本 重 雄（柏原町）

物質的な豊かさや老後への備えなどにあまりこだわらないで、人間らしく「ゆとり」の感じられる日常生活を送りたいと念願しながらもその実践は容易でない。仕事は精一杯こなしながら、自分なりの努力と工夫で、独自の生活スタイルを創造したいと心がけている。

一、仕事の周辺に余暇をみつける

さる九月中旬からスペイン・マドリッドで開かれた国際学会に出かけた。事前の報告書提出など準備に追われ、四日間

の大会期間中はスペイン語と生活習慣の違いにとまどった。

経済的な苦境のなかにも明るさと「ゆとり」を感じさせる国民性やその生活スタイルに感銘を受けながら、周辺地域の観光、美術館めぐりの気楽な旅行を続け、地中海グルメ、フラメンコや闘牛までどん欲に余暇を楽しんだ。このところ勤務先の大学では、管理職から解放されて、学生との接触や学会関係の仕事が復活している。非常勤講師もなるべく引受けることにし、一橋大法、京大法院、中大法院に出講している。体力的には厳しいが、若い研究者たちと連日のように飲食をともにし、労使関係法の国際比較や社会保障の権利性について議論するという体験は自らにとっても大きな知的刺激である。六月には柏原高三回卒業生の同窓会に出席し、恩師、友人たちと楽しい時間を過ごしたが、日常あまり会えない人々との会合では異質の意見や対話が交わされ有意義と思う。

二、趣味と仕事の調和・両立の難しさ

労働時間短縮、「働き過ぎ中毒」批判を日ごろ強調しながら、自分はどうなんだと反省するが、趣味らしいものといえど硬式テニスくらいである。しかしこの趣味は度が過ぎるのが心配で、年間十件以上の公式試合に出場し、ビッグタイトル戦に限っても八八年度では次のようなものがあげられる。

(1)正月静岡トーナメントテニス(全国的規模の大会、一月三(六日)五五歳以上ダブルス優勝、前年から二連覇。(2)静岡

県シングルス選手権(五月三・五日)五五歳以上の部、第一シード守れず四時間の接戦で二位。(3)全日本都市対抗テニス選手権(北海道・トマム)に県代表選手として参加、団体ベスト8、優勝横浜チームに敗退。(4)静岡県ダブルス選手権(十一月三日)優勝、二連覇。

試合の前後に出張や会合の予定があっても仕事と趣味を割り切って試合に出る。両者の調整は気持の問題でテニスのときは仕事を忘れよう。趣味の世界といっても仲間たちはセミプロが多いので、勝敗や格好よさに執着しがちである。それがストレスの原因になり仕事や健康に害となることがこれまでの体験上決して少なくない。

三、健康とは身体と心のバランス

仕事やテニスを予定どおりに行けると周囲からは健康そうにみえるが、内情は必ずしもそうではない。昨年の春季には花粉症に悩まされ続けたし、雨の多かった夏季には知人の事故が多く自分も体調をくずし、スペイン旅行の前に、視力の不安定が気がかりだった。そして忘年会がほぼ終了する十二月二日からカゼをこじらせ、腹痛で寝込み、直後、腹部結石で一週間苦しみ、三十一日昼過ぎにようやく治まるという始末である。

病気の苦痛、精神的不安に対する抵抗力の弱さ、忍耐力の欠如など、一九八九年正月元旦はまず年末の病床体験への反

省から始まった。ひごろあまり病氣しないとはいえ、腹部の結石の痛みで耐えられないようでは、家族たちも「先が思いやられる」と感じているだろう。高齢化社会や老人医療への対応策を人前で語るのにも恥ずかしい思いがするというのが年頭に際しての心境である。

(静岡大学教授)

仁王さんから学ぶ

堀井隆川

(真照寺住職・山南町)

寺の山門で見かける、おなじみの仁王さん。単なるアクセサリーぐらいにしか考えていない人もあるようですが、この仁王さんには、人間にとって大切な深い教えが込められていることは、あまり知られていないようです。

その仁王さんは、たいがいお寺の山門の左右に安置されていますが、この二体は形と色が異なっています。向かって右側は正式には「金剛像」といい、通称は「阿形^{あきよう}仁王」と申します。色は赤く塗ってあり、口は大きくカッと開いています。従ってこの仁王さんは、人間の「誕生」を意味しています。

人間は生まれる時「あー」と産声をあげ、充血した赤い身体で生まれてくるところから「赤ん坊」といいますが、その産



声から「阿形」といい、赤ん坊の色をそのままに赤色に塗っているのです。

向って左側は、正式の名を「力士像」、通称を「うんぎよう吽形仁王」といいます。色は青く塗ってあり、口は真一文字に結んでいます。この仁王さんは、人間の「死」を意味しています。人間は死ぬ時は、だいたい青ざめて「うーん」といって死んでいきます。そこで青く塗り、「吽形」という訳です。

さて、人のいのち、すなわち一生というものは、悠久の歴史のうえから見ますと、実に短かくはかないものです。

そのことを道元禪師（曹洞宗の開祖）は、

世の中は 何にたとえん 水鳥の

はしふるつゆに 宿る月影

とお詠みになっています。この地球上に人類が生まれてから四十億年とかいわれていますが、その気の遠くなるような、天文学的な数字から考えてみても、人の一生は長くても百年前後です。まさに右の歌のように、水鳥が口ばしを振った時に飛び散るわずかな水玉の露のようなものでしかないといえましょう。

阿形仁王像から吽形仁王像までの間隔も、わずか五メートル内外、人生もたとえる距離にすれば、せいぜいこれくらいです。「だからこそ、心して充実した生き方をせよ」という

戒めと諭しが込められているのです。

相撲界では「あうん阿吽の呼吸」ということを厳しく指導しますが、それは生まれてから死ぬまでの人生は呼吸、即ち息が大切で、息が乱れていることは心も不安定であり、何事も良い結果は得られないのです。

その呼吸＝息の教えの源が、実はこの仁王さんなのです。よく考えてみると、人間の吸ったり吐いたりしている息は、実に不思議なものです。息をしているから「生き」という訳ですが、息は、眠っていても、起きていても、喜怒哀楽、何時いかなる場合でも瞬時の休みもなく続けられています。

しかも、この息は決して自分が作ったものではなく、いかなれば両親から受け継いだものなのです。その両親もまた、父母から受け継ぎ、その父母すなわち祖父と祖母も、それぞれ両親から受け継ぐというように、さかのぼっていくと、一体どこが息の起源になるのでしょうか。

そこで突き詰めて考えてみますと、この息は姓も名も全くわからない、遠いはるか彼方にかすんで見えない、大昔の先祖から順番に受け継がれて、今の自分に至っていることがうなづけます。また自分からあとへ、子々孫々に伝わっていくのでありましょう。

そこで息を伝えたわが子のことを男なら「息子」といい、女なら「むすめ息女」というのです。単に「息」という字を使った

のでなく、自分の今ある「いのち」を生かす強い意が込められているのです。（今は娘と書きますが、本当は息女が正しい）

ここまで深く考えると、自分の息は、途方もない大昔の先祖のしていた息と、全く同じものだということです。

この自分は、何千万年も何億年もかかって、やっと今の存在があることに気づきます。この身体は、一朝一夕に出来上がったものではなく、大昔のご先祖がなかったら、この息も身体もあり得ないのです。

この不思議さから、この息も身体も尊く、大昔の名も知らぬご先祖のありがたさと同時に、感謝の気持ちも湧いてくるのです。

「人命尊重」「報恩感謝」の精神は、実にそこから出発せねばなりません。そうした根源の息の教育が、学校でも家庭でも必要なのです。「生命は一つしかないから」では、単純で中途半端です。生命の尊さは教えても、ではなぜ尊いのか、その深い意義が十分に教えられなくてはならないのです。

生命の源泉へさかのぼると悠久の昔に達します。その悠久の歴史の果てに今の自分があり、だから尊厳・敬けんさを感じせざるをえないという土台を教えずには、本物の教育とはいえません。人権や生命が粗末にされ、尊さが軽んぜられる事例は、その点をとことん教えていないからです。

また誰でも習ってきたアイウエオ五十音もア（阿）に始まり、ン（吽）で終わりますが、実はこの仁王さんから出ています。阿形（陽）・吽形（陰）を根源とし、息（氣）の大切さを教え、さらに中国の易学や世界観の思想に示した陰陽道（学）にも通じるものです。宇宙の万物に働く相対的な事象や言葉があたります。天と地・男と女・動と静・明と暗というように、相対立する性質や性格は存在しても、両方の調和を保ってこそ安らぎがあるのです。



このように考えてみますと、仁王さんに込められた教えは仏教だけのお話ではなく、人間にとって肝心かなめの教えであることも、素直に受けとめられるではありませんか。

どんな植木や野菜でも、根を培ってこそ成長し、花が咲き実もできるのです。土台なくして決して家は建ちません。

悠久の歴史の刻みと息の継承なくして、現在の自分の存在はあり得ません。従って、先祖を忘れ、粗末にすることは、そのまま「生かせぬいのち」の自分を粗末にしていることになるのです。これは仏教というよりも、最も人間的、根源的な考え方であろうと思います。

「息」という字は、「自分の心」と書きますが、それは「生命」そのもののことにはかなりません。別の表現でいえば、「土台」「基本」という意味になるでしょう。この息の

出版

松山確郎著

「私の中学校・高等学校」

柏原中学（旧制）、柏原高校の在勤二〇年を含め、戦前・戦後に及ぶ三十五年余の間、丹波の地域で教員生活を送られた松山確郎先生が、このたび「自分史第二号」として本書を出版された。貴重な教育体験を正確に書き留められた先生の人生記録から多くの教示と感銘を受けた教え子の一人として、ささやかな紹介と感想を述べさせて頂きたい。

一九四三年、家庭の事情から丹波へ帰り母校柏原中学（旧制）に就職された先生は、当時の植木孝之助校長による教員採用への熱意、円熟の教師陣とその学殖の深さ、教員の相互交流が描かれ、教育の要（かなめ）は教師であることの強い印象を回顧される。戦争末期の勤労奉仕、学徒動員、生徒の入隊や陸海軍学校への

志願、そして敗戦、さらに戦後の中学校の混乱、生徒の復員、進学、変則の卒業式など、教師としての苦悩の体験を、生徒の回想記、記録を活用しながら淡々と語られ、その記述の精細さは厳しい時代での生徒への思いの深さを示すようである。六・三・三制教育改革の実践、修学旅行の復活、教員組合の発足、活動、卒業生・芦田均氏の総理大臣就任、母校訪問と講演会など、丹波の地域での戦後民主教育の体験記録としての重みを痛感させられる。

一九四八年九月、県立柏原高校の発足（旧制柏中Ⅱ柏原高と柏高女Ⅱ氷上高の合併）に伴う新しい高校経営、生徒会の組織化、各種の班活動、とくに顧問をされた生物班の活発な活動が描かれる。当時の生徒会活動に関与した人々にとって貴重な思い出の記録でもあろう。その後十五年間の柏原高校では、後藤英太郎、植杉英之助、姉崎岩蔵の三校長と教師、生徒の協力で学園は大きく発展する。学

習・生活指導の見直し、統合校舎建設、六十周年記念事業、自然調査団の活動、教員組合の勤評反対と入試拒否事件、スボーツ黄金時代が語られる。篠山農高水上分校、氷上農高に転任されても新任校でのクラス担任、化学班顧問を続けられ、加えて家族旅行や卒業生との交流が詳細に記録されている。

「教壇を辞して」（一九六八年三月）は三十五年余の教員生活を回顧し新生活への転機を決意され、先生はここで卒直な見解を表明されている。母校へのあいさつ回りで東京教育大学の学園紛争を見聞されて以降、教育現場の荒廃、そして近年の学習塾の乱立を歎かれる。多感な青年期には地方色豊かな教授陣が望ましく府県を超えた人事交流がなぜ困難なのかと主張されており、教育の成否を左右する教員人事のあり方への提言は貴重だと思う。生物班等の課外活動は教師、生徒の自主的、人間的な触れ合いの場で、上級生・下級生・卒業生につながる世代

連帯を形成する役割をもち、今日の教育での最大の弱点である。柏高第三回生（一九五一年卒）の私たちは授業や担任として先生から直接ご指導を受ける機会が少なかった。それでも勉学や課外活動で激励されることが多く卒業後も年賀状などを通じて温かい教示、助言を受け続けていることに深い感謝の念を抱いている。

本書は、柏高同窓生はじめ松山先生の教えを受けた生徒たちが青春時代を懐しく回顧し当時の教師たちの苦勞を改めて想起させられるだけでなく、丹波の山ざるを育てた学園での戦後民主教育の貴重な体験を、教師・生徒の共有物として描き出した力作である。多くの方々に読んで頂くようおすすめしたい。

（B6版二二九頁、丹波新聞社印刷、一九八八年十二月刊）
（坂本重雄記）

著者は大正十二年、大阪府池田師範学校入学のため丹波を出、昭和三年東京高

師に入り、歩兵第一連隊入隊時に二・二六事件。秋田師範奉職を振出しに母校池田師範、県立柏原中学時代（あらしの数の数年）、県立柏原高時代、県立篠山農高水上分校時代、県立水上農高時代、教壇を辞す——まで三十六年間の「自分史」である。

昭和初期を経て第二次世界大戦中の軍需工場への学徒動員、薪作りや炭焼きのための山行き、敗戦後の混乱、民主化、戦後の復興、経済成長と起伏の激しい時代に生徒と共に歩んだ「私の中学校、高等学校」である。

多くの学年担任の中で、深く心に残る学年は戦時中の予科練や陸・海諸学校に進み、戦死し、苦闘した年代、柏中四十回生で「若い諸君の学校での壮行式に臨むごとに、襟を正さずにおられなかった」と記されている。

気象班、生物班や信州、屋久島に旅しての柏高自然調査団など班活動を通じて、教育現場で生徒と共に学ぶという、人間

と自然への暖かいまなざしが随所に感じられる。
（常岡幹彦記）

寄付者芳名録

●千種倫幸殿	二二〇〇〇円
●片山日幹殿	二〇〇〇〇円
●江間時彦殿	一六〇〇〇円
●谷 達雄殿	一〇〇〇〇円
●志村勝郎殿	一〇〇〇〇円
●坂上勝朗殿	六〇〇〇円
●小谷正雄殿	五〇〇〇円
●植田憲雄殿	五〇〇〇円
●横山幸三殿	五〇〇〇円
●梶原 清殿	五〇〇〇円
●小田知尊殿	五〇〇〇円
●安達靖子殿（規氏ご遺族）	五〇〇〇円
●林田孝子殿	五〇〇〇円
●堀井隆川殿	五〇〇〇円
●井本 馨殿	五〇〇〇円
●池上亘泰殿	五〇〇〇円
●小田富士夫殿	一〇〇〇円

氷上ゴルフ同好会報告

六十三年度の氷上ゴルフ同好会の経過をご報告致します。

当会も回を重ねて九年目、開催回数にして三十五回、よく続いたものと、自分ながら感心し、また振り返ってみると十年ひとむかしの感慨なきにしもあらずといふところです。漢詩の一節のように、年移り、人かわり、いまは亡き方も何人かを数えるようになりました。

それ以前にも当会はあったそうですが、中断していたのを前会長の伴仲さんが、氷上同好会の会合の席上で私に世話役をやってくれないかとお話があり、若気のいたり（九年前は若かったですぞ）からお調子ものか、簡単にお引受けをし、いまになって大変な役目だったと後悔をする一方、人づきあいの勉強にまたとないチャンスを与えていただいた伴仲さんに感謝している次第です。ただしゴルフの

腕だけは九年前と変わらず、孫（二歳）をもつわが寄る年波を思うと、かつてのシングルの夢もはかなく消え去ってゆくのでしょうか。ともあれ、私ごときのものでまがりなりにもこの会をお世話できたということは、ひとえに会友のご協力はもとより、郷友会諸先輩のご指導の賜物と存じます。

現在会員数は四十九名ですが、コンペ開催日を原則として平日にしているために参加者数が制約され、一つの壁に突きあたっているというのが現状です。

このあたりを解決するために、年に一回くらいは休日にコンペを開き、多数のご参加を呼びかけてみようと考えております。同好の方で、まだご入会でない方はこの機会にぜひご参加いただきますようご案内いたします。

△最近の成績▽

第三十二回 相武カントリー倶楽部

昭和六十三年六月一日

優勝 村上 昇 二位 早瀬徳郎 三

位 金川雅美 BB 澤田みさを

第三十三回 大相模カントリークラブ

昭和六十三年九月二十二日

優勝 渡辺貴美子 二位 柏原よし子

三位 川畑明光 BB 足立謙悟

第三十四回 レークウッドゴルフコース

昭和六十三年十二月九日

優勝 大根川總子 二位 岡林逸男

三位 岡林京子 BB 川畑明光

第三十五回 酒匂ロイヤルゴルフ倶楽部

平成元年三月二十三日

優勝 村上 昇 二位 村山宗裕 三

位 岡林逸男 BB 澤田みさを

なお新入会ご希望の方は左記へご連絡下さい。

横浜市西区岡野一の十三の十三

ミワ電気工事株式会社気付

氷上ゴルフ同好会事務局 足立謙悟

電話 ○四五―三二二―五二九一

FAX ○四五―三二二―五三三三

氷上囲碁会報告

毎月第三土曜日は囲碁同好会の開かれる日です。飯田橋の春日建設地下一階ですがホールで烏鷺を闘わせておりますので、どなたでも気軽にご参加ください。このところ、毎回の参加者が平均六人ぐらいいで、すこしさみしい状態です。

掲 示 板

常岡幹彦氏個展

玄に向かつて'89（其の貳）
会期Ⅱ平成元年五月九日（火）～二十一日（日）10時～6時30分
会場Ⅱ東京セントラル絵画館 中央区銀座三ノ七銀座貿易ビル8F
一〇〇号二点、五〇号二点、他富嶽五趣など計二十五点を出品

囲碁同好会年間成績表（勝数順）

'88・3～'89・2

参 加 者	勝	負	参加回数	備 考
藤 田	31	25	10	第3回会長杯 2位
小 日 向	25	18	8	3位
上 小 沢	25	35	10	
坂 上	21	35	10	
前 川	20	22	10	第3回会長杯 優勝
増 田	18	22	11	
三 浦	15	6	6	
足 立 (源)	10	7	6	
谷 口	6	1	2	
新 島	5	6	3	
川 畑	4	1	1	
松 山	1	1	1	
黒 田	1	3	1	

氷上郡出身とか縁故などにはこだわらず、お友達をおさそいあわせて、どうぞおかけください。参加費は当日持参の千円

です。

お問い合わせは ☎ 〇三一二六四一四〇
一一春日建設(株)小日向まで。



可部美智子さんの陶彫展

●銀座松坂屋画廊Ⅱ平成元年一月十九日から二十四日まで

●赤坂乾ギャラリーⅡ都ホテル東京地下一階ロビー（三月）

●井ノ頭画廊Ⅱ四月十五日 吉祥寺駅南口・井ノ頭ビル3F「久美の会陶芸展」

●銀座アートホールⅡ銀座八丁目コリドー街 五月十五日～五月二十一日まで「日本陶彫展」

郷友のみなさまへ

「山ざる」誌は毎年一回、四～五月ごろに出版し、当誌の会員名簿記載の全員に送呈しています。また郷里とのパイプになればと、丹波の学校や役場などにも送って回覧していただいております。

当氷上郷友会と郷里とは、もっともつと交流を深めたいものです。その点、本

誌の紙上を利用した有意義な企画などいろいろと考えられましょう。とは申せ、だれしも多忙なつとめもつ日々、手も知恵もまわりかねるのが現状です。こういう雑誌は常に、多くの共鳴者の献身的な協力が必要なのです。だれかが、なにかを、ただで、すすんで、やらなければ、できないのです。大方のご教示とご協力をを切に願ひする次第です。

◇

本誌の資金源またしかりです。毎年、協賛広告や寄付金をお寄せいただく郷友には満腔の敬意と感謝の念をささげます。郷友会の台所はいつも火の車、文字どおり自転車操業ではありますが、本誌が20号、つまり二十年にもわたって、会員篤志家の浄財によって出版され続けてきたということは、ほんまにたいしたもんじや。関東水上郷友会の誇りともすべきであります。今後とも愛郷者のご芳志を切に願ひする次第です。

◇

郷友会の会員名簿は一年おきに改訂掲載し、またその間に関東方面に出郷された郷友および縁故者をわかる限り加えております。

従って現在では、入会や退会の規定もとくに定めておりません。来る者は拒まず、去る者は追わず、といったところでしようか。

昨年19号の名簿に記載もれの方、物故者などぜひお知らせください。また記載された方でも生年、出身地、旧姓、勤務先、趣味など不明な方がまだ多くあります。振替用紙の通信欄などで事務局までぜひお知らせください。

◇

年会費の一〇〇〇円は強制的なものはありませんが、会の通信費や山ざる誌の郵送料とご理解いただき、お手数でも何とぞご援助願ひあげます。今年、平成元年度分からでも結構です。年度明記のうへ、二、三年分まとめてのご送金や別途寄付金、また来月号への協賛広告お申

込など、もちろん大歓迎です。年会費の領収は来年度21号の会員名簿中に記載いたします。

右、ご理解とお願いまで申しあげます。

(玄二)

計 報

昭和六十三年一月／平成
元年一月（事務局受理）

宇高直道殿	昭和五十二年四月
安達 規殿	昭和五十五年五月
庄 克衛殿	昭和六十一年七月四日
畑 武司殿	昭和六十一年八月
福井 弘殿	昭和六十一年八月九日
百木雅崇殿	昭和六十二年九月二十四日
山内隆幸殿	昭和六十三年七月二十七日
上田三四二殿	平成元年一月八日

心からご冥福をお祈り申し上げます。

昭和63年11月5日

会 計 報 告 書

関東水上郷友会

(昭和62年10月1日～昭和63年9月30日)

会計理事・足立和巳

収入		支出		部の摘要	
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	815,421	現金264,252 普通預金97,420 郵便振替貯金453,749	出版費	1,050,201	“山ざる19号”製作および発送代
年会費収入	445,000		通信・印刷費	125,790	総会、役員会、理事会等案内状印刷発送
総会費収入	300,000	60名	総会費	497,420	於 九段会館(62.11.21)
役員会費収入	153,500	延62名	長寿祝費	90,000	祝寿祝品
編集会費収入	57,000	19名	会議費	481,214	新春役員会、山ざる編集会議、 常任理事会等
寄付金	224,000		慶弔費	130,000	故伴仲信次会長香奠及び生花
広告料収入	734,000		支払手数料	11,840	郵便振替手数料及び銀行送金料
受取利息	977	預金利息	消耗品費他	245,200	ホロンビア旅行中止負担金及び事務用品代
雑収入	52,000	総会時郷里物産売却代	繰越金	370,913	現金47,926 普通預金132,819 郵便貯金131,868 振替貯金58,300
合計	2,781,898		合計	2,781,898	

'88 丹波の動き

丹波新聞の見出しから

政治・行政

○県立柏原病院が地域リハビリテーションの核に 新たに作業療法も 施設を倍増し治療充実 (1・7)

○整形外科に常勤医師 高齢化へ医療充実 (1・10)

○丹波で山南、篠山町を「星空の街」に認定(環境庁大気保全局) (1・14)

○丹波に大きなショック 西山敬次郎氏死去 政界復帰の志空し (1・17)

○森と文化と田園の町「丹波の森」構想を推進 六十三年度に基本構想と計画を策定(丹波総合開発促進協議会) (1・24)

○丹波十町祭典関連で「積極的型」予算校舎改築も意欲的に (1・28)

○祭典に向け篠山城跡整備 二の丸に「日本庭園」大書院跡は全面に芝 (1・31)

○市島町であぜ道国際交流実現 留学生十二人を受け入れ 各家庭で生活体験 (2・11)

○市島町の西宮市立市島学園が今年一ぱいで閉園 十七年間に十八万人が転地学習 (2・25)

○市島町議会「議会清浄化」を決議して「スリッパ事件」落着 三月末で議長辞任へ (2・28)

○市島町の「スリッパ事件」議会内部の体質改善が先決 大揺れノ波紋広がる 一日も早い正常化を (3・3)

○丹波各町の新年度予算続々と 祭典と学校整備重点に (3・10)

○丹波地区十町の予算案出そう 総額四百八十億円 前年当初比では微増 (3・13)

○どうなる? 「ポスト西山」多紀郡で自民二新人 氷上郡は藤原県議の動静も注目 (6・23)

目 (3・13)

○西山元代議士後援会有志が後継者に荻野明己氏(篠山町立町出身)を推す(丹波の国政を考える会) (3・24)

○篠山町長選に新家氏が無投票当選 二期目の町政スタート 指導力発揮に期待 (3・31)

○次期衆院選挙に五区から荻野明己氏(五四) 河本派Ⅱが出馬表明 西山代議士の後継で (3・31)

○丹波の人口十一万七千三百十五人 (昭和六十三年二月末現在)

○老人は病気が心配 親子同居がよい七十四% 住民意識調査まとまる(春日町社会福祉協議会) (5・22)

○氷上・多紀郡内の課税車は三万九千三百九十八台、前年比一・九%の増(柏原財務事務所調べ) (6・5)

○八代学院大の用地買戻し決定 十五年ぶりで活性化利用 市島町議会が議案可決 (6・23)

○市島町竹田小学校改築に着工 鉄筋三階建て校舎に (7・3)

○氷上郡六十二年の人口動態 出生、死亡とも減る 三大死因(心疾患、がん、脳血管疾患)が六十一% 婚姻三百三十組、離婚六十一組 (7・14)

○将来の「氷上市」を想定し総合庁舎構想打ち出す 来年度に委員会発足 安井柏原町長が議会で答弁 (7・17)

○薬用作物の産地育成事業モデル産地に指定を農水省に陳情(山南町)(8・28)

○丹波の十町分の六十三年度の普通交付税 総額は九十億七千九八一万円 (9・8)

○丹波の有権者数は八万六千九百二十七人 昨年同期と変わらず (9・8)

○六十二年度丹波十町全町で黒字決算 経常収支比率など好転 地方債依存度は増(丹波県民局調べ) (9・15)

○柏原で「巨木フォーラム」全国から六百人が参加 (10・30)

○山南町新庁舎は谷川地域に 道路網整備 (10・30)

備を最大限急げ 庁舎委員会が答申 (11・6)

○祭典後の地域づくりを推進 自然と伝統文化を守る丹波の森協会設立 理事長平岩氏、副理事長新家氏 役員、事業計画など決める (11・13)

○景気順調で就職好調 県外へ多く地元は減る 来春卒丹波の高校生(柏原職安調べ) (11・13)

○「国際交流のまち」事業 自治省が西紀町を指定 (11・17)

○青垣町長選現職と新人対決の様相 十六年ぶりに投票へ (11・20)

○青垣町長選平岩氏七選を果たす 長年の行政手腕評価 中尾氏の善戦及ばず (12・1)

○市島町のディサービス三年目迎えて定着 (12・4)

○山南町の至山に天文観測ランド「丹波の森」で構想 (12・8)

○山南町の木戸町長が四選出馬を表明 懸案の課題を解決 (12・18)

○丹波地区の高齢者率さらに高く六十五歳以上二万人台に トップは西紀の二〇・八% (12・18)

○山南町は薬草薬樹公園内に企業会館を併設し、神戸女子薬大の研究室を誘致 (12・22)

○ホロンピアエネルギーを活性化へ 成功した祭典イベントを継続 囲碁大会など(柏原町) (12・22)

○丹波の新成人は千五十三人 男子微増 女子減る (12・25)

事業

○近づくホロンピア'88 各会場で急ピッチPR活動も積極的に (1・7)

○牛津川(春日町)など改良復旧 小野橋(氷上町)の架け替えも(柏原土木管内) (1・28)

○高速道時代の到来 舞鶴自動車道、中国道と連結 丹南篠山口・吉川間二十二・五キロ 丹波の活性化に期待(2・7)

○丹波地域のゴルフ場開発計画続々 申

- 請中が十三か所も 工事中一か所(氷上町三原)地元や町は「歓迎」(2・18)
- 兵庫県がゴルフ場開発を規制方針 四月以降申請は受け付けない 有効土地利用など懸念 (2・25)
- 山南町小川に歴史資料館整備 漢方の里イベントも
- 青垣町高源寺周辺の休養研修施設 名称は「丹丘荘」に決まる 四月上旬にオープン (3・17)
- ホロンピア⁸⁸開幕迫り積極的に広報宣伝活動 祭典への参加を勧誘 四月上旬に向け集的に (3・20)
- 舞鶴自動車道喜びの開通式 県内全線開通を祝う (3・24)
- 柏原町田路の「丹波年輪の里」が完成 木とふれあいの発見 (3・27)
- 篠山町の田園文化ホール完成 芸術文化創造の拠点に 祭典の総合開会式場 (4・3)
- ホロンピア⁸⁸スタート 多彩なイベント満開 未来を拓く努力を (4・17)
- 市島町の「愛育館」が完成 三ツ塚マラソン大会と氷上高校と信愛女子招待バレーボール大会 (4・21)
- 丹波年輪の里遠足や研修に広い敷地にぎわう 「木の文化」にどっぷり (4・24)
- 播州峠改良に着手 トンネルで東播地域と結ぶ 総事業費は五十億超す(柏原土木発表) (5・1)
- 氷上町香良と三方で二グループが観光農園 阪神間に出てPR (5・1)
- 山南町和田の「漢方の里」知事らがテイクカット (5・19)
- 青垣町で丹波の森オープン 新緑の中をウォークラリー (5・19)
- 春日町国領の県民いこいの農園「遊農園かすが」オープン 会員ら六百人が参加 (5・19)
- 広域観光へ相互ネットワーク化推進 福知山線の複線化、北近畿豊岡道など早期にと三たん地方開発促進協議会会長に平岩青垣町長就任 (5・29)
- 篠山・丹南町の渡瀬橋と氷上町の幸料寺橋で完成祝い安全祈願祭や渡り初め (5・29)
- 丹波初の「農村下水道」丹南町宇土、岩崎地区で事業着手 六十六年度供用開始めざす 国五割、地元負担一割、残りは町の起債 (6・12)
- ホロンピア⁸⁸「公園都市博」折り返し予想どおりの入場者「二十一世紀住宅展」に人気 (6・23)
- 氷上町の西中、成松地区で公共下水道整備が完了 二十三億九千万円を投入 (6・23)
- 県道柏原―谷川中線の奥野々トンネルで改修 六十五年度着工見通しを藤原県議が朗報 (7・10)
- 春日、西紀町結ぶ念願の県道(東中―下板井線)改修 六十三年度に調査費つける (8・21)
- 春日町の文化ホール完成 深尾須磨子音楽祭で開幕 (8・25)
- 「公園都市博」が閉幕 入場者数は百

六万六千人 (9・4)

○竹田パイパス実現を 市島町下竹田で
促進協議会が総会 (9・8)

○山南町の太田橋完成 (9・11)

○「食と緑博」〃丹波の味覚〃いっぱい
多彩な内容で入場者迎える (9・22)

○国道四二七号播州峠三十五億円かけ改
良工事着手 喜びの祝賀会 (9・22)

○北摂・丹波の祭典の各会場への来場者
目標の百七十万人を突破 「食と緑博」
好調なすべり出し (9・29)

○「食と緑博」予想を上回る人出 五万
人目に記念品 (10・2)

○「食と緑博」平日も人出多く活況 本
物の〃味〃を提供 赤米コーナーに人気
(10・6)

○「食と緑博」十五日目で十万人突破
マツタケなど贈る (10・9)

○「食と緑博」十五万人突破 大試食会
に長蛇の列 丹波の結婚式も (10・13)

○「食と緑博」早々と二十万人を達成
(10・20)

○「食と緑博」会期十四日残し目標の二
十五万人を突破 (10・27)

○「食と緑博」感謝の気持ちこめて〃お別
れイベント〃 (11・3)

○ホロンピア'88篠山で総合閉会式
(11・6)

○「食と緑博」大成功 三十六万四千人
が入場 (11・10)

○山南町梶の船戸橋が完成 (12・4)

教育・学校

○氷上高校就職は全員が内定ノ進学者
もほとんど内定 (1・21)

○柏原高校パソコン二十五台を導入 C
AI学習などに活用 作法室が完成
(1・21)

○氷上高女子バレーボール部新チームつ
くり懸念 今年は〃正念場〃に (1・24)

○氷上西校でカルタ大会 古典に親しみ
を (1・24)

○柏高理数は六人超に 理数、英語コー
ス出願を締め切る (2・4)

○氷上高校女子バレーボール部西近畿地
区大会で七年連続優勝 全国大会へ
(2・18)

○柏原と鳳鳴で特別コースの入試 真剣
な表情で挑戦ノ (2・21)

○船城小六年生がやがて消える学び舎し
のび卒業記念に現校舎を模型で残す
(3・24)

○小学校(氷上郡)は大幅異動 丹波で
十人新校長に

笹倉豊柏原中学校長、松川豊市島中学校長、
久下信生和田中学校長、足立隆三新井小校
長、上島成和和田小学校長、足立恵芦田小
校長、藤本一明吉見小学校長、岸本健黒井
小学校長、舟川肇崇広小学校長、藤原健小川
小学校長、藤本忠上久下小学校長、荻野忠一
前山小学校長、吉見一郎進修中学校長、細見
和男船城小学校長、藤本務大路小学校長

○氷上郡教委と氷上町教委分裂後初の異
動 交流一件にとどまる (4・3)

○柏原高校の延べ大学合格者国公立大に六十三人 (5・12)

○郡内の小学五、六年生を対象にスポーツ活動を調査 多過ぎる試合参加数 六十%が体の痛みを訴え(氷上郡教委調べ) (6・16)

○柏原高校にぎやかに体育大会 夏空に若い声が響く (6・30)

○氷上西校でプール開き シンクロの公開演技も (8・21)

○やったぞ! 国体出場 柏高の松下幸弘君の高校やり投げの部 (9・1)

○氷上高女子バレー部も国体に出場 (9・1)

(9・1)

○高校二学級増求める 来春の中卒増に対応し氷上郡地域教育推進協議会が県教委に要望書提出 (10・9)

○氷上西高校の体育大会 若さあふれる演技 (10・9)

○多紀郡は一学級増を県教委に陳情 (10・13)

○柏陵同窓会長に吉見文憲氏 新陣容整

う (10・13)

○修成建設専門学校研修センターを青垣町東芦田で起工式 六十五年四月の開校めざす (10・16)

○よくやった氷上高校 京都国体で逆転優勝 二回目の二冠達成 全国制覇は五回目に(高校女子バレーボール) (10・23)

○篠山産高の就職状況 地元志向に拍車自宅通勤六割超える (11・17)

○来年度の高校募集定員地元の要望が実現 柏原と氷上西で学級増 (12・8)

産 業

○丹波十町六十二年産米の収穫量 前年の九十四% 五十五年以来の不作に (1・21)

○暖冬に麦が成長過剰 寒波襲来が心配 (1・28)

○園児の給食にテンペ 食品業界も注目 学者から問い合わせも(春日町商工会) (1・28)

(1・28)

○山南町の工業団地アルミ加工のコンビナート化へ 銭屋アルミが進出(1・31)

○六十二年農業所得標準きまる 水稲不作でダウン 野菜はほぼ平年並み(柏原税務署管内) (2・11)

○市島、石生、古市の三駅に駅員を配置 JR西日本が申し入れ (2・18)

○春日町の旧多田トンネルの「JRシメジ」好評です 一日平均四十〜五十キロ出荷 採算ベースにのせる (2・21)

○兵庫土建多紀支部一日一万五千円に協定賃金を改正 (2・28)

○氷上郡建築協会が三年ぶりに一日一万五千円に改正 (3・6)

○篠山町二階町店舗に木製の看板 愛称“はいから通り” (3・6)

○西紀のビーンズサワー 十万缶の生産を (3・20)

○青垣町で丹波大納言小豆生産者大会 百ヘクタールの早期達成をめざす ゆるがめ産地形成を (3・24)

○多紀郡で山の芋の植え付け 豊作への

期待込めて

(4・7)

○貸農園かすがで契約者が山のイモの植え込みで初の野良仕事

(4・14)

○丹波農協の黒豆二級品の付加価値対策
試作重ねて商品化「衣掛」「サラダ風味」

(4・17)

○山南町のスッポンの「ひさご」葉草入りのアメを発売

(4・24)

○氷上郡内の六農協は総代会を踏まえ近く合併推進委員会を発足 来年三月末をめどに規模拡大し経営基盤確立(4・28)

○高級和牛志向を反映 氷上郡和牛せり市で高値相場が続く

(5・26)

○珍味の山椒の実 作柄はやや不良(春日町農協)

(6・2)

○米の消費拡大ねらい柏原町の古倉伸夫さん方で「香り米」を試作 栽培

(6・9)

○氷上町石生領町の「青空市」人気集める 日曜ごとに水分れ公園の駐車場で開催

店 (6・12)

○テンペ(インドネシアの伝統的な大豆

発酵食品)給食を開始 丹波で初めて実用化 春日町の明德、進修両保育園で

(6・12)

○六十二年丹波の観光客入込数は過去最高の百八十万五千人 まつり、ゴルフ、テニス(丹波県民局調べ)

(6・16)

○おいしい自然米をPR 「丹波水分れの水」を商品化(氷上町と氷上酪農組合)

(6・26)

○春日町栢野でマツタケ五〇グラム(一本)採取 香りよく品質も良ノ秋の本番は?

(7・3)

○森林浴の香りをどうぞ フイトンチップの芳香剤「水分れの森」を商品化(氷上町の村おこし委員会)

(7・14)

○西宮市の子らが甲賀山(氷上町)へ 倒木作業に汗流す 間伐材を丸太小屋作りに活用

(7・14)

○超促成栽培に冷蔵庫 特産の花き振興策に集出荷倉庫を建設(氷上町農協)

(7・17)

○五農協で合併推進も 春日町農協は

「慎重」臨時総代会の審議見合せる

(7・21)

○小豆集出荷場を建設 品質向上をめざす春日町農協

(7・24)

○丹波地区の企業技術革新に対応して大卒採用が増加(雇用政策促進協議会調べ)

(7・28)

○自然の中で肉料理ノ 生産から販売まで一貫行程 市島町の高見さんがレストラン経営

(7・28)

○長雨と冷夏で被害 ナス六十六%、スイートコーン十二・三%減収 品薄現象で高値呼ぶ(春日町)

(8・4)

○但馬から優良系統牛導入 輸入自由化対抗策 氷上郡畜連が四十周年事業で郡内レベルを向上

(9・11)

○ナシの出荷始まるノ 作柄は平年作に(春日町野上野)

(9・11)

○灘神戸生協の役員らがふるさと村の候補地にと市島町と戸地区を現地視察

(9・18)

○丹波マツタケ順調に 平年作上回り出

荷量増 丹波グリも豊作 (10・6)

○清らかな流れ取り戻そう 青垣の平山
さんが全国浄化槽研究集会で発表

(10・9)

○丹波篠山味まつり開幕 栗のつかみどり大会も (10・9)

○今田町の「陶器まつり」に十万人 人格安コーナーに人気 (10・20)

○篠山町西浜谷で宅地開発 一坪十九万八千五百円で十八区画を分譲 (10・23)

○丹波の特産品の知名度 トップは丹波グリ 極端に低い文化財(県民アンケート結果) (11・13)

○活気づく水上工業団地 二社の誘致が決まる (11・27)

○イチゴワイン発売へ 色あざやかで婦人に人気(市島町山名酒造で) (11・27)

○簡易水洗はお断り し尿処理で注意(水上多可衛生事務組合) (12・1)

○大納言小豆百十トンを収穫 春日町農協が出荷へ (12・25)

○丹波マツタケ根滅の危機 ツボミ取ら

ぬ制度も (12・29)

社会・文化

○手負いの猪が村人をガブリ(市島町徳尾) (1・10)

○篠山ABCマラソン応募多数で受け付け停止 (1・10)

○水上町の水上遺跡から古墳前期の小型丸型つばが出土 石矢じりや石包丁も弥生時代の農耕示す (1・14)

○柏原町の春木さん日本手工芸美術展(東京都美術館で開催)で押し絵が見事入選 (1・14)

○たばこ離れまた進む 消費税額四億六千万円 前年比四・四%ダウン(1・17)

○陶友会が穴窯技法を今に再現 県立文化会館で作品展開く (1・17)

○「車塚」を観光名所に 近くの山に展望所など(篠山町) (1・21)

○柏原署六十二年中の検挙状況 万引きなど少年事件増加 無戸締まりが盗難の八十% (1・24)

○氷上町佐野の鳥獣保護区 カモ類は徐々に定着 柏原農林事務所が生息調査 (1・28)

○東西天目山の交流はかる 高源寺と山梨県大和村の栖雲寺 二十五日に青垣でサミット (2・4)

○市島町ふれあい実行委員会が未婚者にふれあいの場 結婚難の解消めざし玉姫殿(福知山市)でつどい (2・4)

○篠山町河原町で工房の建設工事進む 王地山焼復興めざす (2・7)

○市島町折杉神社の「カユ占い」今年の後半は天候不順 稲作、果物まずまず (2・7)

○わあ、雪が降ってるぞ! 春日町野上野で尼崎の子らが交流会 (2・14)

○氷上町常楽の大崎稲荷神社の社殿、鳥居を整備 完成祝い春の大祭開く (2・14)

○寒さが戻り雪空の中二日間に延べ九万人にぎわった柏原の厄除け大祭 (2・21)

- 丹南町の“長者屋敷”の復元進む
「食と緑博」の会場で (2・25)
- 青垣町で東西両天目山交流サミット
歴史的なつながり大切に 特産品や住民
の交流も 将来の友好関係を確認 (2・28)
- 市島町樽井の土田株に先祖の甲冑が里
帰り 室町末期「永録」の銘 土田和泉
が着用? (3・3)
- 国領温泉(春日町)の助七旅館“泉源
探し”大成功! 施設を改築し近代化 (3・6)
- 篠山ABCマラソン 走れ走れ一万一
千人 (3・10)
- 舞鶴自動車道開通前に高速道を“銀輪
快走” 千九百人が参加 (3・10)
- 来年のNHK大河ドラマ「春日局」の
取材に脚本家の橋田寿賀子さんが春日町
を訪れる 地元は“PR”と大歓迎 (3・10)
- 珍しいコウモリを採集 柏原高校の校
舎内で発見 日本でも例少ないオヒキコ
ウモリ 兵庫県では初の記録 (3・10)
- 黒井城跡を国指定に内定 文化財保護
審議会が文部大臣に答申 (3・13)
- 大路小・中の同窓会が深尾須磨子の碑
建立 秋には生誕百年祭を計画 (3・13)
- 野々間遺跡(春日町)の銅鐸 考古資
料県指定文化財に (3・17)
- 便利になって危険が増 春日町坂の交
差点 柏原署は県に信号機の設置を要望 (3・27)
- “花の鐘ヶ坂”を復活 にぎやかに桜
まつり (4・3)
- 水上町石生の水分れ資料館 日本一低
い分水界の謎に迫る 高瀬舟の原寸模型
も (4・7)
- ようこそ丹波へ! 篠山・丹南を結ぶ
渡瀬橋の四つの親柱にイノシシの像を設
置 (4・7)
- ホロンピア'88開会式ご出席など常陸宮
ご夫妻が丹波路へ初のご訪問 (4・10)
- 柏原町田路の手なし地藏尊 春雨の中
で法要 (4・10)
- キャッチセールスに注意 苦情相談が
増え八十六件も 内容も年々深刻に(丹
波生活科学センター) (4・10)
- 「ふるさと独演会」で桂文珍さんが熱
演 篠山町たんば田園都市交響ホールで (4・28)
- 中信用金庫が総代会 大村氏、不正流
用事件で引責 新理事長に生田伸一郎氏
 (5・1)
- ホロンピアにゴールデンウィーク中公
園都市博筆頭に十八万人 丹波年輪の里
親子連れでゆったり 駐車場がパンク状
態 (5・8)
- 六十二年の高額納税者 一千万円以上
は三十四人に(柏原税務署管内) (5・8)
- 春日町とオーバン市(米国・ワシント
ン州) 姉妹都市提携二十周年記念で交流
会 (5・12)
- 柏原町の榊さんが郷土誌を物語ふう
に「丹波柏原」を出版 (5・12)
- “わが町”こそ出生地! 春日局フィ

ーバー 岐阜県の二市町（大垣市と揖斐川町）も名乗り
（5・15）

○柏原町歴史の町を整備 朱塗りの木の根橋
（5・19）

○土器で見る“古代展” 丹波あけぼの特別展開く 丹波の遺跡出土品を集める
（春日町歴史民俗資料館）
（5・26）

○丹南町北野の大山城の空堀跡発見 関西では珍しい遺構 大きな台地城示す
（5・29）

○山南町和田の岩尾城跡 城郭研究に貴重な遺構 県文化財指定を申請（6・5）

○篠山の王地山陶器所で念願の“登り窯”完成
（6・5）

○柏原川など水質悪化 六十二年度の環境測定結果（柏原保健所調べ）（6・9）

○丹南町の北野遺跡の住居跡から弥生後期の鉄刀発見 県下初、熱い視線
（6・30）

○「丹波志」の全貌解明 篠山藩士・水戸貞の著作を研究し、篠山の嵐さんが論文に
（7・3）

○“暴力集団”追放をバレードなどで訴え青垣で郡民の集い
（7・7）

○“春日局”ブーム呼ぶ 興禪寺へ月平均四百人 春日町観光協会対応に大わらわ
（7・17）

○丹波の特産品などご覧に美智子さま 篠山へ「民俗芸能祭」でお迎え（7・21）

○真夏のきょう宴 円応教の花火大会
（7・21）

○丹南町一印谷の西向遺跡で発掘調査「大山荘」の集落跡か
（7・24）

○水上町水上で銅山の関連施設か 江戸期の柵列（さくれつ）発見
（8・4）

○丹波年輪の里で磯尾柏里展が開幕 遺作までの六十七点を展示
（8・4）

○高校総体の自転車ロード 沿道の声援を受けて銀輪が多紀郡を快走
（8・11）

○白内障の手術に用いる合成吸収糸の障害 県立柏原病院眼科の山田医師が欧州の学会で発表
（8・11）

○お祭りムード一色 篠山のデカンショ祭り ちょうちん飾る

青垣町の佐治川祭り 火祭りや大花火大会 つかみ取りや農作物収穫で田舎生活を満喫
（8・14）

○春日町野上野の薬師堂 本尊の薬師如来像盗まれる
（8・21）

○柏原町の大ケヤキ保護に対策 庁舎の一部取り除く
（8・25）

○丹波出身の勤皇の志士を詳しく故松井拳堂の遺稿自宅で発見 近く本に
（8・28）

○丹波の百歳老人は七人、八十八歳以上は八五二人
（9・1）

○郡衙（ぐんが）関連の建物跡か？ 篠山町西浜谷で出土 山陰道ルートで注目
（9・1）

○「食と縁博」の期間中 丹南ふるさと祭り 朝市、武者行列など多彩 篠山町では盛大に城下町まつり
（9・11）

○春日町三尾山麓で丹波初のもトクロス大会 雨の中転倒車続出 スリル満点の競技に拍手
（9・15）

○篠山春日社で「夜能」幽玄の舞台に酔う (9・15)

○元気で楽しい出産を 柏原の産婦人科医院でマタニティエアロビクスを導入

(9・18)

○篠山で全国車イスマラソン 百三十八人が参加 (9・22)

○春日町の黒井城と出城まつり観光客を含め五千人 (9・29)

○丹波路の秋を満喫 大阪水上郡友会のふるさと訪問 (9・29)

○秋の祭礼「自粛ムード」で実施 黒井鹿場は中止 (10・2)

○陛下のご快癒祈り 柏原八幡神社で祈願祭と記帳を行う (10・2)

○大けやきにしめ縄 巨木フォーラムに備えて (柏原町) (10・13)

○年々高まる人気の篠山ABCマラソン 先着一万形で締め切る (10・16)

○NHK「春日局」スタッフが朝霧の興禅寺をロケ 黒井城跡からは落日を対談に橋田さん出席 (10・30)

○氷上町議会開会三百回の記念行事 文珍さんの講演に大爆笑 (11・3)

○もみじの名所高源寺で三重塔落慶法要 琴の演奏や甘酒 (11・6)

○兵庫青垣もみじの里健康マラソン大会 二千六百二十一人が力走 バザーも大にぎわい 日本画展にも続々と鑑賞者 (11・10)

○山南町石がん寺もみじ祭り 威風堂々の武者行列 (11・17)

○春日町の興禅寺が観光バスのルートに「春日局」で観光客急増 (12・1)

○春日局生誕地は興禅寺 臼杵城の御家系典に最近の著作で裏付け (12・11)

○篠山ABCマラソン申し込み者一万三千人を突破 大会の安全を考慮して九日間早く締め切る (12・15)

○春日町の国領温泉 正月三日間は満員 温泉につかって「ぼたん鍋」丹波の秘湯の人気 (12・18)

○丹波自動車教習所は高級志向に対応して路上教習にベンツを購入 (12・25)

○春日局PR電車登場 福知山―大阪間運行始める (12・29)

昭和六十四年一月一日特集号

○'89丹波十町の課題 ポスト祭典の地域整備に意欲的

○夏の参院選展望 実力伯仲し激戦必至 兵庫選挙区五氏の陣営動き活発

○次期衆院選に備えて兵庫五区の情勢二現職に挑む新人

○正念場迎える水上郡の農協合併 財務調整や本所位置が成否のカギ?

○年のはじめ心新たに「信無くば政立たず」 佐々木良作氏 (衆議院議員・民社党常任顧問)

郷土の発展のために頑張る 梶原 清氏 (参議院議員)

沈思と新しい出発の年 中西一郎氏 (参議院議員)

「ニュー丹波」実現へ 谷 洋一氏 (衆議院議員)

東奔西走渾身の努力

○丹波にゆかりの二人の画匠

富岡鉄斎 母の生まれ育った土地に寄

せる思い　扇面や手紙など母の生家（春日町）に残る

○故郷への年賀状

後進の育成に“夢”を

田 季晴（伊丹市）

三村精志郎（寝屋川市）
楽しかった郷土訪問

田原徳一（西宮市）

村上末吉（東京都）

お便り・短信

藤田（足立）かねさん（春日町国領）

八十歳のお祝品として、会員女性の手になる立派な陶彫を戴き有難く厚く御礼申し上げます。三年前には私の姉竹林須磨子もお祝を受け、姉妹揃って長寿を味っております。御丁重な会長さんの添状を戴き感謝いたします。益々郷友会の隆盛をお祈り申し上げます。

植村（善積）章子さん（春日町長王）

新会長村上様ご就任何卒よろしくお願
い申し上げます。前から申上げて居ります
通り私は何も出来ませんのでお役目ご解
任頂き度よろしく願います。近所の
散歩以外、付添なしでは出ない事にして
おります。

会のご発展をお祈りしております

安達靖子さん（福知山福女出身）

主人安達規は五十五年五月急逝致しました。七回忌を終え、初めて主人の書類を見る今頃です。それだけショックの大きいものとお察し下され、ここに連絡遅くなりしことお詫び申し上げ、ご厚情を深く感謝致します。山ざる第十一号「お便り・短信」の五十二頁にのせているのを懐しく眺めています。会費五千元払込みましたのでお納め下さい。

小谷正雄さん（柏原町）

その後ご無沙汰致しまして申しわけございません。とくに「山ざる」に私の名刺広告が出ておりましたので、ご送金しなければと気にしながらつい遅れ恐縮に存じます。早速お送りしますのでよろしく。梅雨の候になりますますが会が益々ご発展されるようお祈りしております。

須原清さん（市島町下竹田）

ぐずついていた今年の花も漸く昨日から開いて陽気もよくなってきました。皆様お元気のことゝ存じあげます。ホロン

ピア旅の件いろいろご配慮頂きましたが、参加もできず残念です。吉住氏始め委員ご一同様の苦衷を察し言葉もございませ

春日の各役場へ寄付しておきました。有難うございました。足立源治君のご恢復をお祈りしております。

一クホテルに勤務することになりました。御帝国ホテル在職中は多年にわたり公私ともにご芳情を賜り有難うございました。今後とも倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようひとえにお願い申し上げます。

先ずは御礼まで。

百木重子さん（百木雅崇さんの奥様）

若森敏郎さん（山南町北太田）

新緑の季節となりました。山ざる十九号拝受しました。今年は例年に比し随分早く着きました。編集委員その他関係者皆様のひたぶるな努力の賜物です。謙虚巻頭言、故人に対する温かい真情溢る、追想の数々感銘いたしました。

六十二年九月二十四日死去致しました。長い間お世話様になりありがとうございました。広告料は振込ませて頂きました。中野区弥生町六ノハノ十一。

皆々様如何お暮しですか。お蔭様にて小生ビルマ、パングラディシュ、パキスタンと拡大して業務は忙しくなっております。御一同様のご健勝と会の益々のご発展をお祈りいたします。

石亀（足立）義明さん（青垣町佐治 関

田英夫さん（柏原町 参議院議員）

大嶋喜好さん（氷上町）

西氷上郷友会副会長）

高見嘉都司さん（市島町）

大木道則さん（山南町）

今回山ざるをお送り下さいまして大変楽しく読ませて戴きました。有難く厚く御礼申し上げます。広告で石亀の姓を見てどこの出身ですかとたずねられることが多いのです。他の方も出身町がわかればお互に便利で親しみが湧いてきます。是非よろしく。

すっきりしない天氣が続きます。皆々様ご健勝の砌り大慶至極に存じ上げます。今回「山ざる」をお送り頂き有難うございました。役員の方々のご苦労に對し感謝申しあげます。会の益々のご発展を期待致しております。

連絡があり、二十数年ぶりに級友と会ってまいりました。久しぶりの神戸で町の様子も変り、年の流れを感じさせられました。

小田知尊さん（柏原町 丹波新聞社社長）

山中岩雄さん（青垣町）

現在、岡山理科大学に勤めています。

昨日「山ざる」七冊受け取りました。息子、谷君の他に、柏原、氷上、青垣、

この度御帝国ホテルを円満退職し、昭和六十四年六月開業予定の俤ロイヤルパ

大塚秀式さん（氷上町）
郷土を去り三十四年になります。三年

に一度位両親の墓参に市辺へ寄るのが唯一の郷土とのつながりとなってしまいました。

音無太美子さん（春日町）

丹波に居を移しまして一年がたちました。こちらまで総会のご案内を下さいます。有難く、以前出席させて頂いた時の場面が浮んでとても懐しく思い出しております。坂上様のお母様とは同じ黒井で子供のころお人形ごっこをして遊んだこともありました。ご子息勝朗様からもお心のもったお手紙頂きました。山ざるに歌でもといっておりましたので昨年十月からの一年をふるさと直産記させて頂きます。

片山邦夫さん（春日町黒井）

昨年体調をくずし二カ月程入院しましたが今はすっかりよくなり毎日のんびりと過しております。皆様にどうぞよろしくお伝え下さい。

門山寿子さん（氷上町）

主人の転勤に伴い、八月西独のフラン

クフルトに行きます。海外は二度目ですが気持ちも新たにがんばりたいと思います。帰国しました時にはまたよろしく願います。

岸部正巳さん（春日町朝日）

毎年郷里には三、四回帰りますが、同年輩以上の方は少なくなり、真に浦島の感がします。私も後六年で東京都を退職しますと地区のため一役働きたいと思っています。

河本幸子さん（柏原町）

一年たつのは誠に早いものです。毎回ご案内を頂き有難うございます。丹波は今ごろが一番しっとりとしてよろしいころかと思えます。美味しい栗や松茸の季節でもあります。故郷はいいものですね。今年も出席出来ず残念に思っています。が我々の同級会はやっております。ますますの発展を祈ります。

後藤豊次さん（山南町）

会のため種々ご尽力下され深謝申し上げます。私こと昨年激しい腰痛にかかり歩

行も困難になりましたので残念ながら欠席させて頂きます。常岡様へ、故ご尊父様と同級生でありながらご貴殿へお話し申し上げることも得ませず、絵画の展示会のご案内を頂きながらご無礼申しております。不悪お許し下さい。

志村勝郎さん（柏原町）

中国河南省の鄭州市において九月八日から開幕した日中友好表装美術展覧会への出席を目的とした訪中団の一員として訪中し、九月五日出発し、北京、鄭州、洛陽、西安、桂林、上海を経て九月十七日に帰国しました。いづれ訪中記をまとめて山ざるにご紹介しようかと考えています。

瀬々妙子さん（柏原町）

失業中？とあつては安い会費のご好意に応えてもと思いましたが日時が重なりました。晴れて趣味にも書きましたが五十代の手習いとして舞踊を始めて一年四カ月、来年の公演（群舞の一員）のけい古が始まったのです。新米とあつて抜け

られずあしからずよろしく。

関裕三さん（春日町）

一度出席したく心にはしていますが現在電話局を出て支社にいますと今の時期は監査で各電話局回りで忙がしく土曜も日曜もありません。支社を出れば出席出来ると思います。今後ともよろしく。

関正治さん（山南町）

只今病氣療養中のため止むなく欠席させて頂きます。なお高齢のためこの度をもって脱会させて頂きたく、よろしくお取り計いの程お願い申し上げます。長期間お世話になり有難うございました。

田原敏男さん（柏原町）

山ざるの名刺広告は本人に無断で掲載しないで下さい。年会費は別途送金させて頂きます。

高見寛明さん（春日町）

茨城県に住んでおりましたが昭和六十二年四月神戸に転勤となりました。長らく兵庫を離れていましたので関西弁が口から出てこず周囲にとけこめておりませ

ん。

畑武司さんのご遺族（春日町）

この度ご案内を頂きましたが表記のとおり亡くなりました。郷友会の皆様のご健康をお祈り申し上げまして厚くお礼申し上げます。村上先生にもよろしくお伝え下さい。豊中市稲津町二丁目六一五葉山たず子さん（氷上町）

懇親会のおしらせありがとうございました。初めての機会だったのでとても行きたかったのですが、出席出来ない事情が出来、残念でなりません。先日、田舎に帰った時、食と緑の祭典にいつて来ました。本当に懐しい一時を過ぎて頂き心残りする思いで新幹線に乗りました。次の集まりには参加させて頂きませ。皆々様によりしくお伝え下さい。

林田孝子さん（柏原町）

私事六十二年九月に主人を亡くしました。六十八年の夫婦生活の幕を閉じました。余生をどう生活できますか覚束ないのですが、草花にでも頼って生きたいと

思っています。どうぞよろしく。

船越祥郎さん（春日町）

永年勤務した税務署を七月に退職し、八月に墓参を兼ねて丹波へ参りました。久し振りのことにて、水分れ公園、年輪の森などへ回ってみました。舞鶴自動車道の開通など目を見張るものがありました。住所地に永住の積りで九月から税理士の仕事を始め、今後とも丹波出身の皆様とおつき合いをお願いします。

前田和秀さん（柏原町）

昭和六十三年三月、自衛隊を退職し、四月から埼玉県職員として飯能保健所に勤務しました。自衛隊に三十三年間勤務し陸将補にて退職できたのも皆様の暖かいご支援のためものと感謝しております。三澤智子さん（春日町）

昨年八月より福岡に参りました。子供たちも少し手が離れ郷友会にも出席させて頂きたいと思っていた矢先の転勤でした。二、三年はこちらの生活になるようです。残念ですがしばらくは欠席させて

頂きたいと思ひます。どうぞよろしく。

村上照雄さん（春日町長）

ホロンピア⁸⁸ 丹波の祭典も好評のうちに終盤を迎え、日夜イベントが催され兵庫県下も新しく変わりつつあります。公務行事の為今回は欠席いたしますが、皆様によりしくお伝え下さい。

山口敏之さん（氷上町）

昨年春埼玉から湘南に越してきてようやく方向感覚がつかめてきました。思えば山のない土地とは何とも味けないように思ひます。全く関西弁がぬけず、出かぜに來ている気がしてなりません。

山田淑子さん（柏原町下町）

菅野様をご紹介頂いてから一席お目にかかり漸く今年は菅野様と二人で大英断で出席させて頂く事にしました。はじめでどうしたらいいのかわかりませんが、よろしくお願ひ致します。年よりのことご迷惑をかけると思ひますがよろしくお願ひ致します。

山本島勇さん（春日町）

十九年間勤めたN T Tを退職し大学の教官になりました。そのため水戸から福井に転居しました。

余田士郎さん（市島町）

親父と以前に出させていただいた事がありすが、丁度半端な年齢のために余り知人もなく心配です。お手紙のお言葉に励まされて出席いたします。

渡辺和代さん（柏原町）

いつも遠くまでご連絡下さいまして有難うございます。山ざるやその中の村上様のお名前を母（荻田庄五郎の妻）がとても懐しく喜んで眺めています。私事で申しわけございませんが、村上様にその様にお伝え頂けると嬉しいです。ご盛会の様子を京都から思っています。

渡辺政子さん（氷上町）

ふるさと丹波も紅葉の季節、折にふれ懐しい人々と共に季節の移り変わりを思ひます。来年の四月には柏高同窓会がありますとか、ぜひ出席皆様にお目もじ出來

ますことを楽しみにしております。

久米裕さん（柏原町）

内容の充実した「山ざる」19号拝読させて頂きました。表紙の高源寺は佐治小学校一年生の時の遠足でした。昔懐しく想ひ出されます。関係者の努力に感謝しつつ三〇〇〇円送金します。（63・5・2）

余田士郎さん（市島町）

有田さんが亡くなり、伯父が亡くなり、父が死に、従兄弟の大野久男が亡くなり、だんだん田舎が遠くなり、何となくさびしさが疎遠に変わりつつある時に、又田舎を思ひ出させる本にめぐりあいました。そんな時田舎から地積調査かなにかで、へんな土地が出てきたらしいと電話があったり、やっぱりまだ田舎とは切れていないと思う。（63・5・6）

上田（豊嶋）由美子さん（氷上町成松）

結婚するまでは日本臓器製薬の本社、小西甚右衛門社長のもとで勤めていました。現在七才、四才、二才と男三人の子

供に恵まれ、てんやわんやの毎日を過しております。(63・5・2)

畑雅樹さん(春日町多利)

東北、上越新幹線の運行を担当しております。上野新幹線第一運転所長を三年余り勤めましたが、63年3月25日の定期異動でJR東日本新幹線運行本部運用課長になりました。2年後の東京駅乗り入れの準備に頑張っております。(63・5・1)

畑中慶次さん(水上町成松)

62年度は振替用紙が挿入されていなかったため会費送金せず失礼しました。本年は5年分納入しますのようしく願います。連休を利用して、初めてゆっくり読ませて頂きました。編集ご苦労様です。(63・5・6)

小中克巳さん(市島町)

ご努力のあとがうかがえます。大変楽しく読んでいます。ご発展をお祈りします。毎年会費を送金しているつもりです

が54年度分迄領収との事ですが、一度よく調べて下さい。(63・5・7)

植村章子さん(春日町)

山ざる19号有難く頂きました。内容が充実していて、楽しく読みました。丹波の動き「丹波新聞の見出しから」はとても郷里の事がよく判って参考になりました。「山ざる」楽しく読ませて頂きました。編集の皆様は厚く御礼申し上げます。

志村勝郎様の「柏原音頭」俗曲の「松づくし」のこんな音頭がある事を知りました。

一度聞きたいですがとても望めません。各方面の一線にご活躍のご様子などのせて頂いて頼もしく読ませて頂きました。事御礼申しあげます。ますますのご発展を祈ります。(63・5・9)

天野清子さん(水上町谷村)

いつも大変お世話さまでございます。なつかしく又楽しく読ませていただいております。先ずは元気に過しております。今後共よろしくお願い申し上げます。(63・5・9)

森田宏さん(市島町中竹田)

旧知の方の消息がわかり、大変なつかしく、昔を思い出しております。「山ざる」については特に意見はありません。

当会のみます御発展を祈念しております。滞納しておりました会費二年分を送り致します。本年八月には東京勤務となりそうです。秋の総会には出席します。(63・5・10)

片瀬勝義さん(柏原町)

会誌山ざる十九号有難く拝読いたしました。会費63・64年年度分二〇〇円今後共よろしくお願い申し上げます。(63・5・11)

足立治さん(青垣町杉谷)

編集の御苦労お察し申しあげます。ご自愛の上御活躍下さるようお祈り申し上げます。64年度の会費をお送りします。(63・5・10)

東田実さん(山南町上滝)

いつもいろいろとお世話様になり有難うございます。会誌はいつも楽しく拝読

致しております。今年の会合には残念ながら出席出来ませず残念に思っております。今後共よろしくお願い致します。

細川倫夫さん（山南町下滝）

いつも会誌を送っていただき、懐しく読ませていたゞいております。会費3年分送付致します。（63・5・10）

足立美都子さん（柏原町）

山ざる誌が届きますとまず表紙をしみじみと鑑賞し目次を眺めて知人の名はないかと確めます。それからおもむろに一頁ずつくって行きます。小さな本なのにぎつしり丹波の思いにひたれるひとときです。年に一度というのはほんとうに待ち遠しいですね。去年11月友人鶴沢洋子さんの葬儀に参列しました。50なかばで一人息子を残り御主人の後を追った洋子さん、どんな思いだったろうと涙が止りませんでした。（63・5・12）

竹内健さん（氷上町）

いまだに突っ張っている牛肉とオレン

ジ。「いゝ加減にしろ」と言いたい。まだ、「コメ」が残っているのに。どう見ても世界の常識をはずれたエゴイズムで悪戦苦闘している。世界から弧立して何の得があるのか？ 阿呆なこっちゃ。55年前42対1で弧立、国際連盟を脱退してから、世界戦争に敗れるまで、国をメチャメチャにした当時と農耕民族の脳細胞と体質はチートモ進化していない。昔は「農」は「国の基」であったが、今は違う。「豊芦原の瑞穂の国」を「農」で亡ろばさぬ様気をつけたい。（63・5・9）

莊克衛さん（柏原町）

「山ざる」19号御送り下さいまして真に嬉しく拝見致しました。編集委員の方の御努力を感謝致して居ります。

梶田廣子さん（柏原町）

編集委員の皆々様大変ご苦勞様でございます。この度勝手な事を申上げてすみませんが、会員名簿の名前に×をなさいますのでしたら載せないで戴きたいです。

失礼な事申上げてすみません。悪しからず。（63・6・8）

坂本重雄さん（柏原町）

若い世代の会員の原稿が欲しいですね。世代別に原稿（随想など）をリレー式で引受けてもらうなども一法かと思います。（63・6・9）

生田清弘さん（柏原町）

いつもお世話になっております。編集委員の方々に敬意を表しますとともに御礼申しあげます。内容も大変充実して参りましたし楽しみに致しております。ただ、会員名簿等に関しましては訂正を申し入れましても、なかなかメンテが行届かず、相互の連絡上困っていますのでよろしく。（63・6・20）

杉上能章さん（氷上町清住）

山ざる十九号P51の「郷友のみなさまへ」を拝読し、あらためて胸にグサリとそこご苦勞をかみしめました。無から有を産み出す苦しみ、そしてその後に来る喜びはたずさわったものにしか判らない

ものです。会員の皆様、せめて年会費だけは、キチンと納めそのご苦勞の一端に報いようではありませんか。「八十年の

人生をふりかえる」の藤田かね様、私の母（八十三才で健在）の過ぎ越し方とだぶらせて読ませていただきました。「丹波への思い」の小寺確郎様、まるで水上郡の地図を指でたどるような御一文、今すぐにもとんで帰ってこの目で故郷をみたくまりました。どうか今後とも御健筆をおふるい下さい。（63・7・13）

畑延雄さん（春日町）

63年5月の連休に、春日町多利にある亡父の墓参りに帰省しました。帰省の際はいつも中央道を通り車で帰りますが、春日インターまで高速道路で行くことができ、大変便利になりました。高速道路の他は、昔ながらの故郷で、81才の母としばし過してきました。（63・7・20）
加賀山次郎さん（柏原町）

年輩の記事が多いようですが、若い人達の記事が多い方がよろしいのでは。

世話役を年代別に選任し、若い人達の総会への参加を増す工夫が必要だと思います。（63・8・2）

林田孝子さん（柏原町）

山ざる誌大変楽しく拝見させて頂きました。御皆々様のお骨折が身にします。（63・5・1）

足立治さん（青垣町杉谷）

願わくば若者たちの足手まといにならず、年寄りらしく無理せず、健康第一に、そして世間のためになにか役立てば幸いと思っています。たんたんとききる人生八

合目。（63・10・14）

足立和巳さん（青垣町）

十月六日母病気のため神戸掖済会病院へ入院させ、十月八、九日と身のまわりの物を取りに郷里へ帰ったついでに、松倉高源寺へちょっと足をのびしました。門その他あまりにも荒れっ放しの感深く、代って立派なレストラン風の建物に不似合を感じさせられました。（63・10・26）

足立真一さん（青垣町徳畑） 同松子さ

ん（氷上町香良）

長女はもう大学生。双子の妹たちも中学三年生になりました。もう子供も手から離れます。次の機会にはぜひ（総会に）出席させて頂きたいと思います。（63・10・26）

赤木芳子さん（篠山町）

本年四月当地（練馬区光ヶ丘）へ移転しました。高倍率でしたが分譲に当選致しました。夫の転勤のためあちこち転居致しましたが、今度からは単身赴任をしてみようことになりそうです。（63・5・6）

新川和博さん（春日町黒井）

昭和六十三年三月三十一日をもって東京都立農産高等学校長を退職し、第二の人生を歩んでいます。（63・5・6）
上田正巳さん（柏原町田路）

祝寿会にご招待頂き、誠にありがとうございます。喜んで出席させて頂く予定でしたが、突然痛風が起き、医師の治療を受けております。歩行困難のため残

念ですが欠席します。日織株式会社は六月で退職しました。(63・10・29)

●お便りをお待ちしております。

近況、ご感想、ご意見等、どうぞお氣がるにお寄せください。次号に掲載いたします。

宛先 102 東京都千代田区神田小川町一ノ11・DMSビル内
関東氷上郷友会『山ざる』編集部

消 息

転居 (敬称略) 11変更事項のみ記載

足立(岡原)敦子 柏原町

〒347 加須市馬内一五二四一五 ☎〇四

八〇一六二一三七二〇

足立紘充 春日町

〒180 武蔵野市西久保三一二二一四

☎〇四二二一五六一〇九七 住友生命
総合法人部 ☎三五一一六九二五

足立 勝 青垣町

〒560 豊中市東泉丘一五二一五〇四

☎〇六一八四六一三五九五

青木(荒木)良子

〒569 高槻市西五百住町一一二〇 D

三〇一 ☎〇七二六一九五一九四二五

赤木(藤井)芳子 篠山町

〒176 練馬区光ヶ丘七一六一九一三〇二

☎九七六一八九二七

青田昌保 青垣町

同(大河)美代子 柏原町

〒350 川越市岸町一一九一五一六〇四

☎〇四九二一二六一二三二八

青田(徳田)耕一 氷上町朝阪

同 和代 氷上町沼

〒970 いわき市平城東二一七一六城東

マンションB三〇一

☎〇二四六一二一一五七九〇

有田 毅 氷上町谷村

〒145 大田区田園調布一一〇一二六

ハイホーム三〇六 ☎七二二一〇二七六
井上(植木)悦子 柏原町

〒162 新宿区市ヶ谷仲之町三番一三号全

信連一 二 号 ☎二二六一〇八二六

井上悦三郎 氷上町成松

〒330 大宮市土呂町三六九

☎〇四八六一五三一五二五七

井田(安田)悦子 市島町

〒270 流山市美田四五〇一〇一

☎〇四七一五二二九五〇

井本和宏 氷上町石生

〒194 町田市金森一八七九一四七

☎〇四二七一九六一六九八〇

稲次英機 柏原町

〒666 101 川西市清和台東二一四四

植田(善積)百代 春日町

昭和63・7より五年間アメリカへ

打田輝一 氷上町谷村

〒236 横浜市金沢区並木一三二二四

1二〇二 ☎〇四五七七四一四三八六

梅田忠広 山南町

在米中。連絡先は山南町和田三〇九

大江（足立）範子 東京

〒140 品川区東品川三ー一三ー二〇

ニューライフ東品川二〇四

☎七四〇ー三七三八

大垣和義

兵庫県へ

大木道則 山南町

〒700 岡山市大和町二ー四ー一六コーポ

三備二〇五

☎〇八六二ー二七ー一九二六

大野良夫 市島町

〒306 茨城県猿島郡総和町駒羽根一

三九二 ☎〇二八〇ー九二ー一八三五

荻野悦男 春日町

〒305 つくば市梅園二ー一四ー一

☎〇二九七ー四七ー四三二三

荻野哲夫 春日町

〒273 船橋市海神三ー三ー一七 共栄荘

☎〇四七四ー三一ー二八三〇 三宝デン

タルS ☎〇四七四ー二二ー二二五一

荻野芳伸

〒124 葛飾区奥戸三ー三ー二〇 奥戸ハ

イツ二〇三 ☎六九三ー六一七九 トー

ヨーサッシ(株)ビル建材本部設計部 ☎二

九二ー五五九〇

音無（山本）多美子 春日町

〒669 氷上郡春日町朝日一〇七〇ー

一 ☎〇七九五ー七四ー〇四〇五

北川義博 柏原町

〒920 金沢市本町二ー二ー四ステーション

ユンタウン小森六〇六 ☎〇七六二ー六

二ー七四二ー コーセー化粧品販売(株)金

沢営業所 ☎〇七六二ー六四ー三六二一

衣笠昭宣 山南町

同（秋山）雅美 春日町

〒245 横浜市戸塚区汲沢八ー三〇ー一五

一ー〇一コーポST ☎〇四五ー八六二

一四九五六

久下善生 春日町

〒315 鴻巣市ひばり野一ー二ー七 ☎〇

四八五ー四一ー〇五八 (株)東京久栄

☎〇四八二ー六八ー一六〇〇

小林（須原）隆代 市島町

〒340 草加市西町一ー二一

☎〇四八九ー二四ー一六一六

笹倉靖幸 山南町

〒194 町田市常盤町三五七七ー二

☎〇四二七ー九七ー六五〇八

下中昭男 山南町

〒532 大阪市淀川区西宮原二ー六ー二〇

一七〇八 ☎〇六一三九九ー〇八四六

〒236 横浜市長沢区金沢町八二ー一八

☎〇四五ー七八五ー二三一四

渋谷（梅垣）澄江 柏原町古市場

〒657 神戸市灘区天城通二ー三ー三

☎〇七八ー八六一ー六五三五

直田繁樹

〒211 川崎市中原区市ノ坪五一三立花荘

一〇一 ☎〇四四ー四三三ー八六八一

瀬川（宮崎）儀一 氷上町

〒231 川崎市宮前区鷺沼一ー三ー五ヴィ

ラデエステさぎ沼六〇三

☎〇四四ー八五四ー三六四三

高見寛明 春日町

〒651 神戸市北区甲栄台五ー一ー一

三〇 ☎〇七八ー五九四ー四三六三

滝浦(池畑) 佐代子 柏原町

〒661 尼崎市富松町三一五一五

☎〇六一四二九一四九一三

竹村龍雄 春日町

同(河南) 紀代子 春日町

〒065 札幌市南区澄川五条一丁目九一

一三 ☎〇一一一五八二一二八八五

中井良平 柏原町

〒272-01 浦安市美浜四一〇一七

☎〇四七三一二五三一八七九一

(住居表示変更)

中野(後藤) 公子 山南町

〒270-11 我孫子市白山三一八一〇一四

〇一 ☎〇四七一八五一二八六二

中松(上田) 美年子 柏原町

〒645 和歌山県日高郡南部町東岩代八六

七

中山博司 青垣町栗住野

〒156 世田谷区上北沢五一三三三三五

〇一

西浦(細見) 浩子 春日町

〒239 横須賀市馬堀町二一六〇防衛庁大

津宿舎三〇六

☎〇四六八一三三一八五八

能勢孝一 市島町

同(高雄) 恵美子

〒281 千葉市柏台一〇一〇一〇五

☎〇四七二一五一三六八四

広内康邦 山南町

〒251 藤沢市弥勒寺三一四一四メゾ

ンドクレール一〇一

☎〇四六六一二二一九四四六

藤本定也 山南町

〒222 横浜市港北区大豆戸町二二七東芝

菊名寮B三〇七

☎〇四五二四二二一五〇五二

宮本(柳瀬) 博子

〒740 岩国市尾津町一〇二一八メゾ

ン沖村一〇三

☎〇八二七一三二一五三二〇

森田淳二郎 篠山町

同(植木) まさ子 氷上町成松

〒166 杉並区高円寺南三一四一六

☎三一〇三三七

山口哲生 氷上町

〒064 札幌市中央区南六条西二二大和銀

行札幌寮 ☎〇一一一五六三三二五〇

大和銀行札幌支店 ☎〇一一一二六一

二三七一

山口康男 氷上町上新庄

〒981-31 仙台市加茂一三七一五

(泉市が仙台市に合併)

☎〇二二二三七八一三一〇一

山田(井元) 幸子

滞米中。連絡先〒259-11伊勢原市伊勢原

三一二七一三山崎順子方

山田隆央 氷上町新郷

〒983 仙台市宮千代二一三一一一二

〇一 ☎〇二二二二三五一五九六二

武藤工業(株)東北営業所 ☎〇二二二二九

一一八一四一

山田良一 氷上町新郷

〒277 柏市南増尾二一五二一九 ☎〇

四七一七六一三五四七 日立家電販売

☎〇四二二一四六一五四四一

山本高勇 春日町

〒910 福井市三郎丸二一〇四一二

☎〇七七六一二七〇三二八六 福井大学

工学部 ☎〇七七六一二三一〇五〇〇

由良孝二 春日町

〒271 松戸市竹ヶ花二三三松戸竹ヶ花パ

ークハウス四〇四 ☎〇四七三二一六二一

三九三四

吉井和弘 青垣町

〒180 武蔵野市吉祥寺北町二一三一四

☎〇四二二一〇一三三九八

運輸省港湾局 ☎五八〇一三一

吉竹俊道 柏原町

〒661 尼崎市武庫町一五〇一二安田火

災第二家族寮五八一 ☎〇六一四三二一

七八六一

吉竹正明 柏原町

〒190 武蔵村山市学園二一三六一

むさしの住宅二一四〇三 ☎〇四二五

一六六一四四二一 農水省 ☎五〇二一

八一一一内線五四五二

渡辺正幸 市島町下竹田

〒272 浦安市当代島一〇二〇一二ヴ

イラ・アデュサム二〇五 ☎〇四七三

五四一八九五八 第一勧業銀行 ☎五九

六一五八四七

新規収録

足立佳代子

〒167 杉並区西荻北三一三九一九カーサ

ニシオギ二一〇〇八 ☎三九七一八三二

八 早稲田大学在学中

足立貞雄 昭4 柏原町

〒243 厚木市森の里三一〇一八

☎〇四六二一四七一七七七八

足立哲哉

〒243 厚木市愛宕九四〇一二七サン

ハイム遠矢塚Ⅱ一〇二 ☎〇四六二一四

八一五五六九 東京工芸大学在学中

青田(森本)惇子 昭19 市島町

〒241 横浜市旭区左近山一四〇二左近山

団地一〇二一五〇六 ☎〇四五一三五

二一五三四七

大塚貴裕

〒177 練馬区下石神井四一三一二坂出

清穀方 ☎九九六一九五六六

早稲田大学在学中

大根川 孝

〒150 渋谷区恵比寿一一八一一一三〇

一

久保拓也

〒166 杉並区高円寺北四一三八一七朝霞

ハイッ北棟一〇二 東京大学在学中

後藤美紀子

〒107 港区赤坂七一六一七一六〇一

☎五八六一一三〇〇

近藤佳代

〒113 文京区本郷七一一一東大さつき

寮東京大学医学部付属看護専門学校在学

中

斎藤丈志 氷上町

〒194 町田市中町三一四一四河原荘

専修大学在学中

酒井信人 昭43 山南町

〒422 静岡市大谷三九三ー一 一粒荘

☎〇五四二ー三七ー九七四九 静岡大学

在学中

清水裕教 昭43 山南町谷川

〒194 町田市中町二ー五ー一七フオーラ

ム共栄四〇七 ☎〇四二七ー二七ー一五

三八 北里大学在学中

渋谷(野口)英子 市島町

〒170 豊島区南大塚一ー三七ー六

☎九四一ー一八三六

杉本(徳田)佳子 青垣町

〒338 与野市下落合一六五二ー二九高グ

リンハウス二〇一

☎〇四八八ー三三ー三九四五

高田俊樹 山南町

〒184 小金井市貫井南町三ー二ー二三

☎〇四二三ー八四ー六七〇八 住友生命

東京第三法人営業部 ☎三五八ー七六一

三 ゴルフ

高見 徹

〒192 八王子市石川町二六四八ー一グリ

インハイム桜塚二〇七 ☎〇四二六ー四

二ー六七六五

塚口達也 昭56 氷上町油利

〒181 三鷹市下連雀五ー五ー三一五一五

☎〇四二二ー四五ー五二九九 郵政省大

臣官房建築部

富田(能勢)貞子 昭20 春日町野上野

〒273ー01 鎌ヶ谷市鎌ヶ谷三ー一ー五四

☎〇四七四ー四四ー六八一八

深田浩嗣 昭14 山南町

〒112 文京区大塚六ー二六ー八ー三四一

☎九四一ー一八九五三 兵庫県東京事務所

☎二六一ー四二六六

福井律文 昭45 氷上町

〒222 横浜市港北区師岡町一ー一〇早川

方 ☎〇四五ー五四三ー五四二四

慶応義塾大学在学中

藤原一義 昭29 山南町

〒350ー13 狹山市大字上広瀬二五九ー一

つじ野団地四ー一〇ー一〇二 ☎〇四

二七ー五三ー四九ー五 ダンザス(株)七

六九ー五五一

藤本和幸 昭33 山南町

同(山崎)さゆり 昭33 山南町

〒181 三鷹市牟礼三ー一〇ー二二ブルー

ムパレスー〇五 ☎〇四二二ー四九ー七

二二六

元村(垣本)典子 氷上町

〒146 大田区池上八ー一四ー五日航池上

第二社宅三〇二 ☎七五五ー六三一四

森本 修 昭19 市島町

〒221 横浜市神奈川区片倉町三三八グン

ゼアパート二〇一

山蔭あや子 明45 柏原町

〒274 船橋市松ヶ丘四ー四ー一五

☎〇四七四ー六二ー二二三三

大和季代子

〒136 江東区南砂七ー一ー二五南砂公園

ガーデニア八〇八 ☎六四六ー四二二二

由良俊之

〒963ー07 郡山市田村町金屋字上河原一

二二ー二平和荘田尻和子方

日本大学在学中

丹波の秘醸酒

春日の
華音



(名) 西山酒造場

兵庫県氷上郡市島町中竹田一一七一
電話(0795)86・0331(代)

建築材料販売工事

建設大臣許可 第 1834 号

中央建材工業株式会社

常務取締役
東京支店長

荻 野 武

(市島町出身)

本 社 名古屋市千種区高見 1－6－1
電話 052 (761) 6181 (代表)

東 京 支 店 東京都中央区銀座 7－14－3
電話 03 (543) 8106 (代表)

大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1－8－15
電話 06 (443) 6665

仙台出張所 仙台市高松 2－11－15
電話 0222 (73) 5724

札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7－12
電話 011 (271) 3961

新潟出張所 新潟市米山 5－1－25
電話 0252 (45) 1705

松本出張所 松本市野溝木工 1－6－58
電話 0263 (25) 0351

広島出張所 広島市西区中広町 1－4－16
電話 082 (291) 3780

社会福祉法人
調布市社会福祉協議会

理事 木村 つた江

東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5
電話 (03) 300 - 6895

株式会社 近藤写真製版所

取締役社長 近藤 勇夫 (国領出身)

東京都新宿区下宮比町2番17号 電話 03-260-6281 (代表)

足立かをる

〒232 横浜市南区大岡 4-19 上大岡ハイツ A414

電話 045-715-5387番

同好会：日本のおどり 端唄と三味線

土曜日 午後1時～5時

老若男女 初心者 歓迎

指導 西崎 祥 (柏原町出身)

〒141 東京都品川区西五反田8-10-14-201 電話(03) 491-8962

南海工業株式会社

社 長 石 亀 義 明

(旧姓足立 青垣町佐治出身)

本 社：東大阪市大蓮東 2-12-4

JIS工場：電話 06(721)5454/5455

柏原工場：氷上郡柏原町拳田小字浅川160-1

電話 07957 (2)3744

消費税・法人税・所得税・相続税・贈与税
の相談・代理申告

船越税理士事務所

税 理 士 船 越 祥 郎

(春日町多田出身)

〒196 東京都昭島市郷地町 2-17-9 電話(0425)44-5997

埼玉日産モーター株式会社

取締役相談役 大 西 俊 治

〒338 埼玉県与野市上落合950 電話 (0488) 59-5103番



あらゆるスポーツウェアのご相談は当社へ

Roble **J-フジスタ-株式会社**

取締役会長 吉 住 重 造 (春日町中山出身)

〒101 東京都千代田区東神田2-4-7 電話 (03) 866-9121 (代)

大菱印刷有限公司

田 中 寛 (山南町出身)

〒110 東京都台東区台東1-27-5 大塚ビル

☎03-833-1595

激動の時代と共に綴るあなたの昭和史 記入式・自分史年表 **昭和メモリー**

■B5判 192頁／定価 2,000円・送料無料

『大船調映画』の盛衰を描くドキュメント 撮影所のある街 **大船物語**

升本喜年 著 ■四六判 242頁／定価 1,500円・送料無料

株式会社 **ホンゴ出版** 東京都中央区日本橋茅場町3-3-4 坪井ビル
〒103 ☎03(666)1922(代表)

代表取締役 池田 忍

郵便振替 東京 3-144071

株式会社 三 葉 水 道

代表取締役 橋 爪 忠

(氷上町黒田出身)

〒276 千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電話 0474-84-7121番 FAX 0474-82-9626番

門と塀と庭 ブロック 門扉 車庫
プレハブ サンルーム ベランダ 温室

株式会社 大_{ダイ} 樹_キ

代表取締役 岡 吉 明

(柏原町出身)

〒351 和光市南1-11-40 電話 (0484) 63-4420 (代表)

ふ ぐ 料 理
千 葉

東京都豊島区東池袋 1-25-15

電話 (03) 971-7948 / 985-7264

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に 明日香園の健康銘茶を！

《明日香園のオリジナルブランド》 ウーロン茶の缶ドリンクが
ただいま大好評です。各種御注文は本社工場にて直接承ります

創業明治四年 伝 統 銘 茶

株式会社 明日香園

代表取締役社長 池畑豪士郎

本社：東京都千代田区九段北 2-3-2 電話 (03) 265-2579

本社工場（御注文承り先）兵庫県氷上郡柏原町南多田3146

電話 (0795) 72-3588 フリーダイヤル0120-180127

直販店：西武百貨店池袋本店B 1 電話981-0111（内線）2044

MIWA

私たちはスーパーC言語C++の国内唯一の開発元として
つねに時代の一步先を行くソフトウェアを提供し続けます

主要プロダクツ；電気工事積算システム MEE
プログラミング言語 MIWA C++

代表取締役 足立謙悟 (氷上町出身)

株式会社ミワシステムズコンサルティング
本社 〒220 横浜市西区岡野1-13-13 電話(045)312-5418

東急建設株式会社

専務取締役 芦田重秋

〒150 東京都渋谷区渋谷一丁目十六番十四号
渋谷地下鉄ビル内
電話東京〇三(四〇六)五一一一(大代表)



ディーゼル機器のカーエアコンは国内はもちろん、世界
に気持のよい風を送っています
お子様の学力向上には公文式の算数・国語教室で

足立和巳

自宅 府中市栄町一ー一五ー二七
電話(〇四二三)六四一七二七

足立勲平

〒251 藤沢市鵜沼 藤ヶ谷一ー七ー四
電話〇四六六(二七)二六四六

交通毎日新聞編集局

次長 足立 静雄

東京 交通 毎日 新聞 社
東京都港区赤坂二ノ四ノ一(白亜ビル)
電話 六四二―三四一四番 〒107

日本損害保険協会
特級(一般)資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所

飯田 光雄

自宅 四街道市旭ヶ丘 三一九―二
〒284 電話〇四三四(三二)二二八〇

足立 誠一

〒248 鎌倉市鎌倉山四ノ八ノ二五

新明和オートエンジニアリング株式會社

取締役社長 生田 清弘

〒230 横浜市鶴見区尻手三丁目二番四三号

足立 徹

〒155 世田谷区北沢一―三五―六一―一〇四
電話(〇三)四一二―二四八二番

上田 脩
(春日町棚原)

〒105 東洋リノリウム株式会社
東京都港区虎ノ門一丁目十二番十五号
TEL (〇三)五〇三一六二二―一番

N H K 編成計画室

上 野 重 喜

〒150-01
渋谷区神南二ノ二ノ一
電話(〇三)四六五一一一一内線二七〇二

上 山 顯

〒106
東京都港区元麻布二ノ一一ノ三六ノ五〇三

日本製薬団体連合会

理事 長 江 間 時 彦

103
東京都中央区日本橋本町二の一の五(薬業会館)
電話(〇三)二七〇(〇五五八三番(代表))
(〇五五八三番(直通))

日製産業株式会社

取締役会長 大 木 正 徳

〒105
東京都港区西新橋一丁目四ノ一四
電話(〇三)五〇四一七一一番

パイオニアLDC株式会社

取締役 大 西 修 三
総務部長

本社153 東京都目黒区目黒一丁目四番一号
ダイヤルイン 〇三一四九五―九八五一番

大 野 善 三

自宅 〒228 相模原市相模台七―二五―八
(〇四二七―四六―八七九〇)

(株) パンオーディオシステム

代表取締役 岡 林 逸 男

〒330 大宮市盆栽町五一四(押田ビル)
TEL(〇四八六)六五―三六九四(代表)
〒167 東京都杉並区善福寺四―八一―九
TEL(〇三)三九四―六八四四

参議院 大蔵委員長

梶 原 清

〒100 東京都千代田区永田町二ノ一ノ一
参議員議員会館七三三号
電話(〇三)五〇八一八七三八

社団法人 日本鍼灸師会会長
厚生省鍼灸等中央審議会委員

小 川 晴 通

新宿杏林堂 東京都新宿区西新宿一ノ二六ノ二
〒163 新宿野村ビル5F
電話 〇三―三四八―〇七三二

小 田 富 士 夫

梶 原 康 弘

〒669-23 後援会事務所
兵庫県多紀郡篠山町北新町一一七
電話(〇七九五)五二―三〇八八

木 呂 子 恵 美 子

小糸イキ

坂上勝朗

静岡大学教授

坂本重雄

自宅〒422 静岡市小鹿三丁目四―五
公務員住宅八―二六
電話 〇五四二(八二) 八〇五八番

佐々木盛雄

〒161 東京都新宿区中井二―十一―十八

笹倉強

〒352 新座市栄四ノ五ノ二五
〇四八四―七七―五六四〇

須原清

〒164 東京都中野区南台五の三〇の六
電話 (〇三) 三八一―一六二―一 番

勢川武彦

〒164 東京都中野区東中野二ノ一七ノ二〇
電話 (〇三) 三六一—八六七六番

田中篤郎

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一—二四—一七
電話 (三三) 一〇七六番

江南ハウジング株式会社

専務取締役 千種倫幸

〒102 東京都千代田区麹町五丁目七番地
紀尾井町TBR七—二二号
電話 代表 (二三) 三六三一

常岡幹彦

鶴田宏

参議院議員

田 英 夫

藤 田 正 雄

中 井 良 平

〒229 浦安市美浜 四ノ一ノ七
電話(〇四七三) 五三一八七九一

八王子 青葉靈苑
青葉山 眞照寺

(都営八王子靈園となり
新設墓地分譲本年度開始)

住職 堀 井 隆 川

〒193 東京都八王子市元八王子町三一三三九七
電話(〇四二六) 六三一八四〇三

波 多 洋 三

〒112 文京区春日二一七一二
電話(〇三) 八一一一二八六〇番

エクステリア専門商社
株式会社 大 洋

取締役社長 松 下 文 雄

本社 〒351 埼玉県朝霞市膝折三一七―五
電話(〇四八四) 六六一一五五一(代)

非破壊検査株式会社

常務取締役
企画事業本部長

水 船 隆 昌

〒102 東京都千代田区六番町六
勝永六番町ビル3F
電話(〇三)二二二一七二一(代表)

ウエディングドレス専門創作卸

(株) シヤルム商会

常務取締役
東京店店長

村 上 昇

東京店 〒164 東京都中野区弥生三ノ五ノ三
電話(〇三)三七四一〇二一五(代)
本社 〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話(〇七五)二二二一〇二一五(代)

だいな
大七証券株式会社銀座支店

第一営業部

首 席

安 田 功

〒104 東京都中央区銀座四丁目一〇番三号
電話(〇三)五四五一九一一(代)

安 原 三 智 子

株式会社 EPDC インターナショナル

第二火力部長

若 森 敏 郎

〒103 東京都中央区日本橋室町四丁目一番五号(共同ビル)
技術士(電気部門)
電話(〇三)二四二一五七七(代表)
二四二一五七九六(直通)

渡 邊 隆 男

編 記	集 後
--------	--------

▲六十四年の歳月を重ね
中身も濃かった昭和も終
り、平成の代を迎えまし
た。願わくは文字どおり

平成の日の続く御代であってほしい。
▲「山ざる」第20号ときりのよい号を
お届けします。会員の皆様のご協力を
得て原稿も集まるようになりました。
丹波を思う文が多いのは当然ですが、
これらの寄稿を拝見して感じるの
一つは感傷型であり、他は環境の激変
を嘆く幻滅型に二分されるようです。
さてあなたはどの型でしょうか。少し
ハミ出し型もあってほしいものです。
▲丹波の祭典「ホロンピア」も大成功
のうちに終了した由にて、大慶千万に
存じます。今後は丹波の森造りに向け
て運動が展開されると、丹波新聞社の
日原記者がレポートを寄せて下さいま
した。ますます緑豊かな大自然に恵ま
れた丹波を期待したいものです。また
「春日局」も「氷上興し」に大いに寄
与しているそうです。村上久夫氏に分
りやすい解説をお寄せ頂きました。

▲上田三四二さんがなくなられ、学友
のお二人から追悼文が来しました。ご著
書を通じてお人柄を想像していました
が、なるほどと感じ入った次第です。
劍禅一如ともいふべき澄明具眼の詩人
は容易には現れますまい。残念です。

▲原稿を拝見していたら「道草」とい
う言葉に出会いました。懐しい言葉で
す。子供のころは毎日、先生や親から
耳にタコができるほど聞かされた言葉
です。この言葉ひとつからでも、小学
校の行き帰りのいろいろのことが浮か
んできます。きょうびは、太平の世と
はいえ、競争社会は子供までまきぞえ
にして、学習強制は幼稚園以前にまで
下ってきたとか。昔は……と、またし
ても言いたくなるような暗い気持ちに
させられます。

▲かつて、吉田政治の末期にやり場の
ない怒りを抱かされた記憶があります
が、いまの政界は全く同じ思いの毎日
です。逆境に耐えて希望の灯を守り、
視聴者に大きな感動を与えた「おしん」
が、こんな汚れた場に引き合いに出さ

れては迷惑千万です。威武も座する能
わず、富貴も淫する能わず、とまでは
求めませんが、当事者はいま少し金銭
にシャイであってほしいものです。

▲最近急速に老朽化が進む編集子は、
アチコチの部品も傷み、本体まで怪し
うなっています。子供のころ「先ず健
康」という標語がありました。会員の
皆様にこの言葉をお贈りします。(源)

山ざる 第20号

平成元年五月三十日発行

編集委員

足立源治 足立和巳 大野善三

小田富士夫 小杉仙生 田中寛

坂上勝朗 田中篤郎 常岡幹彦

鶴田ゆき子 宮野近 渡辺隆男

発行者

関東氷上郷友会会長 村上末吉

〒102

東京都千代田区神田小川町一ノ十一

DMSビル内・☎〇三(二九三)二九五五

振替・東京一―二二二―三三〇

製作 (株)二玄社

楽しさのバリエーション

多彩で華麗なナイトステージ

エスカイヤクラブを頂点に、銀座をはじめ札幌から
鹿児島まで全国160余店を誇る多彩な
フロアバリエーション。独自のシステムで
鮮やかなナイトライフを描く大和実業グループ。



日本で育まれた
会員制クラブの名門
エスカイヤクラブ

洗練された大人のためのプレイゾーン

- | | |
|------------|-------------|
| ■クラブV-O | ■サ・トップクラブ |
| ■V-Oキューティ | ■ミュージックサロンの |
| ■V-Oローズルーム | ■スイートクラブ |
| ■セブティッククラブ | ■サ・セラーズ |
| ■舞 妓 | ■すすめの学校 |
| ■サ・トップクラブ | ■めだかの学校 |



いけす活魚料理の本場味処
やくら亭



江戸前のイキの良き一
ネタ自慢の味わい処
やくら寿司



心あたまるパニエーのサービス、
くつろぎのフロア。
ザ・ロイヤル



ワインをもっと自由に気軽に。
ちょびり気の利いた飲み方で。
ザ・ワインバー



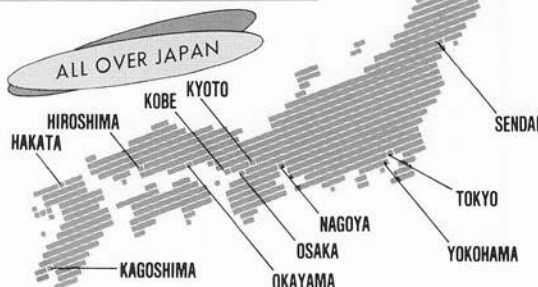
爽しきつばいづめこんだ
西洋酒。酒。酒。
やくらふあーむす



都会の中のふらりと気分、若者のが盛り広場。
樽茶屋



モダンに飲んで、モダンに食べる。
ライト感覚車バー。
くしこ



ライト & カジュアルライクな焼肉ハウス。
焼肉ハウス298



おしゃれなヤングの小粋な料理。
ワンダーバー・ギャルズ



アメリカンカジュアルレストラン & バー。
ジェファアゾンクラブ



気軽に飲んで、楽しく食べる。
カジュアルバー。
ジェファアゾン



モダンでおしゃれなショットバー。
カフェバフ



ニューカルチャー派の
ファンタスティックカフェ・バー。
カフェ5/6



南国ムードたっぷり
トロピカルバー & レストラン。
プカプカ



レーサーが彩るファッションブル
スーパーディスク
ラジオシティ



ディスコを超えた愉快空間。
アルファクラブ



ウイスキーがウイスキーらしく
うまく飲れる本格派バー。
サントリージガーバー



ウイスキーがウイスキーらしく
うまいワンショット・バー。
エスプリ



最高の料理を最高の空間で。
本格派ダイニングバー。
ゲストハウスプレゴ



いいオナのための
新・歓空間。
ダイニング・バー・アクシム



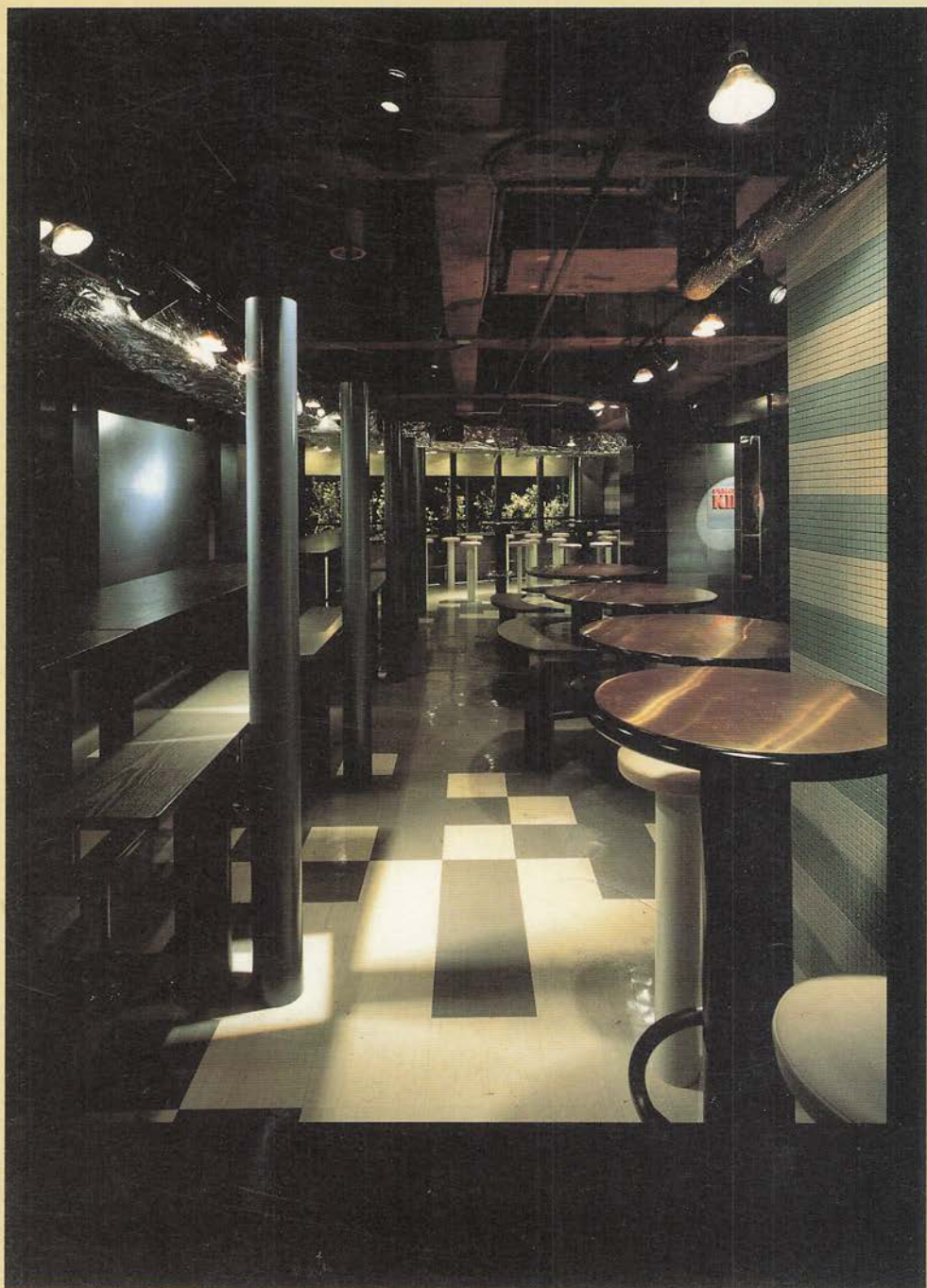
新しくなつたしい
西洋酒場。
白札屋



旬の味わいを。
心地良い和の風情の中で。
酒膳 醍醐

大和実業株式会社 代表取締役社長 岡田 一 男 (春日町 三井庄出身)

本社：大阪市北区芝田2丁目1-18 西阪急ビル10F TEL. 06(372)8571



設計・施工 桂建築計画工房